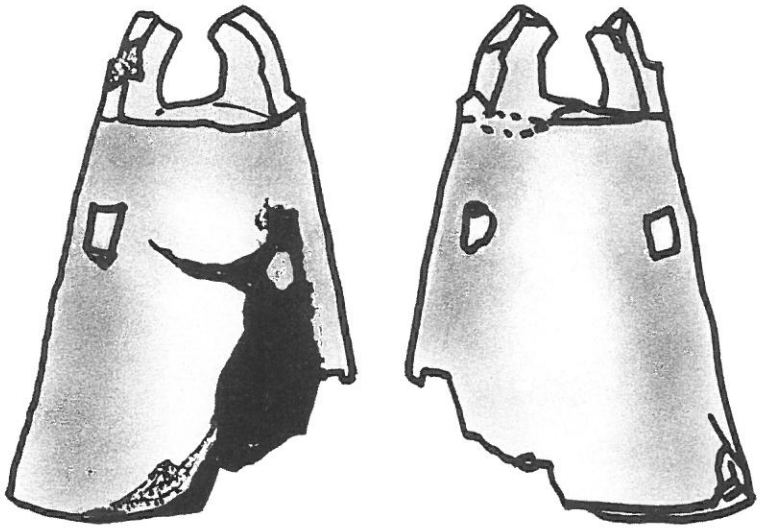
三木市文化研究資料第14集
発掘調査概要報告第2号

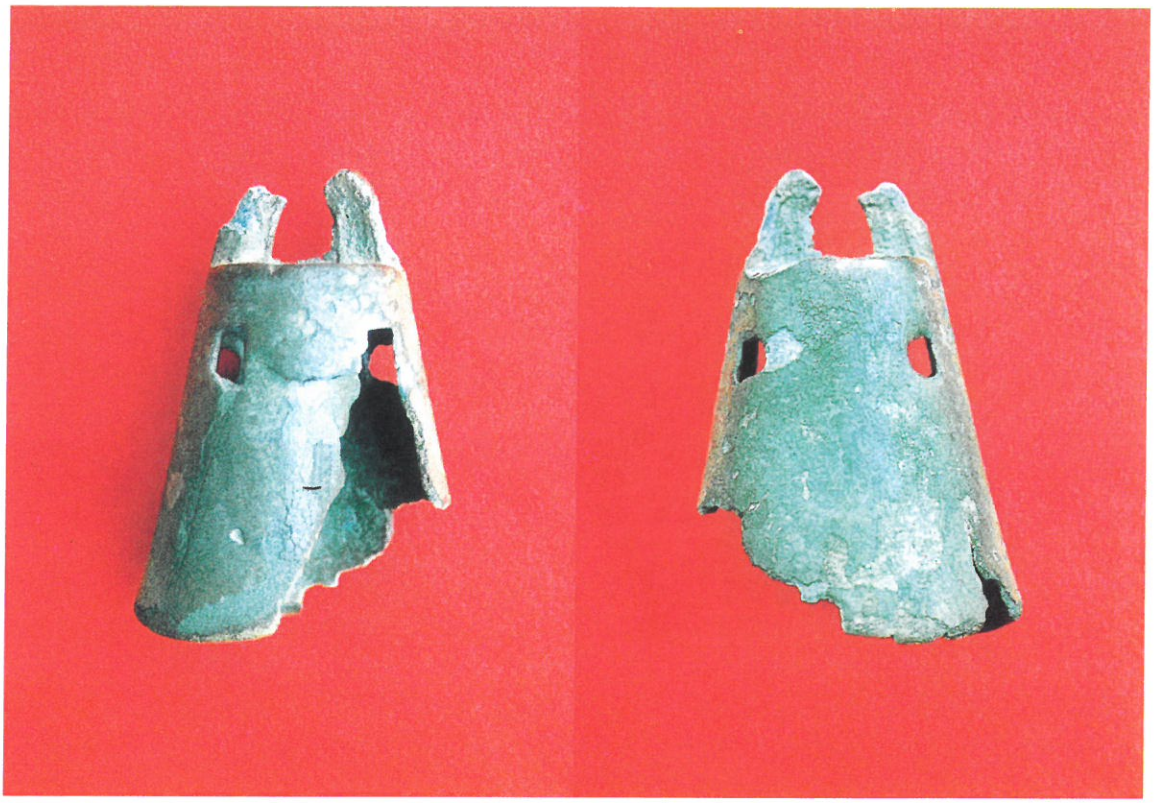
三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ

＝昭和60年度～平成6年度＝



平成12年3月

三木市教育委員会



高篠谷ノ郷遺跡出土小銅鐸　高さ 約6.0cm（三木市指定文化財）
幅　約2.7cm

久留美中筋遺跡出土東大寺軒平瓦（東大寺再建時の瓦）

はじめに

豊な自然と美囊川の流れとともに古くから歴史が育まれ、「金物のまち」として発展してきた三木市は、今、２１世紀に向けて新しいまちづくりが着々と進んでいます。

こうしたなかで、近年、ほ場整備事業をはじめとする開発事業の増加に伴って、埋蔵文化財の発掘調査も数多く実施されてきました。

その結果、新たに見つかった遺跡が多く、豊かな歴史と貴重な遺産に恵まれていることがだんだん明らかになってきました。

このたび、昭和６１年に刊行しました『三木市埋蔵文化財調査概報－昭和５０年度～昭和５９年度－』の続編として、昭和６０年度から平成６年度にかけて実施した発掘調査の成果を冊子として取りまとめました。本書が広く活用され、さらに郷土の歴史へのご理解を一層深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、市内各地域での発掘調査に際して、深いご理解とご協力をいただいた地元の皆様をはじめ、厳しい気候条件での発掘調査に従事いただいた方々並びにご指導ご協力賜りました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成１２年３月

三木市教育委員会

教育長　東　野　圭　司

例　　言

1．本書は、三木市教育委員会が昭和６０年度～平成６年度に実施した市内遺跡発調査の成果を紹介するために作成した概要書である。

2．調査は、兵庫県教育委員会の指導を受けながら、三木市教育委員会が行い、社会教育課文化芸術係毛利哲夫、松村正和、小網豊が担当した。

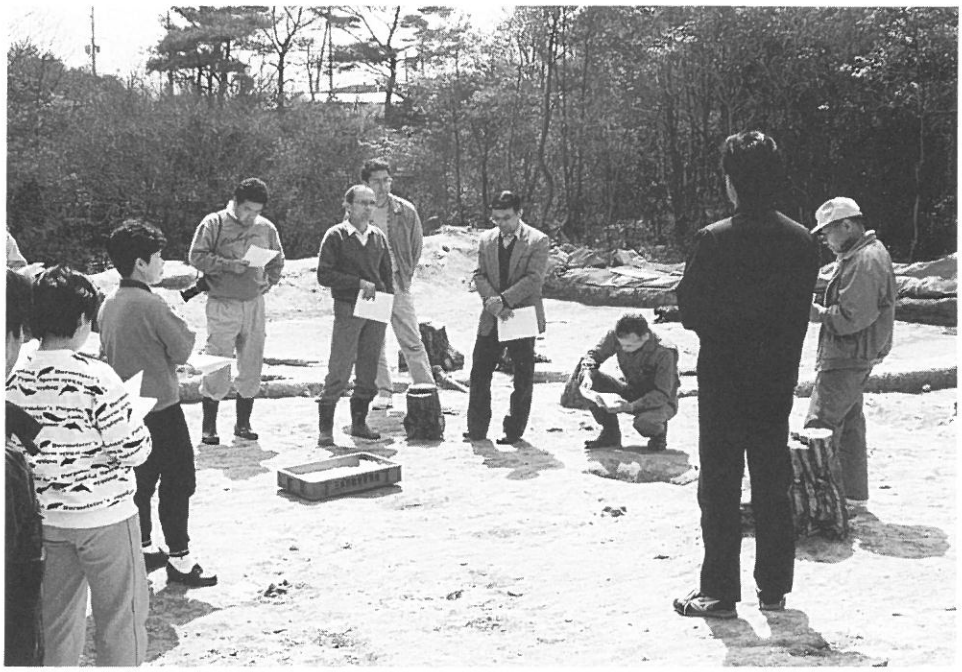
3．実績報告及び報告されている『社会教育活動報告書』に基づき、各遺跡の担当者の教示を受けながら、本書の執筆は社会教育課文化芸術係松村正和、小網豊が行った。
　なお、田井野遺跡の調査区図は、兵庫県文化財調査報告第１５４冊「田井野遺跡」掲載の図版を、一部加工し引用した。

4．本書は三木市教育委員会が実施した発掘調査の状況を公開するための概報であり、調査の詳細については調査報告書及び調査担当者に照会されたい。

5．今回の報告する全遺跡の位置図及び各遺跡の調査位置図には、国土地理院２万５千分の１図及び５万分の１図を使用した。

6．現地での調査作業、遺物などの整理作業にご指導、ご協力していただいた多くの方々には、ご芳名は省略しますが、ここにお礼申し上げます。

7．本書に掲載した遺物などについては、三木市埋蔵文化財整理室において保管している。



現地説明会風景（小林八幡神社遺跡）

目　　次

1　発掘調査の推移

発掘調査状況の動向－昭和６０年度から平成６年度－　……　1 P

2　発掘調査の概要

調査遺跡位置図　……　9 P

佐野遺跡　……　11 P
円満寺遺跡　……　14 P
窟屋扇ノ坂古墳　……　17 P
中谷遺跡　……　20 P
梨ノ木遺跡　……　22 P
高篠谷ノ郷遺跡　……　26 P
君ヶ峰城跡　……　30 P
東中遺跡　……　33 P
伽耶院東遺跡　……　36 P
興治１０号墳　……　38 P
三木城本丸遺跡　……　40 P
小戸田遺跡　……　43 P
久留美門前遺跡　……　48 P
戸田井ノ姿々遺跡　……　52 P
久留美上野ノ下遺跡　……　54 P
久留美田井野遺跡　……　59 P
小林八幡神社遺跡　……　63 P
久留美丈ノ越遺跡　……　70 P
久留美松ノ下遺跡　……　77 P
正法寺古墳群　……　81 P
久留美中筋遺跡　……　85 P

発掘調査事業の動向　― 昭和６０年度～平成６年度 ―

三木市では、昭和５８年度より志染地区、昭和６０年度より三木北部地区で大規模な県営ほ場整備事業が始まった。また平成元年度からは、久留美地区をはじめとする団体営ほ場整備事業が本格化してきた。ほぼ同時にほ場整備事業以外の公共事業も年々増加してきた。これらの事業に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。昭和６０年度～平成６年度のほ場整備事業に伴う発掘調査件数は９９件で、そのうち７０件の確認調査、２３件の全面調査を実施した。このほかに公共事業に伴う確認調査を１件、全面調査を５件実施した。

昭和６０年度は、県営ほ場整備事業の三木北部の細川町で１工区、志染地区で１工区が施工され、また一般住宅開発が１件施工されるのに伴って実施した調査件数は５件であった。昭和６１年度は、県営の三木北部の細川町で１工区に加えて口吉川町で１工区、志染地区では２工区が施工されるのに伴って実施した調査件数は８件であった。昭和６２年度は、県営の三木北部の細川町で２工区、志染地区で２工区が施工されるのに伴って実施した調査件数は５件であった。昭和６３年度は、県営の三木北部の細川町で２工区、志染地区では、４工区が施工された。さらに公共事業で総合運動公園・中学校建設が施工されのに伴って実施した調査件数は９件であった。平成元年度からは、団体営ほ場整備が加わって事業数が増加した。県営の三木北部は細川町で３工区、口吉川町で１工区、志染地区で３工区施工された。また団体営では岩宮・興治の２工区が施工され、これらに伴って実施した調査は１１件であった。平成２年度は、県営の三木北部の細川町で３工区、口吉川町で１工区、志染地区で２工区が施工された。団体営では、久留美地区で１工区が施工された。さらに公共事業が２件施工され、これらにともなって実施した調査は１５件であった。平成３年度は、県営の三木北部の口吉川町で２工区、志染地区で３工区施工された。団体営では久留美地区の３工区、さらに一般開発が１件施工され、これらに伴って実施した調査件数は１１件であった。平成４年度は、県営の三木北部の細川町の２工区、口吉川町で１工区、志染地区で２工区施工された。団体営では久留美地区の１工区、さらに公共事業で１件、一般開発で１件施工され、これらに伴って実施した調査件数は１２件であった。平成５年度は、県営の三木北部の細川町で１工区、口吉川町で２工区が施工された。団体営では久留美地区で３工区、宿原・正法寺地区で各１工区施工された。さらに公共事業で１件施工され、これら伴って実施した調査件数は１１件であった。平成６年度は、県営の三木北部の細川町で２工区、口吉川町で２工区、志染地区の１工区が施工された。志染地区は今年度でほ場整備事業が終了した。団体営では久留美地区で２工区、宿原地区で１工区、正法寺地区で１工区施工された。これらに伴って実施した調査件数は１２件であった。このように平成元年度から年間の調査件数が増加してきたため、埋蔵文化財の担当職員を１名増員して対応してきた。

なお、最後に昭和６０年度から平成６年度までの発掘調査事業の一覧表を掲載しているので参照していただきたい。

昭和６０年度　調査遺跡一覧

遺　跡　名	所　在　地	事　業　名	調査の種類	調査面積	調査期間	調　査　概　要	参照
豊地佐野遺跡	細川町豊地 字佐野	県営ほ場整備	確認調査	256㎡	60.10.21～ 60.11.14	ピット等遺構検出 一部現状保存。	11
豊地佐野遺跡	細川町豊地 字佐野	県営ほ場整備	全面調査	144㎡	60.11.15～ 60,12,8	掘立柱建物５棟、ピット群 平安時代後期	11
窟屋散布地	志染町窟屋	県営ほ場整備	確認調査	176㎡	60.10.18～ 60.11.18	１箇所のトレンチから 遺構を検出。ハッチャシキ。	
窟屋ハッチャシキ	志染町窟屋	県営ほ場整備	全面調査	324㎡	60.12.9～ 60.12.28	土壙５、ピット７検出 寛永通宝、石臼、瓦片出土	
三木新城	上の丸町	一般住宅開発	確認調査	60㎡	61.1.6～ 61.1.20	備前焼大甕片等遺物の出土 あるも、遺構の検出なし	40

昭和６１年度　調査遺跡一覧

遺　跡　名	所　在　地	事　業　名	調査の種類	調査面積	調査期間	調　査　概　要	参照
豊地散布地	細川町豊地 字宮の西 字上ノカチ	県営ほ場整備	確認調査	62㎡	61.9.19～ 61.10.7	字上ノカチで溝、ピット 検出。現状保存。	
豊地円満寺遺跡	細川町豊地 字円満寺	県営ほ場整備	確認調査	92㎡	61.10.23～ 61.11.5	古墳時代、鎌倉時代の遺構 検出。一部現状保存	14
南畑散布地	口吉川町南畑	県営ほ場整備	確認調査	92㎡	61.11.6～ 61.11.15	鎌倉時代の遺構を検出 現状保存	
豊地円満寺遺跡	細川町豊地 字円満寺	県営ほ場整備	全面調査	218㎡	61.11.16～ 61.12.23	古墳時代の溝、土壙等検出 杯身、杯蓋等遺物出土	14
窟屋散布地	志染町窟屋 字窟屋口	県営ほ場整備	確認調査	30㎡	61.8.7～ 61.8.9	隣接して古墳と推定される 「どっこいさん」が所在す るが、遺構の検出はない	
窟屋散布地	志染町窟屋 字奥田	県営ほ場整備	確認調査	76㎡	61.10.23～ 61.10.28	遺構の検出なし	
安福田散布地	志染町安福田	県営ほ場整備	確認調査	132㎡	61.10.29～ 61.11.14	遺構の検出なし。	
窟屋扇ノ坂古墳	志染町窟屋 字扇ノ坂	県営ほ場整備	全面調査	255㎡	一次 61.8.11～ 61.9.24 二次 61.12.22 62.1.31	径約１０ｍの円墳、横穴式 無袖石室。埋土から平安後 期の碗、床面から古墳後期 の杯や玉類などが出土。 棺台の石列を３列検出。	17

昭和６２年度　調査遺跡一覧

遺　跡　名	所　在　地	事　業　名	調査の種類	調査面積	調査期間	調　査　概　要	参照
安福田散布地	志染町安福田	県営ほ場整備（２－４工区）	確認調査	60㎡	62.11.19～62.11.30	遺構検出なし。工事中の２－３工区で弥生、平安の遺物採集、遺跡か。	
志染中谷遺跡	志染町志染中字中谷（３－１工区）	県営ほ場整備	確認調査	214㎡	62.10.27～62.12.25	溝、杭列等の遺構検出。墨書土器、曲げ物等出土。遺物包含層検出、現状保存	20
志染中梨ノ木遺跡	志染町志染中字梨ノ木（３－２工区）	県営ほ場整備	確認調査 全面調査	196㎡ 220㎡	62.12.1～63.2.1	古墳時代の遺構検出、一部現状保存。	22
細川中上散布地	細川町細川中上	県営ほ場整備	確認調査	120㎡	62.8.17～62.8.26 62.10.19 11.5	大日神社下段の大日橋周辺で、ピット、集石遺構を検出、現状保存。	
桃津遺跡	細川町桃津	県営ほ場整備	確認調査	212㎡	62.11.14～62.12.4	ピット、溝、土壙を検出現状保存	

昭和６３年度　調査遺跡一覧

遺　跡　名	所　在　地	事　業　名	調査の種類	調査面積	調査期間	調　査　概　要	参照
志染中学校遺跡	志染町志染中	県営ほ場整備（３－３工区）	確認調査	156㎡	63.6.6～63.6.21	中学校の西Ｇ１２及び東のＧ３３で遺構と包含層検出現状保存	
井上散布地	志染町井上	県営ほ場整備（4-1,-2工区）	確認調査	168㎡	63.5.7～63.7.6	４－２工区のＧ５で、弥生遺物包含層を検出するも、両工区とも遺構の検出なし	
御坂散布地	志染町御坂	県営ほ場整備（5-1,5-2工区西区域）	確認調査	164㎡	63.11.7～63.12.1	５－２工区北端のＧ９，10で弥生土器出土。遺構は両工区とも検出なし	
大谷散布地	志染町大谷	県営ほ場整備	確認調査	132㎡	H1.2.22～H1.3.8	伽耶院東において、遺構及び遺物を検出、坊跡か。一部現状保存。	
高篠散布地	細川町高篠	県営ほ場整備（9-2県道東工区）	確認調査	228㎡	63.8.12～63.9.7	字谷ノ郷地区で遺構を検出（谷ノ郷遺跡）したほか、もう一地点でも遺構を検出。	26
桃津散布地	細川町桃津字お構え 他	県営ほ場整備（10-3工区）	確認調査 全面調査	96㎡ ㎡	63.8.2～9.8 H1.1.24~2.20	惺窩生誕地東背後の段丘上から遺構を検出。一部保存	
高篠散布地	細川町高篠	県営ほ場整備（9-1、9-2県道西、及び10-4工区）	確認調査	268㎡	63.10.28～H1.1.17	９－１，－２県道西工区からの遺構検出なし。１０－４工区の川沿いで遺構検出。	
高篠谷ノ郷遺跡	細川町高篠字谷ノ郷	県営ほ場整備	全面調査	1,220㎡	63.9.12～63.12.6	中世の掘立柱建物、小鍛冶跡、土壙墓等検出。碗、鉄滓、小銅鐸出土	26
君ヶ峰城跡(付城)	宿原	三木山総合運動公園、三木東中学校建設	全面調査	760㎡	63.4.1～63.4.30	主郭内から片庇付礎石建物擂鉢、壷、中国製陶磁器	30

平成元年度　調査遺跡一覧

遺　跡　名	所　在　地	事　業　名	調査の種類	調査面積	調査期間	調　査　概　要	参照
井上散布地	志染町井上	県営ほ場整備（4-3,-4工区）	確認調査	188㎡	1.5.22～1.7.4	４－３工区のＧ１７の１箇所から遺構を検出	
金屋散布地	細川町金屋	県営ほ場整備	確認調査	136㎡	1.7.14～1.8.8	県道周辺のＧ２３，２６で遺構を検出	
入野散布地	細川町入野	県営ほ場整備	確認調査	64㎡	1.8.8～1.8.29	Ｇ２で中世のピット、焼土面等の遺構を検出。	
御坂散布地	志染町御坂	県営ほ場整備（5-2工区東区域）	確認調査	56㎡	1.8.22～1.9.11	Ｇ４で弥生後期の土器片多数出土、明確な遺構なし。	
井上遺跡	志染町井上	県営ほ場整備	全面調査	220㎡	1.9.14～1.10.27	４－３工区Ｇ１７水田土壙、溝、ピット検出。土壙内より弥生土器多数	
伽耶院東遺跡	志染町大谷	県営ほ場整備	全面調査	670㎡	1.9.20～1.11.15	昨年度末の確認調査に基づき、Ｇ２，７設定水田を調査区として実施	36
岩宮散布地	岩宮	団体営ほ場整備（県道東の1工区及び県道西の2工区）	確認調査	212㎡	1.11.16～1.12.12	両工区とも遺構の検出はないが、遺物の出土状況から段丘上に遺跡の可能性あり	
東中散布地	口吉川町東中	県営ほ場整備	確認調査	165㎡	1.12.18～2.1.11	Ｇ８～１４で柱穴、溝等の遺構を検出。Ｇ２２から墨書土器出土。遺跡と確認。	33
興治散布地	別所町興治	団体営ほ場整備	確認調査	24㎡	2.1.22～2.1.23	事業地内に所在する古墳の周溝確認を行なったが、検出されなかった	
東中遺跡	口吉川町東中	県営ほ場整備	全面調査	840㎡	2.1.26～2.3.13	同一方向の掘立柱建物６棟柵列４列、溝検出。地方役所跡か。	33
西村散布地	細川町西村字前	県営ほ場整備（12-1工区山陽道北））	確認調査	96㎡	2.3.13～2.3.23	土師器壷、甑出土、遺構未検出。隣接の山陽道で遺跡確認、西が原遺跡と称する。	

平成２年度　調査遺跡一覧表

遺　跡　名	所　在　地	事　業　名	調査の種類	調査面積	調査期間	調　査　概　要	参照
西中散布地	口吉川町西中	県営ほ場整備（4工区県道北）	確認調査	72㎡	2.5.1～2.5.2	遺構検出なし	
	加佐字西畑ケ	コミュニティスポーツセンター建設	確認調査	12㎡	2.5.7	遺構検出なし	
興治１０号墳	別所町興治	団体営ほ場整備	全面調査	140㎡	2.5.8～2.6.21	木棺直葬の主体部残欠、木棺小口の固定粘土魂、周溝検出。杯３セット。	38

平成２年度　調査遺跡一覧

遺　跡　名	所　在　地	事　業　名	調査の種類	調査面積	調査期間	調　査　概　要	参照
西中遺跡	口吉川町西中	県営ほ場整備（4工区県道南）	確認調査	60㎡	2.6.14～2.7.21	３か所のグリッドで遺構を検出、西中遺跡と称する。一部グリッド拡張(200㎡)	
三津田遺跡	志染町三津田字整理地	県営ほ場整備	確認調査	580㎡	2.7.9～2.7.24	県道東で遺構を検出、三津田遺跡と称する。一部拡張建物跡、井戸等検出。	
小戸田遺跡	志染町戸田	県営ほ場整備（７－１工区）	確認調査	100㎡	2.7.24～2.7.27	淡河川に面する段丘上で、遺構を検出、小戸田遺跡と称する。	43
西・脇川散布地	細川町西村・脇川	県営ほ場整備	確認調査	92㎡	2.8.3～2.8.21	遺構の検出なし	
西村散布地	細川町西村字前	県営ほ場整備（12-1工区山陽道南）	確認調査	32㎡	2.8.27～2.9.4	溝、住居跡等を検出、接する山陽道で確認された西が原遺跡の一部。	
桃坂散布地	細川町桃坂	県営ほ場整備（５，６工区）	確認調査	140㎡	2.9.4～2.9.21	遺構の検出なし	
三木城本丸遺跡	上の丸町	東屋建設	全面調査	20㎡	2.9.25～2.10.15	礎石列、土壙検出。埋め戻し保存。	40
小戸田遺跡	志染町戸田	県営ほ場整備	全面調査	1,500㎡	2.10.22～2.12.28	弥生の竪穴住居跡５棟、中世の土壙等を検出。	43
久留美散布地	久留美字内界地	団体営ほ場整備	確認調査	24㎡	2.11.6～2.11.14	遺構の検出なし	
久留美散布地	久留美字内界地	団体営ほ場整備	確認調査	56㎡	2.12.25～2.12.27	遺構の検出なし	
久留美散布地	久留美字辻ヶ内	団体営ほ場整備	確認調査	60㎡	3.2.1～3.2.8	調査地のほぼ中央で、ピット、土壙等遺構を検出、久留美門前遺跡と称する。	48
久留美門前遺跡	久留美字辻ヶ内	団体営ほ場整備	全面調査	800㎡	3.2.12～3.3.25	平安後期の重複する掘立柱建物３棟、土壙１３を検出。根石や瓦を検出、瓦葺きか。	48

平成３年度　調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	事業名	調査種別	調査面積	調査期間	調査概要	参照
大村城ノ前 散布地	大村字城ノ前	和光デンキ建設 事業	確認調査	20㎡	H3.5.9	遺構の検出なし	
椿原散布地	口吉川町椿原	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	88㎡	H3.5.17 ~ H3.6.21	遺構の検出なし 須恵器片、土師器片出土	
皇垣内散布地	久留美 字皇垣内	久留美地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	68㎡	H3.6.11 ~ H3.6.21	遺構の検出なし	
久次遺跡	口吉川町久次	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	400㎡	H3.7.9 ~ H3.8.22	柱穴、溝、土壙などの遺構を検出 須恵器片、土師器片、木製碗出土 計画変更により現状保存	
御坂遺跡	志染町御坂	水道敷設事業	立会調査		H3.6.11 ~ H3.6.21	遺構の検出なし、遺物少量出土	
戸田遺跡	志染町戸田 字井ノ姿々	志染地区 県営ほ場整備事業	確認調査	240㎡	H3.8.23 ~ H3.9.17	柱穴、溝、土壙などの遺構を検出	52
戸田遺跡	志染町戸田 字井ノ姿々	志染地区 県営ほ場整備事業	全面調査	280㎡	H3.9.19 ~ H3.11.2	竪穴住居址１棟検出 土師器壺口縁など出土	52
三津田 上明神遺跡	志染町三津田 字上明神 字下明神	志染地区 県営ほ場整備事業	確認調査	160㎡	H3.9.11 ~ H3.10.28	柱穴、溝、土壙などの遺構を検出 字矢ノ向でも遺構を検出し、矢ノ向遺跡とする。現状保存	
久留美 上野ノ下遺跡	久留美 字上野ノ下 字井ノ尻	久留美地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	172㎡	H3.9.12 ~ H3.11.6	柱穴、溝、土壙などの遺構を検出	54
久留美 上野ノ下遺跡	久留美 字井ノ尻 字上野ノ下	久留美地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	2,450㎡	H3.11.7 ~ H4.2.1	平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物３棟、溝２条、横穴式石室の基底部など検出	54
久留美 田井野遺跡	久留美 字田井野	久留美地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	280㎡	H4.2.10 ~ H4.2.27	柱穴、溝、土壙などの遺構検出	59

平成４年度　調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	事業名	調査種別	調査面積	調査期間	調査概要	参照
田井野遺跡 A調査区 東調査区	久留美 字田井野	久留美地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	A調査区 1,000㎡ 東調査区 1,000㎡	H4.3.5 ~ H4.5.29	A調査区 掘立柱建物７棟など検出 東調査区 掘立柱建物２棟など検出	59
		朝日ゴルフ予定地	確認調査	2㎡	H4.5.11	遺構の検出及び遺物の出土なし	
三津田 上明神散布地	志染町三津田	志染地区 県営ほ場整備事業	確認調査	60㎡	H4.5.25 ~5.26	遺構の検出なし	
里脇遺跡	口吉川町里脇	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	292㎡	H4.6.15 ~7.10	柱穴、溝、土壙などの遺構検出 須恵器片、土師器片、古銭出土	
里脇遺跡	口吉川町里脇	三木北部 県営ほ場整備事業	全面調査	700㎡ 600㎡	H4.8.31 ~9.19 H4.11.24 ~H5.2.8	柱穴群、大溝検出 須恵器片、土師器片出土 柱穴群、溝、土壙を検出 須恵器片、土師器片出土 全面調査以外は、設計変更による現状保存	

遺跡名	所在地	事業名	調査種別	調査面積	調査期間	調査概要	参照
谷口散布地	細川町谷口	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	96㎡	H4.7.13 ~7.15	遺構の検出なし 須恵器片、土師器片少量出土	
久留美 上野ノ下遺跡	久留美 字上野ノ下	久留美地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	520㎡	H4.7.20 ~ H4.8.28	柱穴群、溝、粘土採掘壙検出 須恵器片、土師器片出土	
久留美 上野ノ下遺跡	久留美 字上野ノ下	久留美地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	900㎡	H4.10.7 ~ H4.11.18	柱穴群、溝、土壙を検出 須恵器片、土師器片出土	
窟屋大芝散布地	志染町窟屋	志染地区 県営ほ場整備事業	確認調査	256㎡	H4.9.21 ~10.2	柱穴、土壙検出　須恵器片、土師器片少量出土　現状保存	
荻谷散布地	細川町荻谷	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	68㎡	H5.1.11 ~1.12	遺構の検出なし	
田井野遺跡 B調査区 C調査区	久留美 字田井野	久留美地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	B調査区 1,800㎡ C調査区 2,400㎡	H4.8.3 ~10.6 H4.10.20 ~12.18	掘立柱建物6棟、溝、土壙検出 須恵器片、土師器片出土 掘立柱建物16棟、溝、土壙を検出 須恵器片、土師器片出土	59
小林八幡神社 遺跡	福井字三木山	市道建設事業	一次 全面調査	600㎡	H5.1.22 ~4.10	土墓、櫓台、方形土壇、土壙、溝、犬走り状テラス検出 丹波焼すり鉢、古銭など出土	63

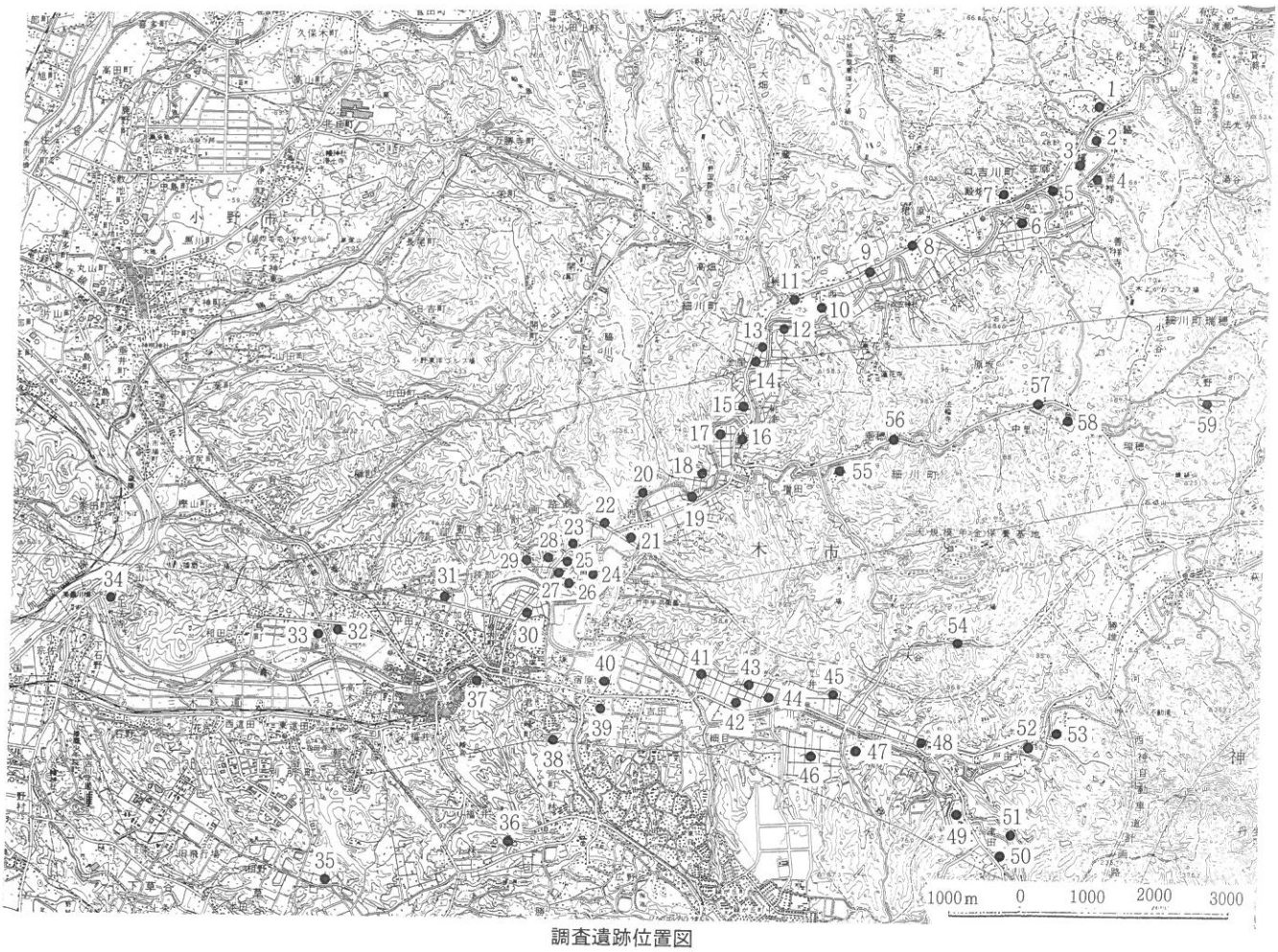
平成5年度　調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	事業名	調査種別	調査面積	調査期間	調査概要	参照
久留美 丈ノ越遺跡	久留美 字丈ノ越	久留美地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	300㎡	H5.5.12 ~ H5.5.27	柱穴、土壙など検出　遺跡範囲約17,000㎡　設計変更による現状保存　一部、後日全面調査	70
久留美 丈ノ越遺跡	久留美 字丈ノ越	久留美地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	A調査区 1,500㎡ B調査区 440㎡ C調査区 700㎡	H5.8.9 ~ H5.11.17	掘立柱建物　棟、竪穴住居址1棟、土壙墓など検出 柱穴群、溝、土壙など検出 柱穴群、土壙、横穴式石室基底部周溝など検出	70
槙遺跡	口吉川町槙	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	600㎡	H5.6.7 ~7.26	柱穴、溝、土壙を検出 設計変更による現状保存	
大島散布地	口吉川町大島	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	90㎡	H5.7.29 H5.10.28	遺構の検出なし	
宿原散布地	宿原字	宿原地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	100㎡	H5.8.9 ~8.19	遺構の検出なし	
上芝原・鍛冶散布地	細川町垂穂	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	180㎡	H5.8.23 ~9.2	遺構の検出なし	
久留美 松ノ下遺跡	久留美 字松ノ下	久留美地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	210㎡	H5.8.3 ~ H5.8.19	柱穴、土壙など検出　遺跡範囲約17,000㎡　設計変更による現状保存　一部、後日全面調査	77
久留美 松ノ下遺跡	久留美 字松ノ下	久留美地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	A調査区 2,400㎡ B調査区 130㎡	H5.11.4 ~ H6.1.21	掘立柱建物7棟、竪穴住居址1棟、井戸、土壙を検出 掘立柱建物2棟、溝、土壙を検出	77
久留美 中筋遺跡	久留美字中筋	久留美地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	210㎡	H5.11.9 ~ H5.12.13	柱穴、土壙など検出　遺跡範囲約19,000㎡　設計変更による現状保存　一部次年度全面調査予定	85

遺　跡　名	所　在　地	事　　業　　名	調査種別	調査面積	調 査 期 間	調　　査　　概　　要	参照
正法寺古墳群	別所町正法寺	別所地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	380㎡	H5.12.21 ~ H6.3.28	1号墳の周溝、2～4・10号墳 残存状況確認 事業地内の古墳を次年度全面調査予定	81
小林八幡神社 遺　跡	福井字三木山	市道建設事業	二次 全面調査	600㎡	H6.1.25 ~ H6.3.31	大型の掘立柱建物3棟、溝を検出 廃寺跡？	63

平成6年度　調査遺跡一覧

遺　跡　名	所　在　地	事　　業　　名	調査種別	調査面積	調 査 期 間	調　　査　　概　　要	参照
宿原岡ノ下 遺　跡	宿原字岡ノ下	宿原地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	260㎡	H6.6.13 ~ H6.7.6	柱穴、土壙を検出　遺跡範囲約 8，000㎡　約5，000㎡に ついて後日全面調査予定	
正法寺古墳群	別所町正法寺	別所地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	9 基	H6.6.15 ~ H7.3.23	新たに4基発見され、合計8基の調 となった。遺物多数出土　1号墳の ほか3基を移設保存　基は現状保存	81
久留美 宮の西遺跡	久留美 字宮の西	久留美地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	290㎡	H6.7.11 ~ H6.7.28	柱穴など検出　遺跡範囲約8，00 0㎡　約700㎡について後日全面 調査予定	
久留美 宮の西遺跡	久留美 字宮の西	久留美地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	700㎡	H6.9.5 ~ H6.10.3	掘立柱建物2棟、柱穴群検出 約7，300㎡について設計変更に よる現状保存	
殿畑散布地	口吉川町殿畑	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	40㎡	H6.7.29 ~8.2	遺構の検出なし	
上芝原散布地	細川町垂穂	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	40㎡	H6.8.3 ~8.9	遺構の検出なし	
下南遺跡	細川町中里	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	220㎡	H6.8.9 ~ H6.8.22	柱穴、溝など検出 遺跡範囲約4，000㎡ 設計変更による現状保存	
三津田 西越散布地	志染町三津田	志染地区 県営ほ場整備事業	確認調査	20㎡	H6.8.23 ~8.24	遺構の検出なし	
吉祥寺 散布地	口吉川町 吉祥寺	三木北部 県営ほ場整備事業	確認調査	20㎡	H6.8.25 ~8.26	遺構の検出なし	
宿原岡ノ下 遺　跡	宿原字岡ノ下	宿原地区 団体営ほ場整備事業	確認調査	140㎡	H6.11.7 ~11.9	遺構の検出なし	
久留美 中筋遺跡	久留美字中筋	久留美地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	A調査区 2,000㎡ B調査区 1,300㎡	H6.10.12 ~ H7.3.31	掘立柱建物14棟、土壙、溝などを 検出 掘立柱建物10棟、溝などを検出	85
宿原岡ノ下 遺　跡	宿原字岡ノ下	宿原地区 団体営ほ場整備事業	全面調査	A調査区 1,100㎡	H7.2.10 ~ H7.3.31	竪穴住居址2棟、溝、土壙群などを 検出　残る約4，000㎡について 次年度全面調査予定	



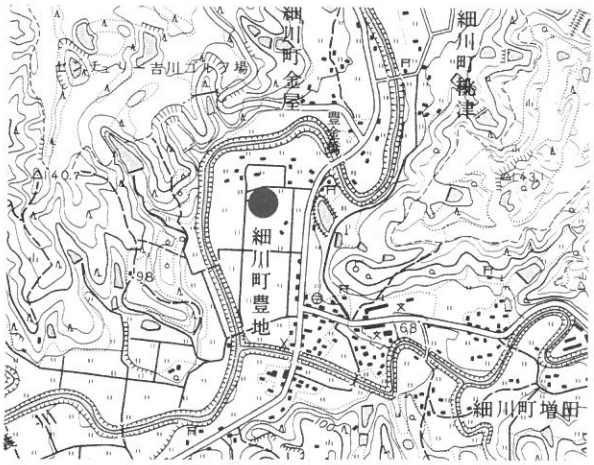
調査遺跡位置図

1. 久次遺跡
2. 里脇遺跡
3. 槙遺跡
4. 吉祥寺遺跡
5. 大島遺跡
6. 南畑散布地
7. 殿畑遺跡
8. 裙原遺跡
9. 東中遺跡
10. 西中遺跡
11. 桃坂散布地
12. 高篠散布地
13. 高篠谷ノ郷遺跡
14. 桃津散布地
15. 金屋散布地
16. 上ノカチ・宮の西散布地
17. 佐野遺跡
18. 円満寺遺跡
19. 細川中大日橋遺跡
20. 西・脇川散布地
21. 西ケ原遺跡
22. 久留美田井野遺跡
23. 久留美宮の西遺跡
24. 久留美上野ノ下遺跡
25. 久留美中筋遺跡
26. 久留美丈ノ越遺跡
27. 久留美松ノ下遺跡
28. 久留美門前遺跡
29. 久留美皇垣内遺跡
30. 岩宮散布地
31. 加佐西山田散布地
32. 大村城ノ前散布地
33. 島町大二散布地
34. 正法寺古墳群
35. 興治10号墳
36. 小林八幡神社遺跡
37. 三木新城・三木城本丸遺跡
38. 君ケ峰城
39. 宿原散布地
40. 宿原岡ノ下遺跡
41. 安福田散布地
42. 梨ノ木遺跡
43. 中谷遺跡
44. 船橋遺跡
45. 井上遺跡
46. 窟屋散布地、窟屋扇ノ坂古墳
47. 窟屋大芝遺跡
48. 御坂遺跡
49. 上明神・下明神遺跡
50. 三津田遺跡
51. 三津田西越遺跡
52. 戸田遺跡
53. 小戸田遺跡
54. 迦耶院東遺跡
55. 谷口遺跡
56. 上芝原・鍛冶遺跡
57. 荻谷遺跡
58. 下南遺跡
59. 入野遺跡

「太字ゴシック文字は本文掲載遺跡」

佐野遺跡（さのいせき）

1．所在地　細川町豊地
2．事業名　三木北部
　　県営ほ場整備事業
3．種　　別　確認調査及び全面調査
4．調査面積　確認　２５６㎡
　　全面　１４４㎡
5．調査期間　確認　昭和６０年１０月２１日
　　～昭和６０年１１月１４日
　　全面　昭和６０年１１月１５日
　　～昭和６０年１２月８日



位置図（1／25,000）

6．調査に至る経過

今年度より細川町、口吉川町を対象とした三木北部県営ほ場整備事業が始まった。本年度は、細川町の佐野工区が施工されることになった。

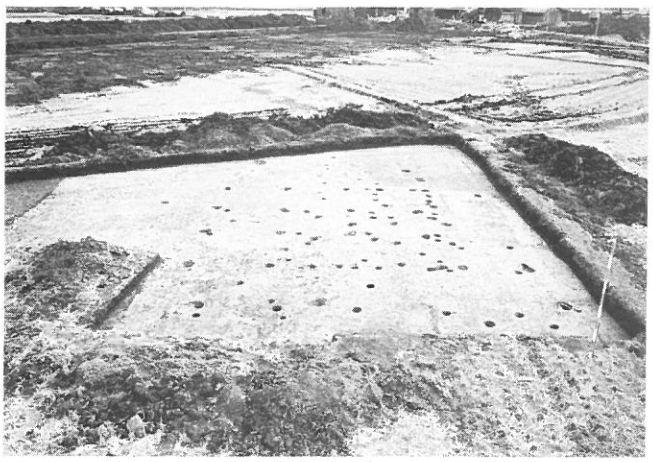
３月に実施した分布調査で、須恵器片・土師器片の散布が多く認められたため、確認調査を実施することになった。

7．調査概要

佐野遺跡は、市の北東に位置し、県道加古川－三田線沿いの美嚢川が緩やかに蛇行している河岸段丘に立地している。調査は、２×２ｍのグリッドを設定して行った。

確認調査では、グリッドＮｏ１２・Ｎｏ２９・Ｎｏ４３でピットを検出した。Ｎｏ１２の部分の計画水田が、設計変更できず現状で残せないため、周辺の約１５０㎡について全面調査を実施した。

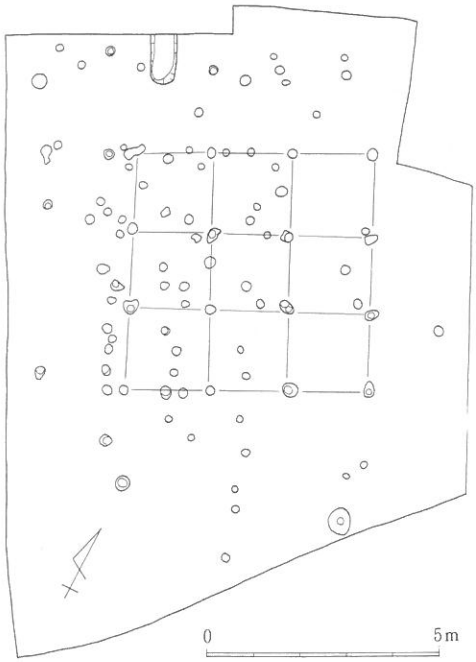
全面調査の結果、掘立柱建物が５棟検出した。建物１は３×３間（５．２×５．２ｍ）、建物２は３×２間（４．３×２．８ｍ）、建物３は３×２間（４．４×３．２ｍ）である。建物４は４×２間（５．２×２．８ｍ）以上で、さらに西側の調査区外へ続いているものと思われる。建物５も４間（５．７ｍ）で北側の調査区外へ続いているものと思われる。いずれの建物の方向がＮ－２５°－Ｗに主軸をもって同じであることから、ほぼ同時期の建物と考えている。


調査区全景

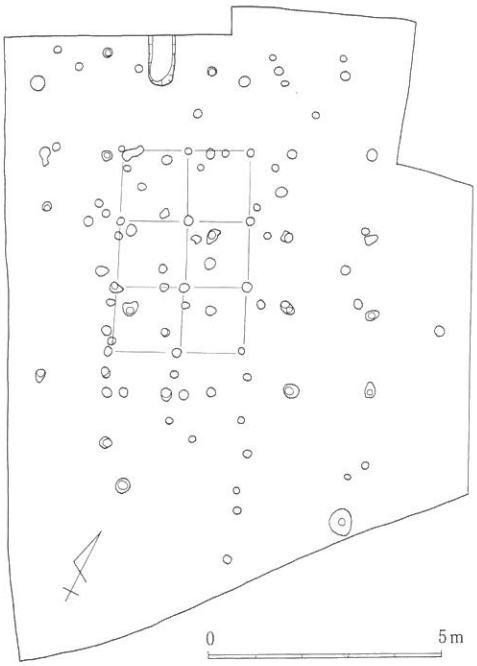
8．まとめ

平安時代後期～鎌倉時代（約８００年前）の須恵器片が多く出土したことから、佐野遺跡は、平安時代後期～鎌倉時代の集落と考えている。

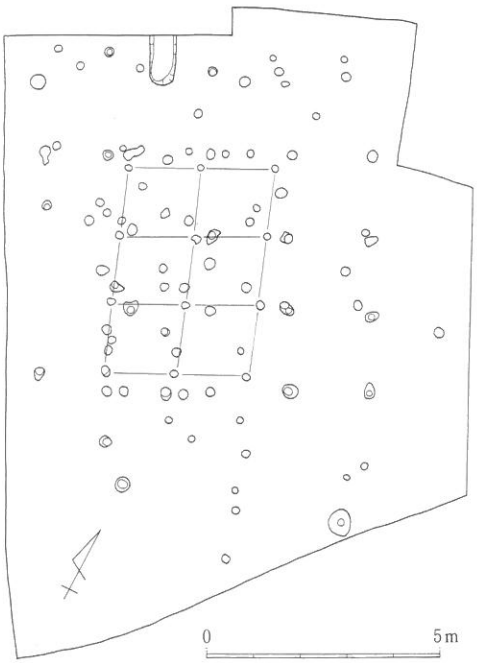
遺構平面図



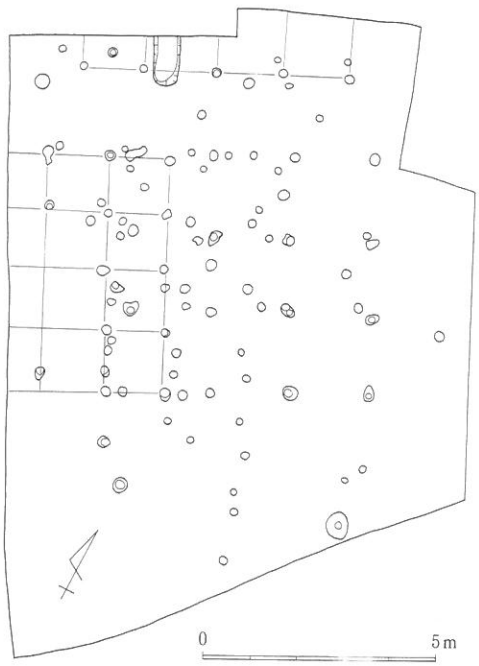
建物跡１



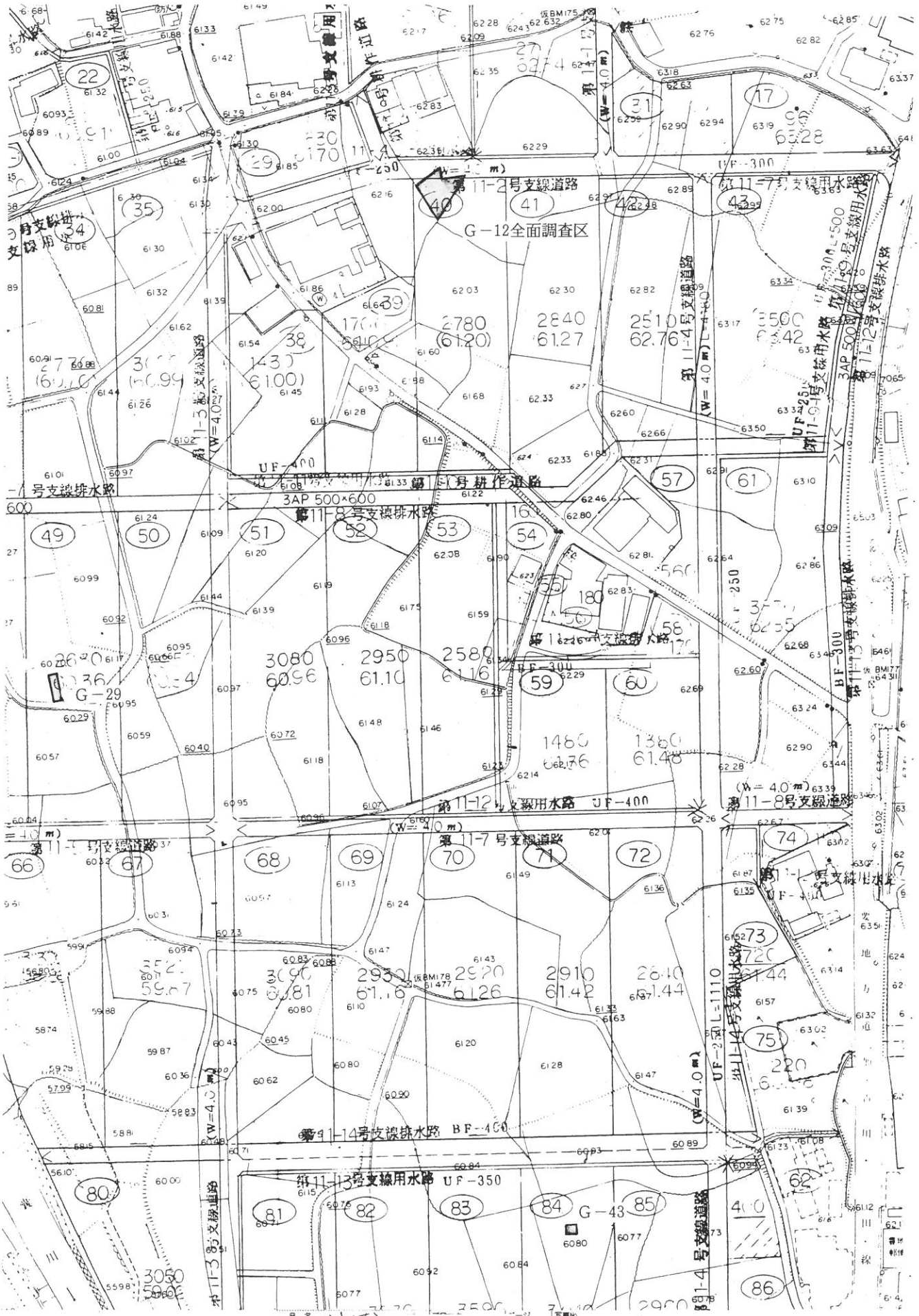
建物跡２



建物跡３

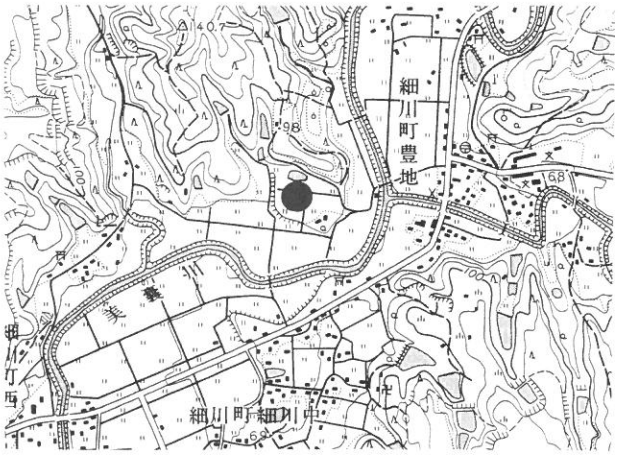


建物跡４・５


G－12全面調査区
G－29
G－43
第11-2号支線道路
第11-7号支線用水路
第11-4号支線道路
第11-8号支線排水路
第11-12号支線用水路
第11-13号支線用水路
第11-14号支線排水路
3AP 500×600
UF-400
UF-350
BF-300
BF-400

調 査 区 図

円満寺遺跡（えんまんじいせき）



位置図（1／25,000）

1．所 在 地　細川町豊地

2．事 業 名　三木北部
　　県営ほ場整備事業

3．種　　別　確認調査及び全面調査

4．調査面積　確認　９２㎡
　　全面　２１８㎡

5．調査期間　確認　昭和６１年１０月２３日
　　～１１月５日
　　全面　昭和６１年１１月１６日
　　～１２月２３日

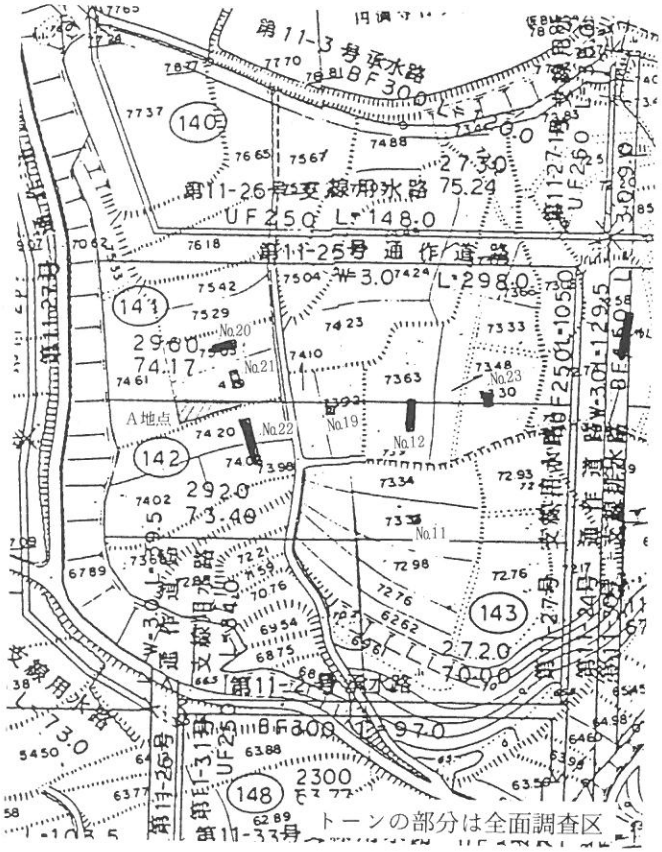
6．調査に至る経過

今年度の三木北部県営ほ場整備事業は、円満寺工区が施工されることになった。３月に実施した分布調査で、遺物の散布が認められており、また当調査地は円満寺跡といわれていることから、確認調査を実施することになった。

7．調査概要

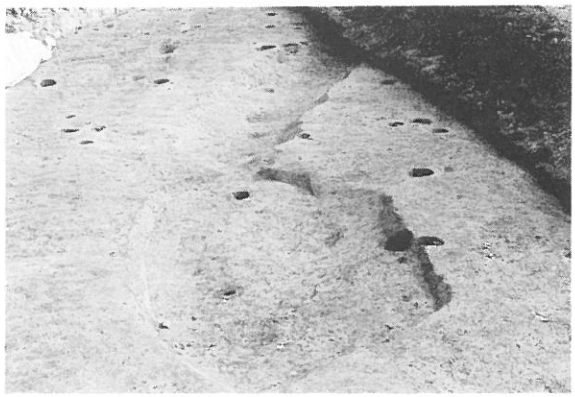
円満寺遺跡は、市の北東部に位置し、美嚢川と小川川が合流している北側段丘に立地する。調査は、２×２ｍのグリッドを設定し行った。

確認調査では、グリッドＮｏ２１・Ｎｏ２２でピットを多数検出した。Ｎｏ２２の南端で古墳時代の遺物が出土したため、グリッドを拡張した結果、住居址の一部と考えられる遺構が検出した。Ｎｏ１２において溝・ピット、集石遺構を検出した。溝は東西及び南北方向に検出し、幅約０．２５ｍで南北方向の南側で幅が広がっている。集石遺構には炭が付着しており、カマドのようなものと考えている。計画水田１４２番部分の設計変更ができないため、約１５０㎡について全面調査を実施することになった。



グリッド配置図

調査区全景

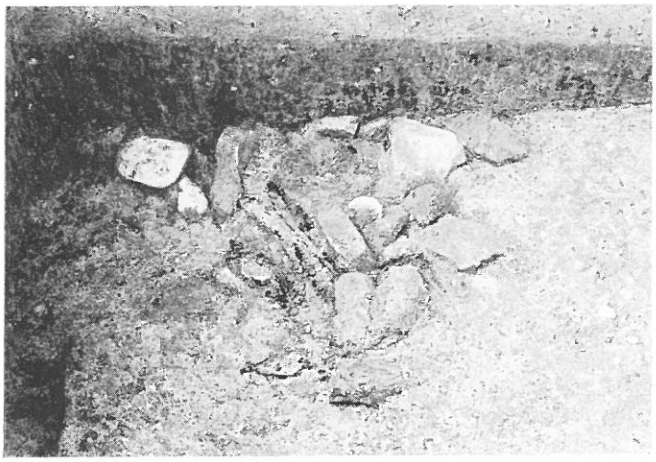


古墳時代の溝及び全景

全面調査では、土壙・溝、ピットを多数検出した。土壙は、南北約２．７ｍ、東西約３．５ｍ、深さ約０．２５ｍである。溝は幅約１．７ｍ、深さ約０．５ｍで土壙より延びている。遺物は、須恵器の坏身・坏蓋、甕片及び土師器壺片が多く出土した。

出土した土器

溝列石遺構検出状況



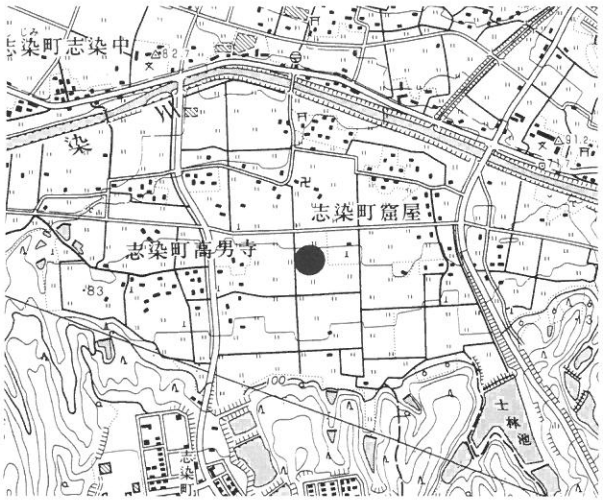
集石遺構検出状況

8．まとめ

円満寺遺跡は、古墳時代と平安時代後期～鎌倉時代の複合遺跡と分かった。部分的な調査であったため、平安時代後期～鎌倉時代と考えられるピットなどの遺構が円満寺跡であることは確認できなかった。古墳時代と考えている土壙及び溝などの遺構がどのような性格の遺跡であるか確認できなかった。おそらく集落跡と思われるが、鎌倉時代より始まる冷泉家の荘園である細川荘に代表されるように中世の遺跡が中心である細川町で、古墳時代の遺跡が初めて確認されたことは重要な意味をもつものと思われる。

窟屋扇ノ坂古墳（いわやおうぎのさかこふん）

1．所 在 地　　志染町窟屋字扇ノ坂
2．事 業 名　　志染地区
　　県営ほ場整備事業
3．種　　別　　全面調査
4．調査面積　　２５５㎡
5．調査期間　　一次　昭和６１年８月１１日
　　～昭和６１年９月２４日
　　二次　昭和６１年１２月２２日
　　～昭和６２年１月３１日



位置図（1／25,000）

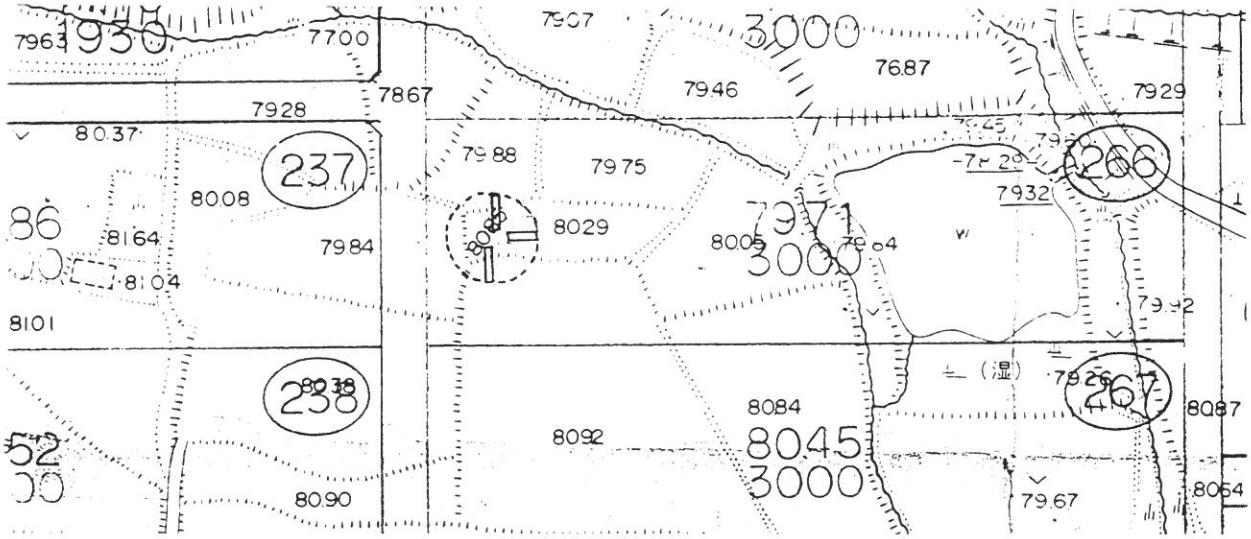
6．調査に至る経過

今年度の志染地区県営ほ場整備事業は、窟屋工区の２２ｈａが施工されることになった。以前に実施した分布調査で狭い範囲であるが遺物の散布が認められ、また地元の言い伝えにより、事業地内に古墳の存在が考えられるため、調査を実施することになった。

7．調査概要

窟屋扇ノ坂古墳は、市の東部に位置し、志染川の南側段丘に立地している。周辺は、江戸時代後期～明治時代に水田として開墾されたが、約７ｍ四方の古墳と推定される部分は、“タタリ”があるという言い伝えで開墾されず、水田に囲まれた広い畦として残されてきたものと思われる。

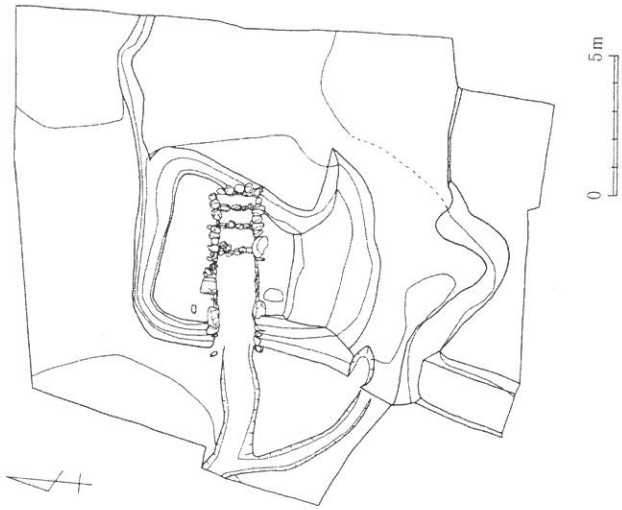
古墳と推定される言い伝えが残っているものの、遺物の散布は認められず、古墳と断定できないため確認調査を実施した。その結果、長方形の石列を検出し、横穴式石室の古墳と確認でき、引き続いて全面調査を実施した。



古墳推定範囲

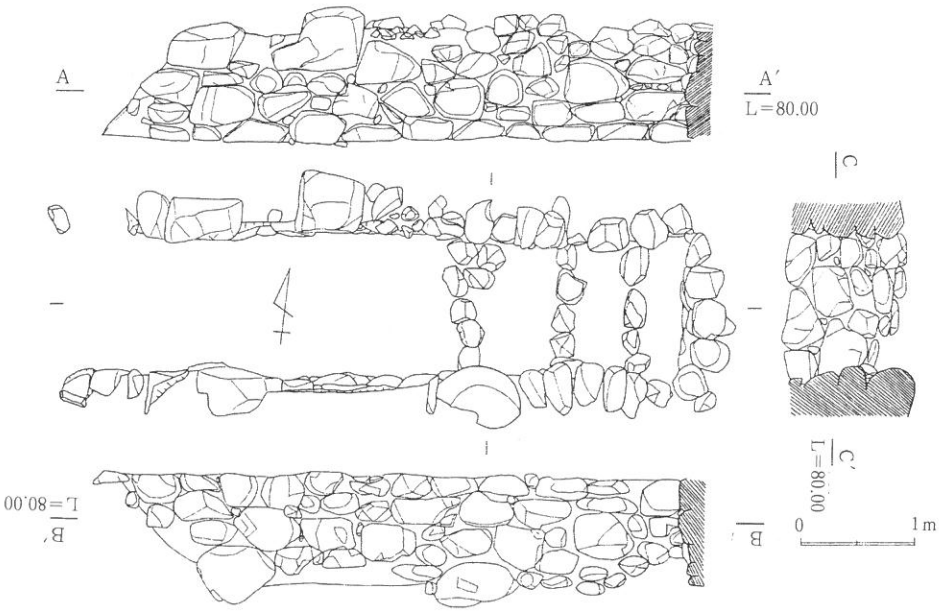
調査の結果、外部施設では墳丘の裾が南側で約４分の１程度しか検出しできなかった。おそらく開墾の時に削平されたのものと思われる。規模は推定で約１０ｍの円墳で、裾から少し離れたところで幅約０．５ｍ、深さ約０．２ｍの弧状の溝を検出した。状況から古墳に伴う周溝ではないものと思われる。

古 墳 全 景



古墳周辺地形図

内部施設で石室の規模は、全長約５．４ｍ、幅約１．３ｍの河原石を使用した無袖の横穴式石室である。調査以前にすでに天井石は失われており、現存の高さは約１．２ｍで、側壁の石は、ほぼ垂直に積み上げられているが、開口部及び奥部付近でやや内傾している。石室の奥部で仕切るように三列の石列が検出した。状況から棺を安置するための台（棺台）であると思われる。石室の前面で、幅約１．１ｍ、深さ０．１ｍの溝を検出した。この溝は先述した溝と合流しており、おそらくいずれの溝も墓道ではないかと考えている。



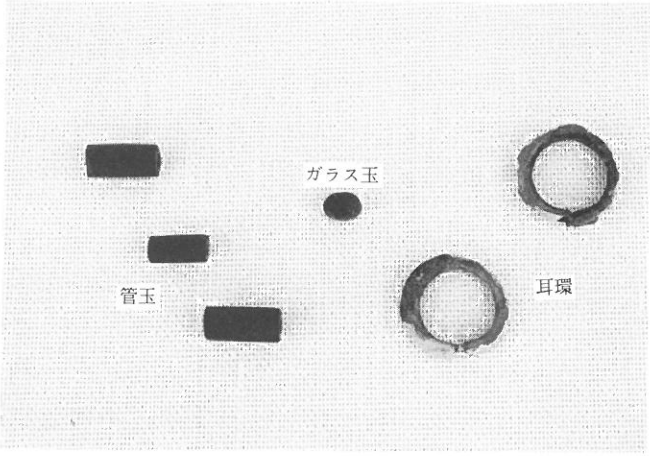
石室平面図

遺物は、坏・高坏・長頸壺・提瓶・はそう、ミニチュアの提瓶・はそうなどの須恵器、直刀などの鉄器、耳環・管玉・ガラス玉などの装飾品が出土した。また、石室内の埋土から平安時代後期～鎌倉時代の須恵器碗・小皿、土師器碗をはじめ多くの須恵器片、土師器片が出土した。おそらく、この時期に古墳は盗掘などの再利用が行われたものと思われる。

8．まとめ

窟屋扇ノ坂古墳は、横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳時代後期の古墳であることが分かった。市内では初めてのほぼ完全な形で残っていた横穴式石室の古墳の調査であった。

昭和５９年度の調査において、当古墳から北西へ約４００ｍのところで、古墳時代後期の住居址１棟と幅約９ｍの大溝を検出しており、同時期の集落が存在しているものと思われる。おそらく古墳を築造したのは、この集落に生活基盤をもつ集団と考えている。



出土遺物

遺物検出状況

中谷遺跡（なかたにいせき）

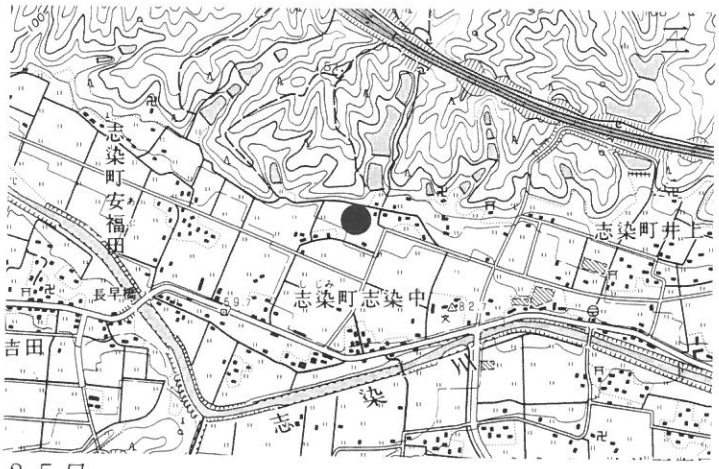
1．所 在 地　　志染町志染中字中谷

2．事 業 名　　志染地区
　　県営ほ場整備事業

3．種　　別　　確認調査

4．調査面積　　２１４㎡

5．調査期間　　昭和６２年１０月２７日
　　～昭和６２年１２月２５日



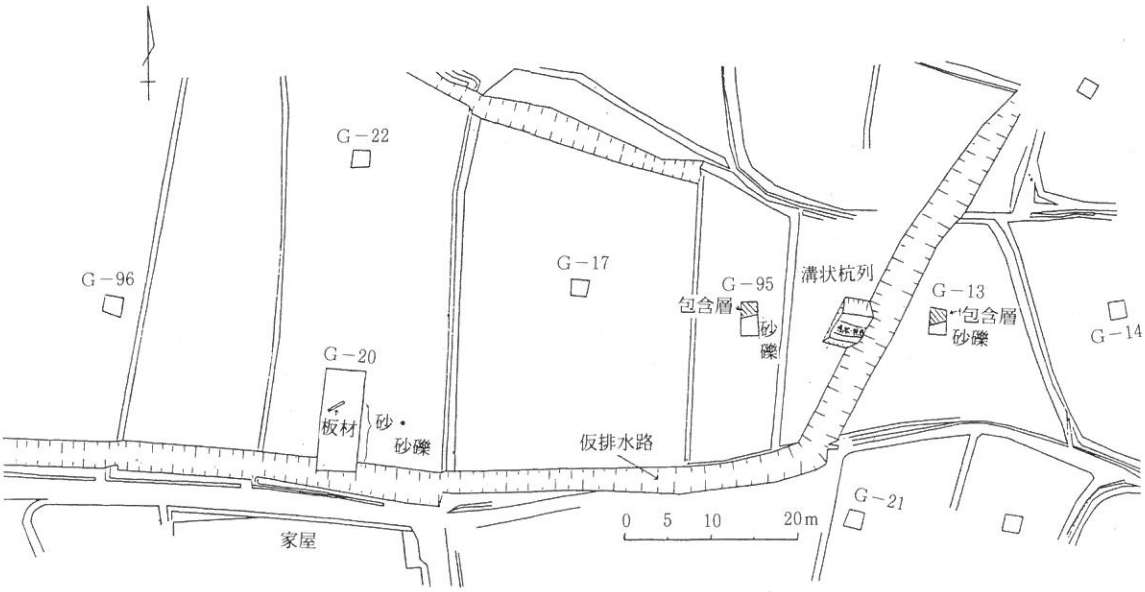
位置図（1／25,000）

6．調査に至る経過

今年度の志染地区県営ほ場整備事業は、志染中工区が施工されることになった。分布調査の結果から、遺物の散布が認められたため、確認調査を実施することになった。

7．調査概要

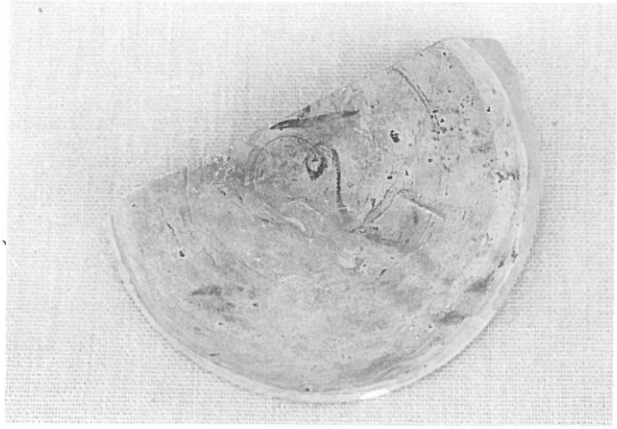
中谷遺跡は、市の東部に位置し、志染川の北側丘陵裾部より広がる扇状地に立地している。調査は、２×２ｍのグリッドを設定し行った。確認調査では、グリッドＮｏ１３・Ｎｏ２０・Ｎｏ９５の遺物包含層から、厚さ約２㎝、長さ約２ｍの建物の部材と思われる板材が出土した。このほか、自然木、木の削り屑、須恵器片が多く出土した。Ｎｏ１３とＮｏ９５の間の仮排水路の部分で設定したグリッドから溝状の遺構とそれに伴った杭列が検出した。さらに、溝状の遺構から多くの須恵器片が出土した。またＮｏ２０を拡張し仮排水路に接した部分から井戸状の石組が検出し、唐草文の軒平瓦が出土した。



グリッド配置図

これの他、特筆する出土遺物としては、“前”、“新（？）”と書かれた墨書土器、漆塗土器、曲げものの底などがある。

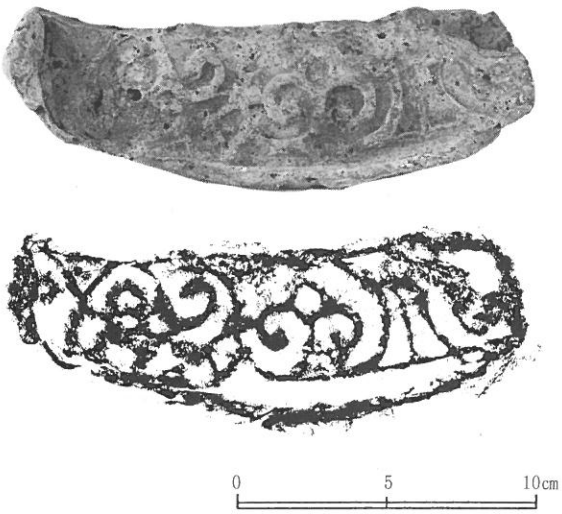
墨書土器“前”



8．まとめ

中谷遺跡のある志染町は、昔、「縮見」とよばれており、「屯倉」があったことが、奈良時代に朝廷が編纂した『日本書紀』に載っている。奈良時代の墨書土器の出土や『日本書紀』の記述から、おそらく中谷遺跡の近くに「屯倉」に相当する遺跡が存在するものと思われる。

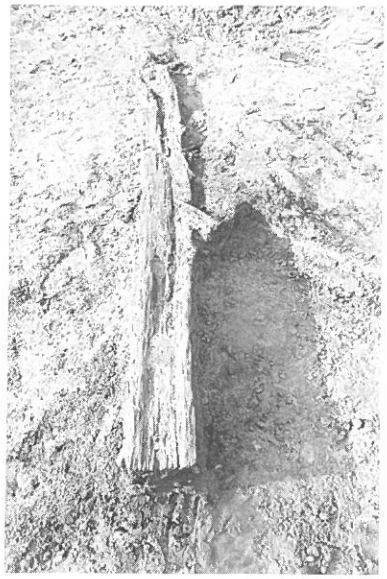
唐草文軒平瓦



漆塗土器

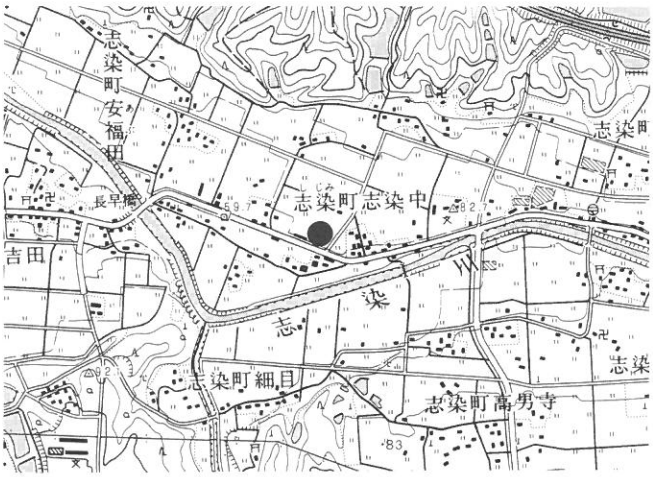
溝および杭列

出土した建築部材



梨ノ木遺跡（なしのきいせき）

1．所 在 地　　志染町志染中字梨ノ木
2．事 業 名　　志染地区県営ほ場整備事業
3．種　　別　　確認調査及び全面調査
4．調査面積　　確認調査　１９６㎡
　　全面調査　２２０㎡
5．調査期間　　昭和６２年１２月１日
　　～昭和６３年２月１日



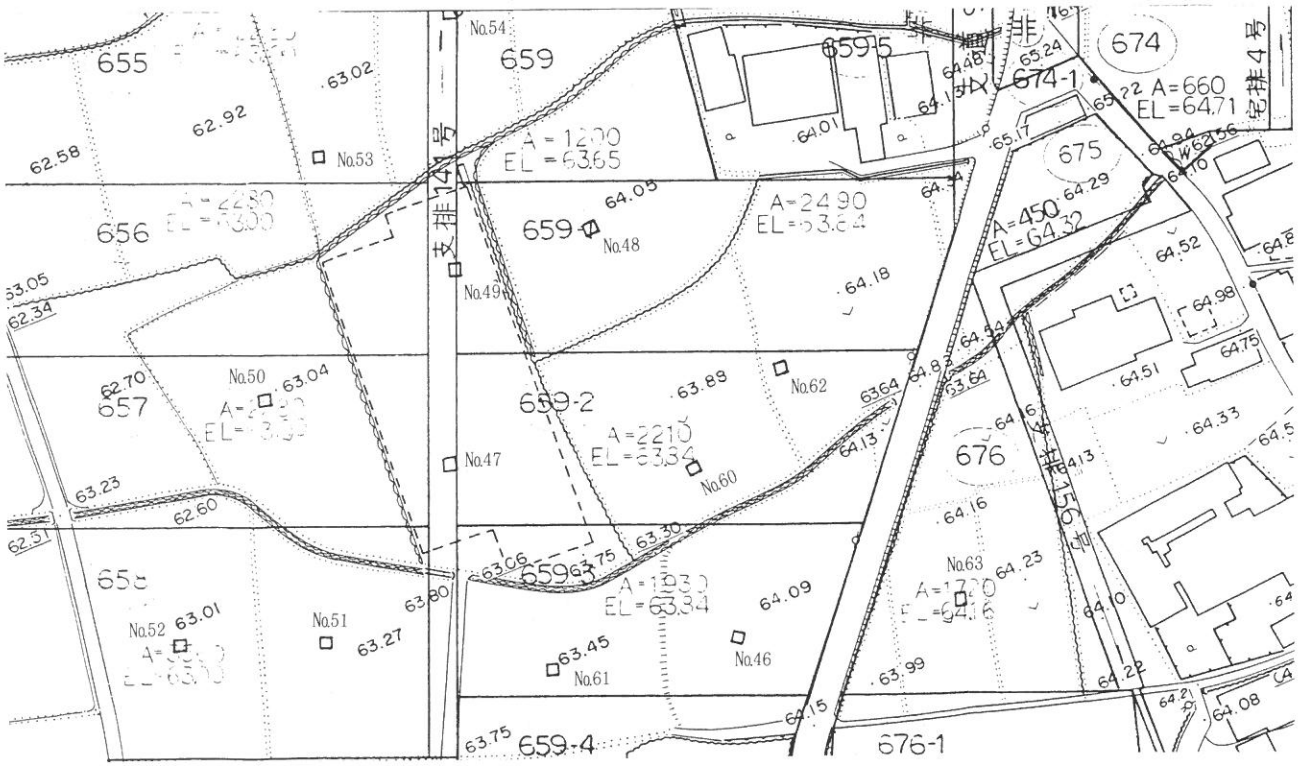
位置図（1／25,000）

6．調査に至る経過

今年度の志染地区県営ほ場整備事業は、志染中工区が施工されることになった。分布調査で、遺物の散布が認められたため、確認調査を実施し、現状保存ができない部分について、全面調査することになった。

7．調査概要

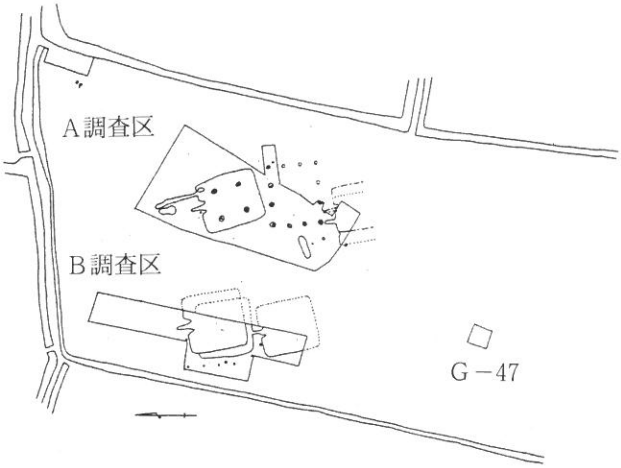
梨ノ木遺跡は市の東部に位置し、志染川の北側段丘に立地しており、中谷遺跡から南へ約３００ｍのところにある。確認調査で、グリッドＮｏ４９、Ｎｏ６０でピットなどの遺構を検出したが、Ｎｏ４９の水田部分については、設計変更による現状保存ができないため、確認調査に引き続き全面調査を実施した。



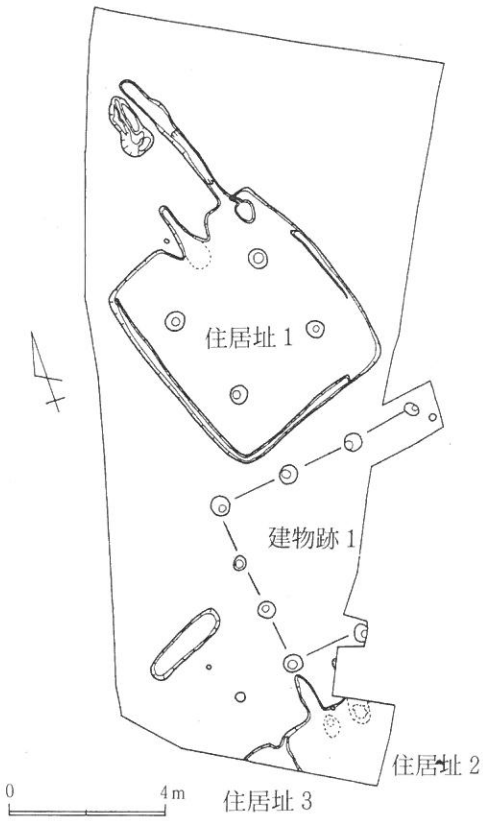
グリッド配置図

調査は、東調査区と西調査区の２ヶ所で行った。東調査区で煙道とカマドを備えた方形の竪穴住居３棟と掘立柱建物跡１棟を、西調査区においても３棟の竪穴住居を検出した。

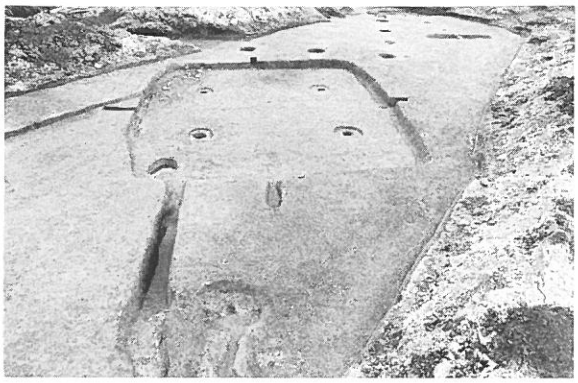
調査区位置図



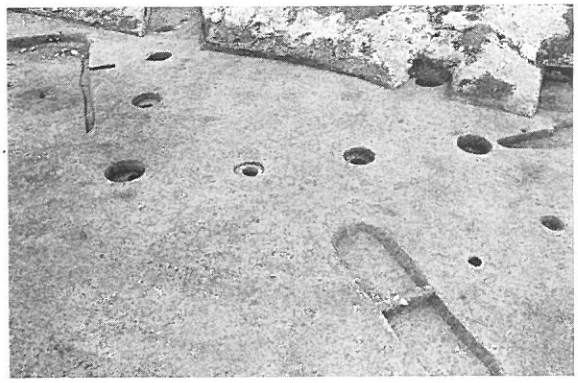
東調査区平面図



東調査区の住居址１は、約６×５ｍの規模で方形をしており、北側に煙道とカマドを、住居内では周壁溝・貯蔵穴を検出した。住居址２及び３は、調査区の南隅で重なって検出した。住居址２は煙道・カマドをともに検出したが、住居址３はわずかしか検出しなかった。規模は、検出面積が少ないため推定できないが、煙道が住居址１とほぼ同じ大きさであることから、住居址１とほぼ同じ規模と考えている。建物１は、３×３間（約５．７×４．７ｍ）以上の掘立柱建物であったものと思われる。



東調査区　住居址１

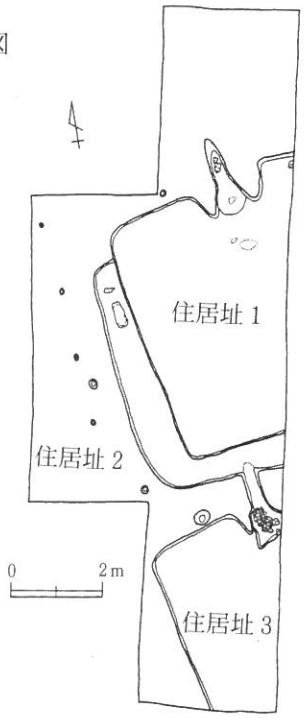


東調査区　建物跡１

西調査区の住居址１は、検出面積が全体の約半分と思われるが、規模は推定で約５．５×５．５ｍで方形をしている。カマド部分で焼土を検出し、煙道部で土師器片が出土したが、柱穴や周壁溝の検出はなかった。住居址２は住居址１と重なって検出した。おそらく住居址２が廃棄されたのちに住居址１に建て替えられたものと思われる。煙道やカマドも建て替えのときに消滅したものと思われる。ただ住居址４の床面に焼土が検出しているところから、おそらく住居址２にも北側に煙道とカマドを備えていたものと思われる。住居址３は、検出面積が全体の約４分の１と思われ、規模は推定で約５×５ｍと考えており、方形をしているものと思われる。カマド部分で土師器片が集中して出土した。おそらくカマドで使用した甕と考えている。住居址１同様に柱穴・周壁溝の検出はなかった。

西調査区　住居址検出状況

西調査区平面図



カマド部および煙道部
彫り込み作業

遺物出土状況

8．まとめ

梨ノ木遺跡は、検出した住居址や出土遺物から、古墳時代後期の集落遺跡と考えている。北側にある中谷遺跡の一つ前の時代の集落と思われる。

高篠谷ノ郷遺跡

位置図（1／25,000）

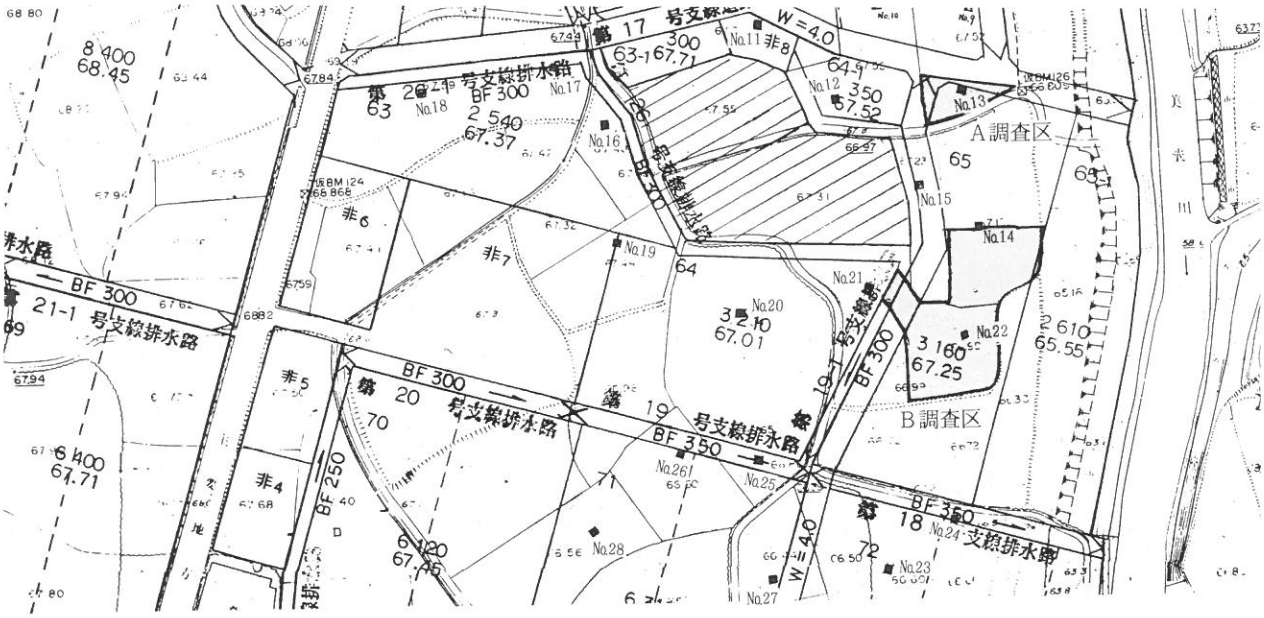
1．所 在 地　細川町高篠字谷ノ郷
2．事 業 名　三木北部
　　県営ほ場整備事業
3．種　　別　全面調査
4．調査面積　１２２０㎡
5．調査期間　昭和６３年９月１２日
　　昭和６３年１２月６日

6．調査に至る経過

今年度の三木北部県営ほ場整備事業は、高篠・桃津工区が施工されることになった。分布調査で遺物の散布が認められ、事業地内に冷泉家の居館跡が含まれているため、確認調査を実施することになった。

7．調査概要

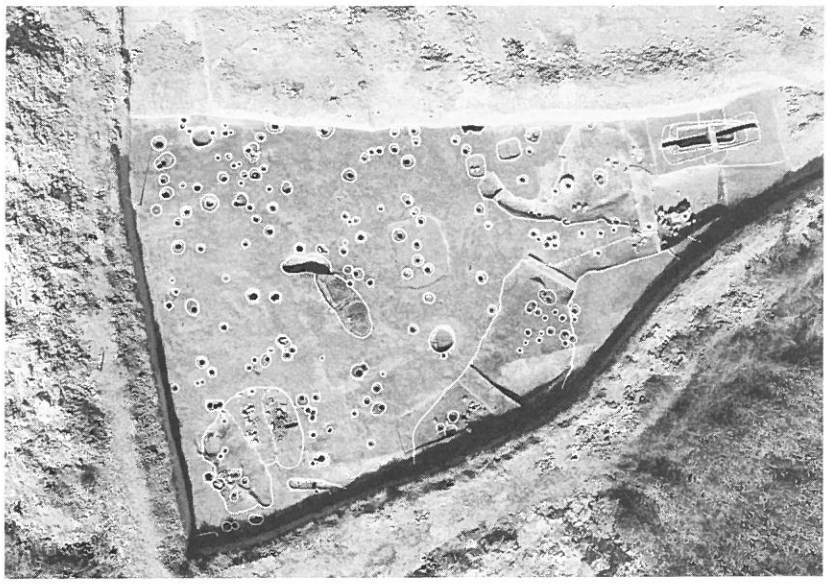
高篠谷ノ郷遺跡は市の北部に位置し、美嚢川が蛇行する段丘に立地している。調査は、２×２ｍのグリッドを設定して行った。確認調査では、グリッドＮｏ１３で柱穴、Ｎｏ２２で溝を検出した。この部分の計画水田の設計変更ができないため、全面調査を実施することになった。



調査区図

調査は、Ｎｏ１３拡張調査区をＡ調査区、Ｎｏ２２拡張調査区をＢ調査区として実施した。

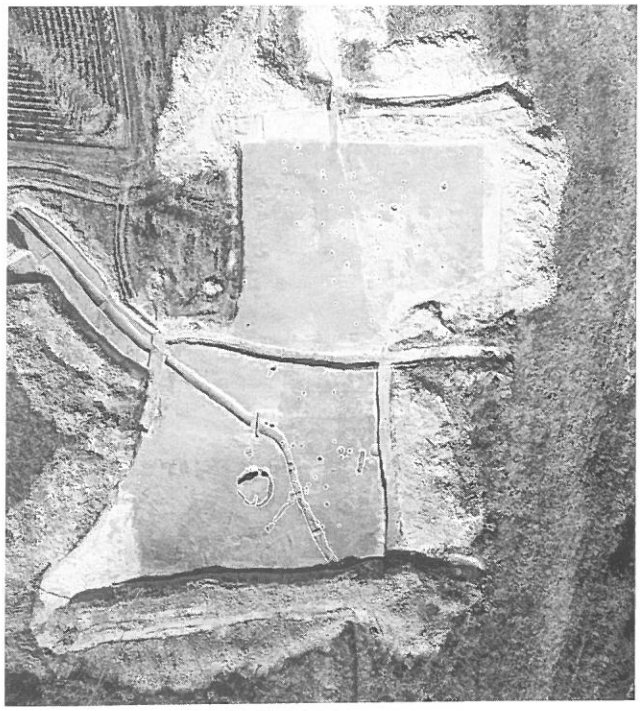
Ａ調査区では、土壌２ケ所、掘立柱建物跡４棟、溝、土壙墓と思われる遺構を検出した。土壙は、調査区中央と南西隅で検出し、いずれも鉄滓（鉄のくず）が出土した。掘立柱建物は、建物１が２×１間（４．７×２．２ｍ）、建物２が１×４間（２．２×７．９ｍ）以上で西側の調査区外にく続いており、建物３が５×１間（１２．０×２．２ｍ）以上で北側の調査区外に続いており、建物４は、南西隅１×１間（３×２．４ｍ）である。南西隅の建物は鉄滓が出土した土壙に伴っている。この土壙の覆屋と思われ、小鍛冶跡と考えている。調査区東端で大小の長方形の土壙墓と思われる遺構が切り合って検出した。外側の土壙は３．８×１．４ｍで、内側の土壙は３．１×１．１ｍでさらに内側に主体部と思われる２．２×０．７ｍの土壙を検出した。外側の土壙墓の主体部は消滅したものと考えられるいる。この遺構から遺物が出土していないため時期は不明である。調査区から出土した遺物は、鉄滓のほかに須恵器碗・土錘などがある。



Ａ調査区全景

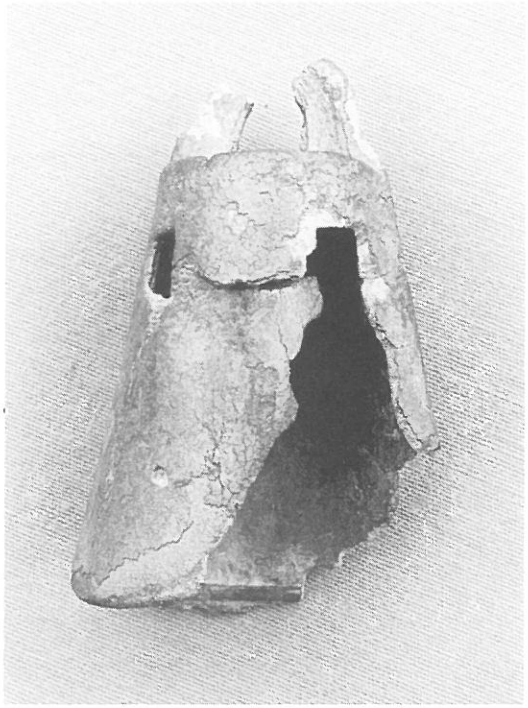
Ａ調査区平面図

Ｂ調査区では、掘立柱建物跡１棟と溝を検出した。建物跡は、調査区の北側にあり、規模は２×３間（５．１×６．９ｍ）である。溝は、最大幅約１．２ｍ、深さ約０．３ｍで調査区の南側を北西から中央付近で方向を変えて南へ延びている。特筆すべきは、この溝から平安時代後期～鎌倉時代の須恵器片とともに小銅鐸が出土したことである。現存で高さ約６．０㎝、幅約２．７㎝で紐の部分が欠けている。舞の内側は磨滅しており、おそらく舌で音を鳴らして使っていたものと思われる。

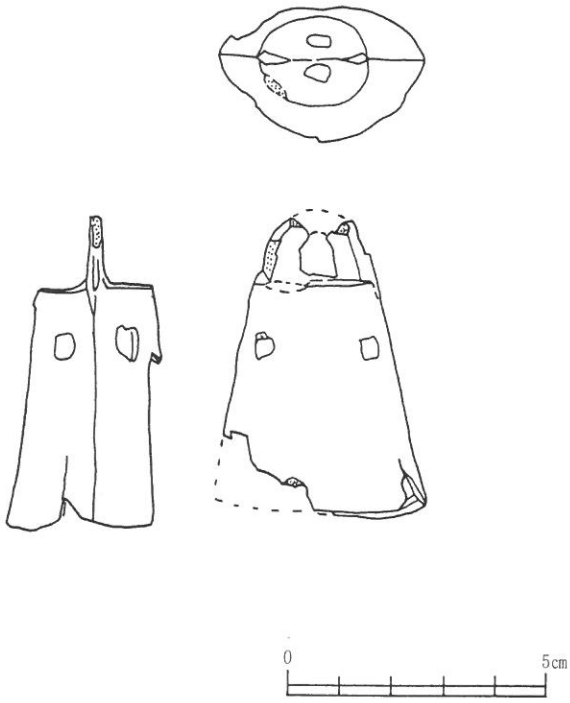


Ｂ調査区全景

Ｂ調査区平面図



小銅鐸



８．まとめ

小銅鐸の出土は兵庫県で初めてで、全国で２６番目の事例になる。出土した小銅鐸は、弥生時代の遺物で大型の銅鐸の模倣品と考えられている。また、大型の銅鐸が“ムラ”のまつりに使われたのに対して、小銅鐸は家族のまつりに使われたと考えられている。全国で出土している小銅鐸の多くは集落から出土しており、住居址や墓から見つかることが多いが、当遺跡の小銅鐸は平安時代後期～鎌倉時代初期の溝から出土した。平安時代の人々が小銅鐸を使っていたとは考えられないことから、弥生時代の人が廃棄した小銅鐸を平安時代の人が見つけ、この遺跡の溝に再び廃棄したものと想像している。このことから、高篠谷ノ郷遺跡は、出土遺物から平安時代後期～鎌倉時代の集落と考えているが、周辺に弥生時代の集落跡が存在しているものと思われる。

君ケ峰城（きみがみねじょう）

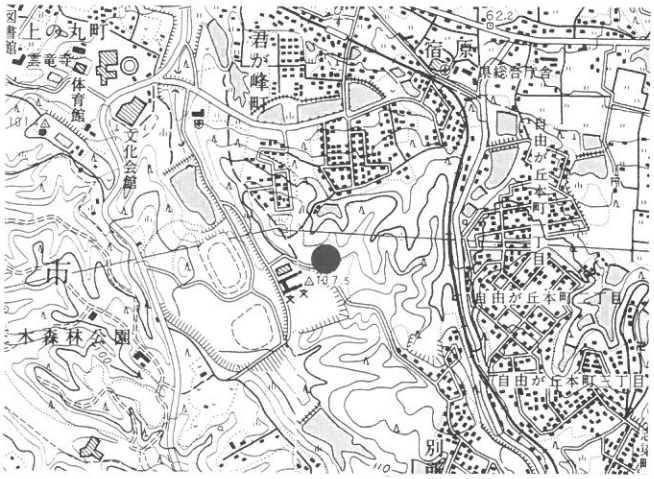
1．所 在 地　　三木市宿原

2．事 業 名　　三木山総合運動公園
　　及び三木東中学校建設

3．種　　別　　全面調査

4．調査面積　　約７６０㎡

5．調査期間　　昭和６３年４月１日
　　～４月３０日



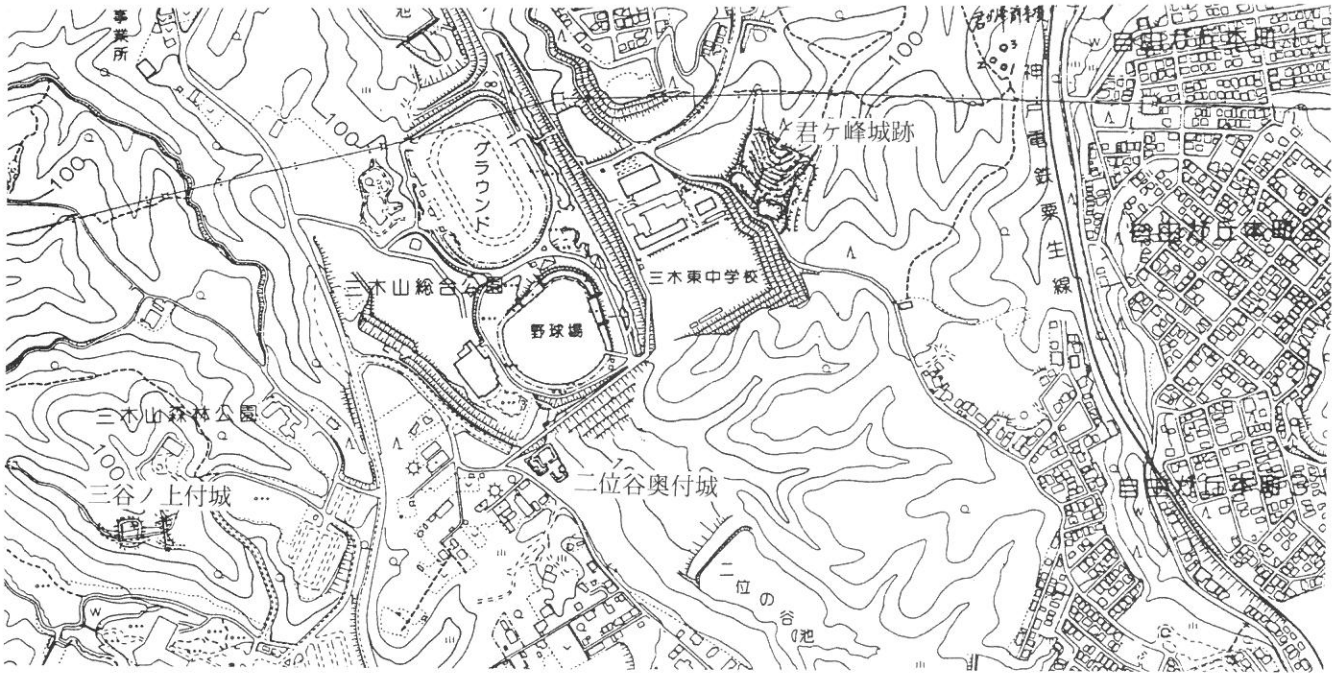
位置図（1／25,000）

6．調査に至る経過

三木合戦の時の付城跡において、昭和６３年度に総合運動公園及び中学校が建設されることになった。当該地は、『播磨鑑』では「大塚町上君ヶ峰」と記載され、「木下与市郎」の付城となっているため、事業に先立って調査を実施することになった。

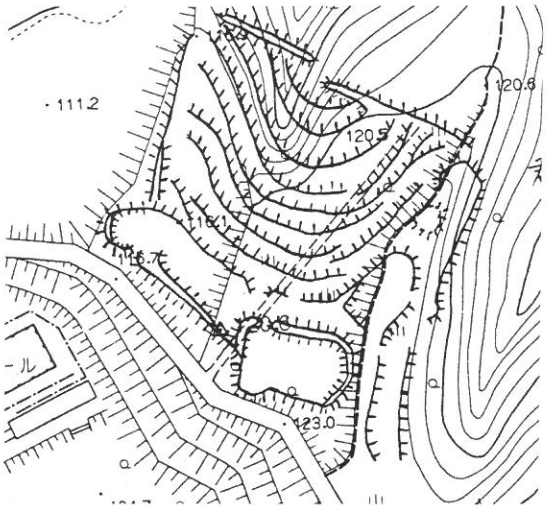
7．調査概要

君ヶ峰城は、三木城跡から南東へ約１．５kmのところに位置し、美嚢川の南側丘陵の二位谷川によって開析された谷の東側尾根に立地している。当付城から、三木城の出城と考えられている宮の上の要害、鷹ノ尾城を確認することはできるが、三木城は確認できない。さらに『二位谷奥』に相当する付城が南西へ約０．５kmのところにあり、城内より確認できる。



君ケ峰城周辺図（1/10,000）

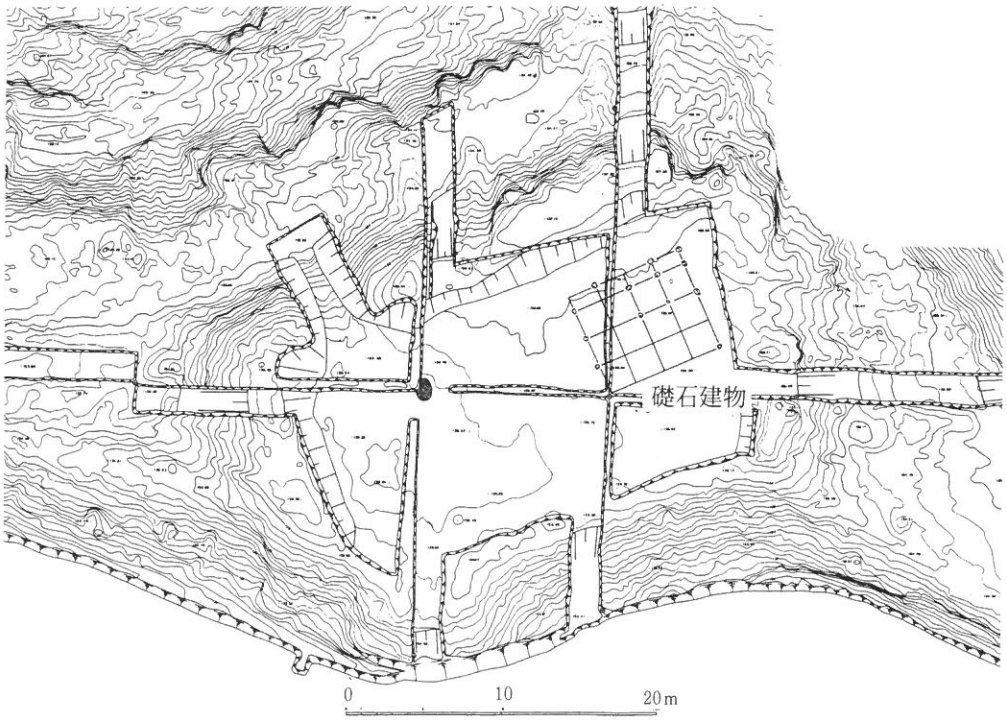
表面観察によると主郭を中心に北西と北東に延びる尾根に１ヶ所ずつ郭が存在する。この二つの尾根に挟まれた谷に帯郭が雛壇状にいくつも存在している。南西に延びる尾根には郭は認められなかった。土塁は、主郭で東・西・北の三方に巡っており、北西の郭の南側と先端部分にも認められた。さらにその続きに堀切が認められる。虎口は主郭の北側に存在し、北西の郭より延びた帯郭状の部分を介して北東の郭とも連絡できるようになっていたと考えている。



君ケ峰城縄張図

調査は、主郭を中心に北西、北東尾根などに幅２ｍのトレンチを１６ヶ所設定し、遺構の有無、土層の堆積の観察などの確認調査を実施した。主郭の東側で礎石を検出したため、主郭部分について全面調査を実施した。

主郭の北東部分で１４個の礎石を検出した。状況から４×４間（約７．２×７．２ｍ）の片庇付きの礎石建物を推定している。建物跡の西側で、長径１．５ｍ、短径１．０ｍの楕円形の焼土壙を検出した。北側では、表面観察で確認した虎口を幅約１．５ｍで検出した。土塁は、北西・北・北東のトレンチの断ち割り状況から内法の高さ約０．８～１．０ｍ、外法の高さ約１．０～１．８ｍで版築構造が認められた。北西の郭、北東の郭では、建物跡などの遺構の検出はなかった。また表面観察で確認した北西の郭の先端の土塁は検出されなかった。さらにその続きの堀切は底の幅約６ｍ、深さ約１．７ｍである。北西の郭より北東へ延びる帯郭は幅約４．５ｍである。



君ケ峰城跡平面図

主郭周辺全景

主郭部分礎石検出状況

遺物は、極めて少ないが、土師器壺・すり鉢・備前焼壺・丹波焼すり鉢・中国製磁器（白磁皿・青磁皿・染付）、鉄釘、「熙寧元宝」（１０６８年初鋳）の宋銭を含む２枚の銅銭がある。

８．まとめ

遺構の検出が極めて少なく、また遺物の出土が極めて少ない状況から付城跡と思われる。付城という性格から、臨時の施設で最低限の建物しか建てなかったものと思われる。しかし、礎石建物とかなりしっかりした建物で、土塁にも版築構造が認められるのである程度拠点になっていたものと考えている。また出土遺物が少ないのは、短期間の使用と三木合戦の後にさらに各地に転戦していた当時の状況を反映したものと考えている。今後の付城の発掘事例の増加を待ちたい。

ひがしなかいせき

東中遺跡

1　所在地　　三木市口吉川町東中

2　事業名　　三木北部地区県営ほ場整備

3　種　別　　確認調査及び全面調査

4　面　積　　確認調査　１６５㎡

　　全面調査　８４０㎡

5　期　間　　確認調査

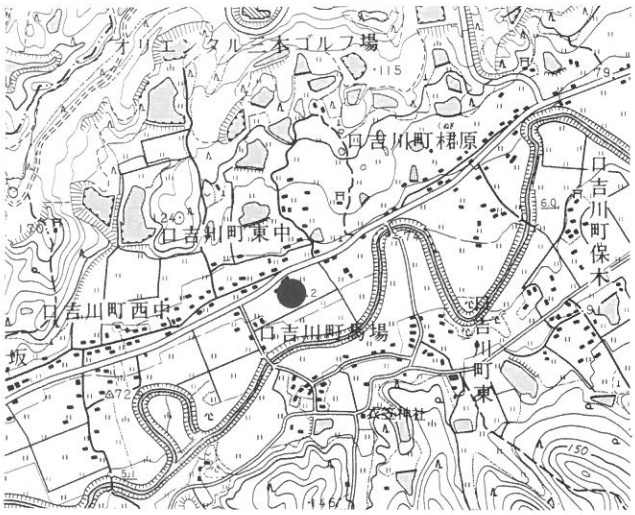
　　平成元年１２月１８日～

　　平成２年１月１１日

　　全面調査

　　平成２年１月２６日～

　　平成２年３月１３日

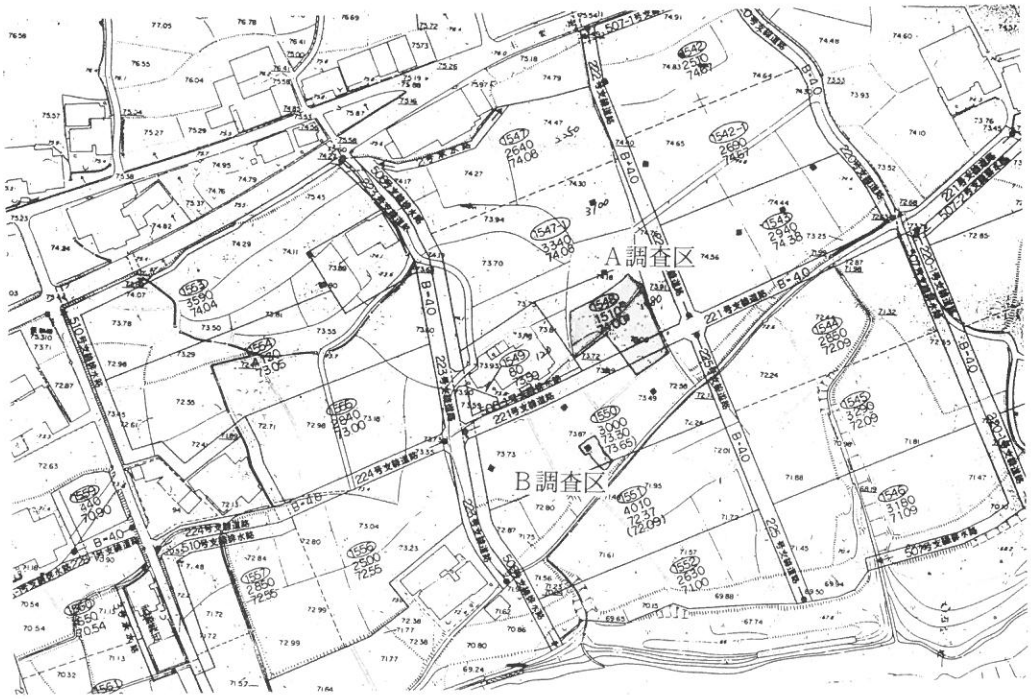


位置図(1/25,000)

6　調査に至る経過

東中地区の県道加古川－三田線の南側で、ほ場整備が施工されることになり、事業地内に３３か所のグリッドを設定し、遺構の検出にあわせ拡張または増設しながら、確認調査を行ない、事業地のほぼ中央に設定したグリッド８～１４で遺構を多く検出した。

協議の結果、工事施工によって影響を受ける範囲について、全面調査を実施することになり、グリッド８、９を設定した水田の一部約７４０㎡（Ａ調査区）と、１２、１３を設定した水田の一部約１００㎡（Ｂ調査区）で行なった。

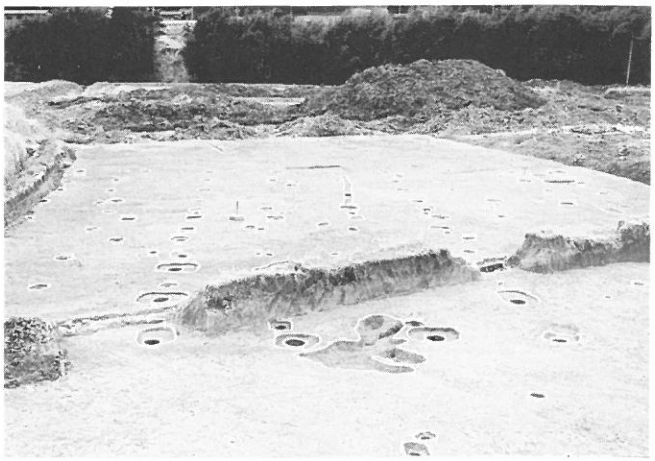


調査区図

7　調査概要

A調査区

調査区の東半分に片寄って、遺構が多く検出された。検出遺構は掘立柱建物６棟、柵列５本、土壙３ヶ所、溝３条とピット群である。掘立柱建物は、主軸を南北にもつものと、東西にもつものとに区分できるが、同一の方向性を見い出せる。また、柵列についてもこれらの建物と平行し、同じ方向性を持っている。



Ａ調査区全景（北から）

ＳＢ０１は建物群の北に位置する東西に主軸を持つ２×３間の建物で、その柱穴の掘方は０．６～０．８ｍを測り、やや変形した方形を呈している。堀方は、ほかの建物より大きく際だった建物である。中央に位置するＳＢ０２，０３は、ともに東西を主軸とする建物で、重複している。ＳＢ０２は２×３間の総柱建物と思われる。ＳＢ０３は１×５間の建物で、東及び西側の柱間はやや短く、２面の庇が考えられる。南にはＳＢ０４～０６の３棟が位置している。ＳＢ０４，０５は南北を主軸とする建物で、１×１間のＳＢ０６を挟んで向かい合う。規模は、ＳＢ０４が２×３間、ＳＢ０５は１×３間を測る。

柵列は、建物群の東及び西側から南北方向に主軸を持つ４本と、中央から東西に主軸を持つ１本である。そのうちの西側の柵列ＳＡ０４，０５は一直線状に並ぶ。

調査区の西端から検出した南北方向の溝ＳＤ０３は、幅約１．８～２．８ｍ、深さ約０．４ｍを測る丸底で、検出長は約１４ｍである。その延長上に設定したグリッド１３でも溝跡を検出していることから、南伸する同一の溝と考えられる。

B調査区

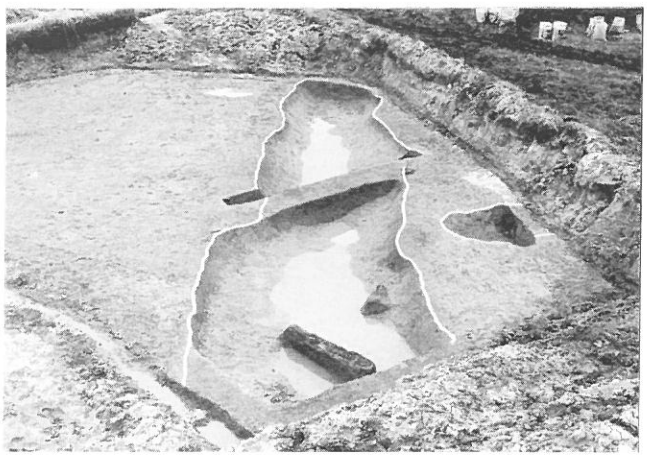
グリッド１２を拡張した程度の調査区であるが、０．７×１．０ｍの方形の集石土壙や、幅約３．２ｍの東西方向の溝などを検出した。集石土壙は、深さ約１０㎝を測り、底から約４㎝の炭の層を検出している。焼土は認められない。東西方向の溝は、Ａ調査区から南伸する溝に合流するもと思われる。

8　まとめ

検出した掘立柱建物群や柵列は、同じ方向性をもち規格性が認められることや、確認調査時にグリッド２２から「鴨ふ家」と書かれた墨書土器が出土したことなどから、一般の集落とは考えられず、地方の公的施設と想定している。

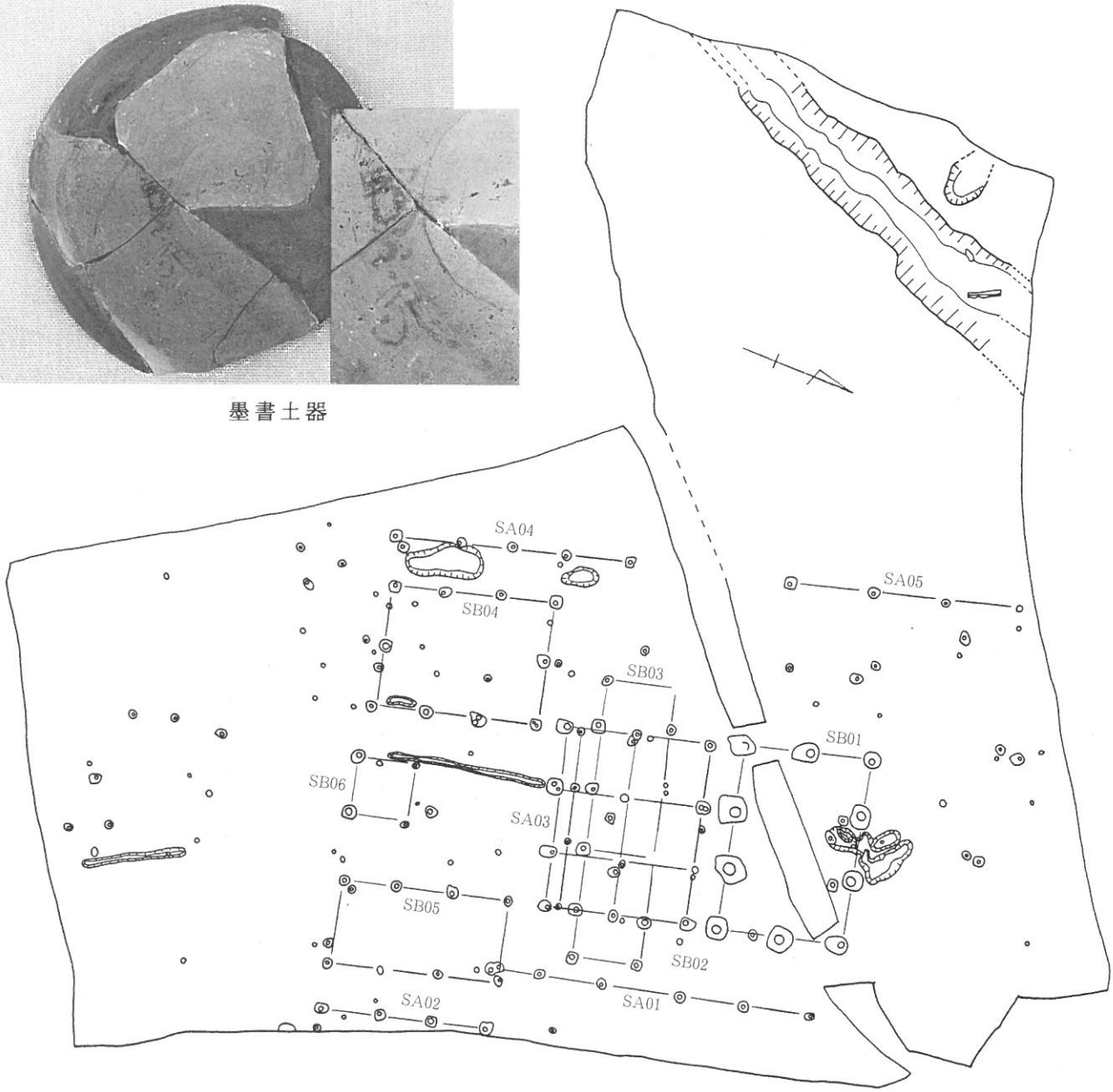
なお、建物配置については、同一方向の建物跡が密集しているため、当報告書の編集を行なうにあたり、再度検討を行なった結果、調査後に記した建物配置と一部違ったことをここに書き留めておくとともに、今後さらに詳細な検討を行なうことによって、変わる可能性のあることもつけ加えたい。また、建物配置の検討について、是非ご教示願いたい。

ＳＢ０１全景（東から）



ＳＤ０３全景（北から）

墨書土器

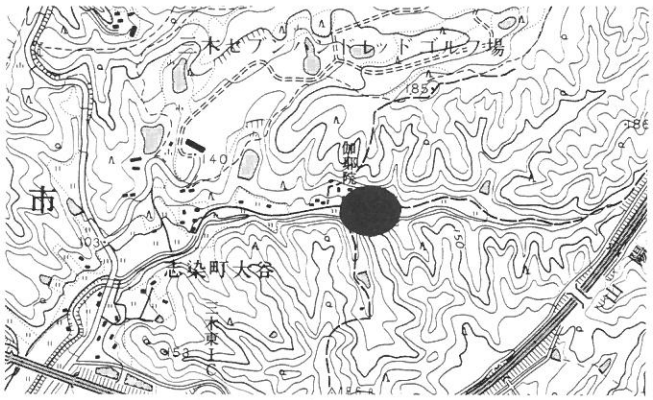


Ａ調査区遺構平面図

かやいん

伽耶院東遺跡

1　所在地　　三木市志染町大谷
2　事業名　　志染地区県営ほ場整備
3　種　別　　全面調査
4　面　積　　６７０㎡
5　期　間　　平成元年９月２０日～
　　平成元年１１月１５日



位置図(1/25,000)

6　調査に至る経過

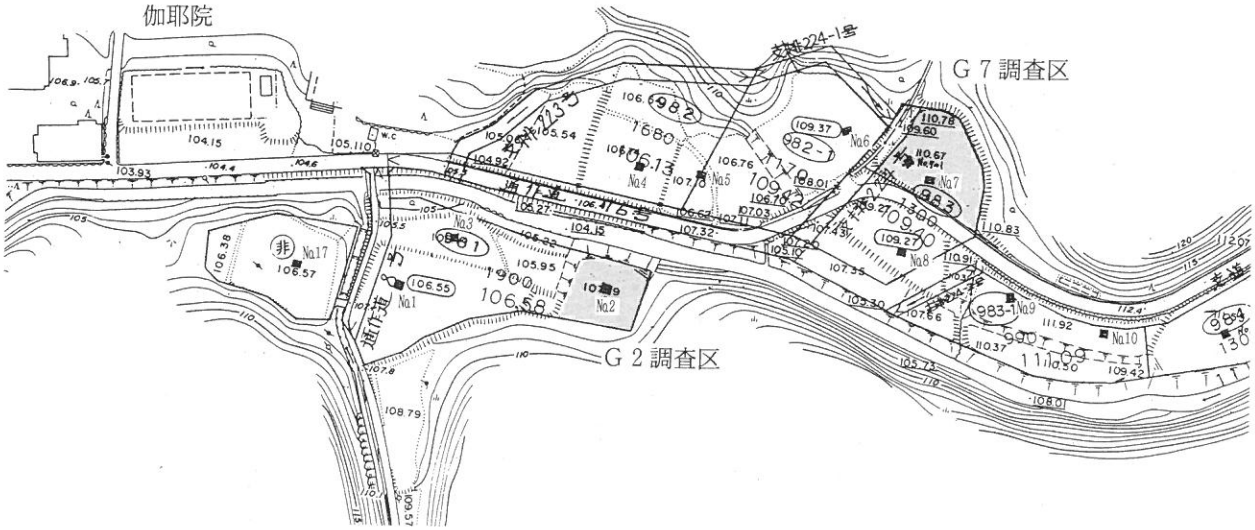
国指定文化財の伽耶院が所在する谷筋において、県営ほ場整備事業が施工されることになり、当院に関連した遺構の存在が考えられ、昨年度確認調査を実施し当院の東側地区に設定した１７箇所のグリッドの内、Ｇ１、２、６、７、８の５箇所からピット等の遺構が検出された。伽耶院所蔵の絵図から、遺構を検出したＧ１、２の設定場所が松之坊跡に、Ｇ６～８の設定場所が中之坊跡に比定できたが、工事施工によってその一部が破壊されるため、今年度の全面調査となった。

また、中之坊跡の東に隣接する地区外の山林内に平坦な地形が見られ、東林坊跡に比定している。

なお、絵図には伽耶院の西側地区にも坊跡の記載があるが、確認調査ではこれらに関連する遺構の検出はなかった。

7　調査概要

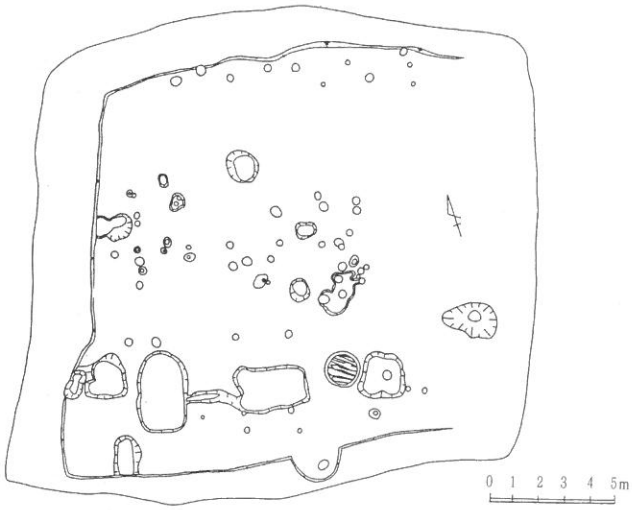
松之坊跡は伽耶院の南東に、中之坊跡は伽耶院の東に位置し、大谷川を挟んで対峙する。全面調査は、松之坊跡のＧ２を設定した水田約２７０㎡と、中之坊跡のＧ７を設定した水田約４００㎡で行ない、それぞれをグリッド番号からＧ２調査区、Ｇ７調査区とした。



調査区図(1/2,000)

Ｇ２調査区

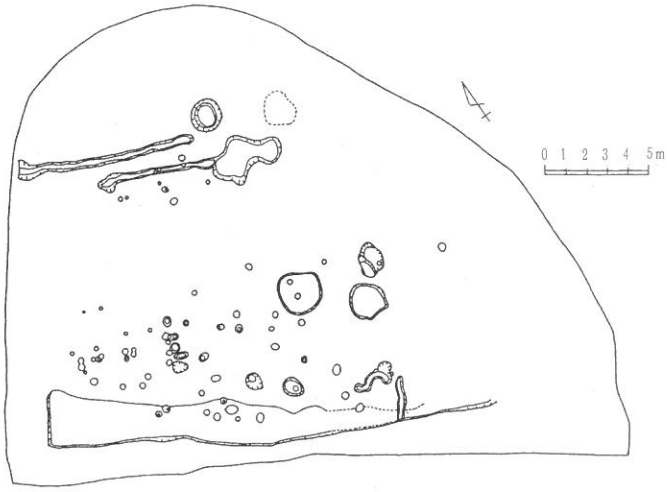
松之坊跡の推定範囲の東域にあたる。表土直下数センチで遺構面となり、多数のピットと、土壙１１個、井戸状遺構１個の遺構を検出したが、建物跡の検出はなかった。径１.３ｍ、深さ０.５ｍを計る円形の井戸状遺構（ＳＥ０１）から軒平瓦や左三つ巴の軒丸瓦が多く出土し、底には板材が敷き詰められていた。１.１×１.６ｍの不整形な方形土壙（ＳＫ０５）と、径１.２ｍを計る土壙（ＳＫ０７）から備前大甕が出土した。



Ｇ２調査区遺構図

Ｇ７調査区

中之坊跡の推定範囲の北東域にあたる。表土直下十数センチで遺構面となり、南に緩く傾斜している。遺構は、多数のピットと井戸１ケ所、溝３条、土壙１０ケ所を検出しているが、建物跡は検出していない。遺物は、井戸（ＳＥ０１）から瓦片と朱塗りの木椀１点が、幅０.４ｍ深さ０.１ｍ長さ８ｍを計る溝（ＳＤ０１）の肩から、完形の須恵器碗や碗片が出土している。また、長径０.５ｍ短径０.３５ｍ深さ０.１ｍを計る楕円形の土壙（ＳＫ１０）からは、土師器小皿１４枚と手づくねの小皿２枚が重なりあって出土した。

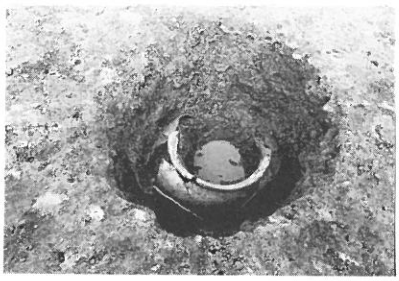


Ｇ７調査区遺構図

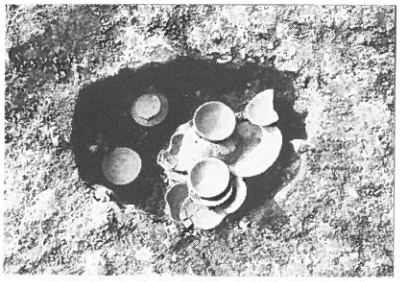
８　まとめ

僧坊跡を絵図に示される位置で検出したことは、絵図の信憑性を裏付けることになり、その意義は大きいものと考えられる。しかしながら、調査はいずれも坊跡の端であるためか、土壙を中心とした遺構検出となり、建物を検出することはできず全容は不明である。

また検出した土壙など遺構についても、その性格を知ることはできなかった。ただ、Ｇ７調査区で検出した土壙（ＳＫ１０）は、出土した小皿の状況から供物皿と思われ、祭祀に伴うものと考えられる。坊の廃絶時期は、出土した備前大甕が三木城の備前大甕と比較的似ていることから、三木城攻めの時期に合うと考えられる。



ＳＫ７検出状況（Ｇ２調査区）



ＳＫ１０検出状況（Ｇ７調査区）

興治（おきはる）１０号墳（ごうふん）

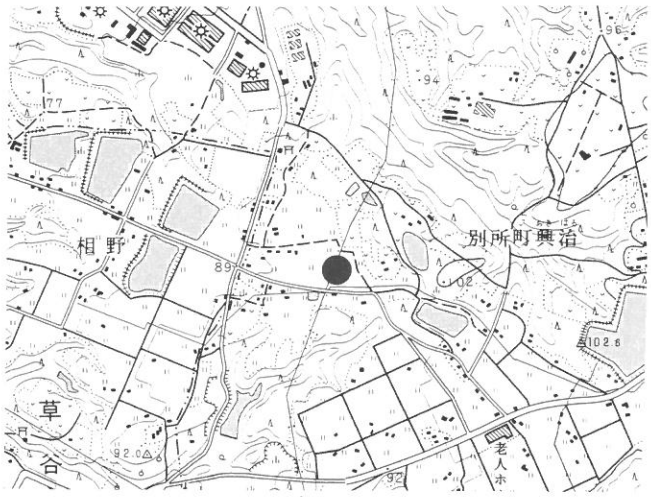
１．所 在 地　　別所町興治

２．事 業 名　　別所地区
　　団体営ほ場整備事業

３．種　　別　　全面調査

４．調査面積　　約１４０㎡

５．調査期間　　平成２年５月８日
　　～６月２１日



位置図（1／25,000）

６．調査に至る経過

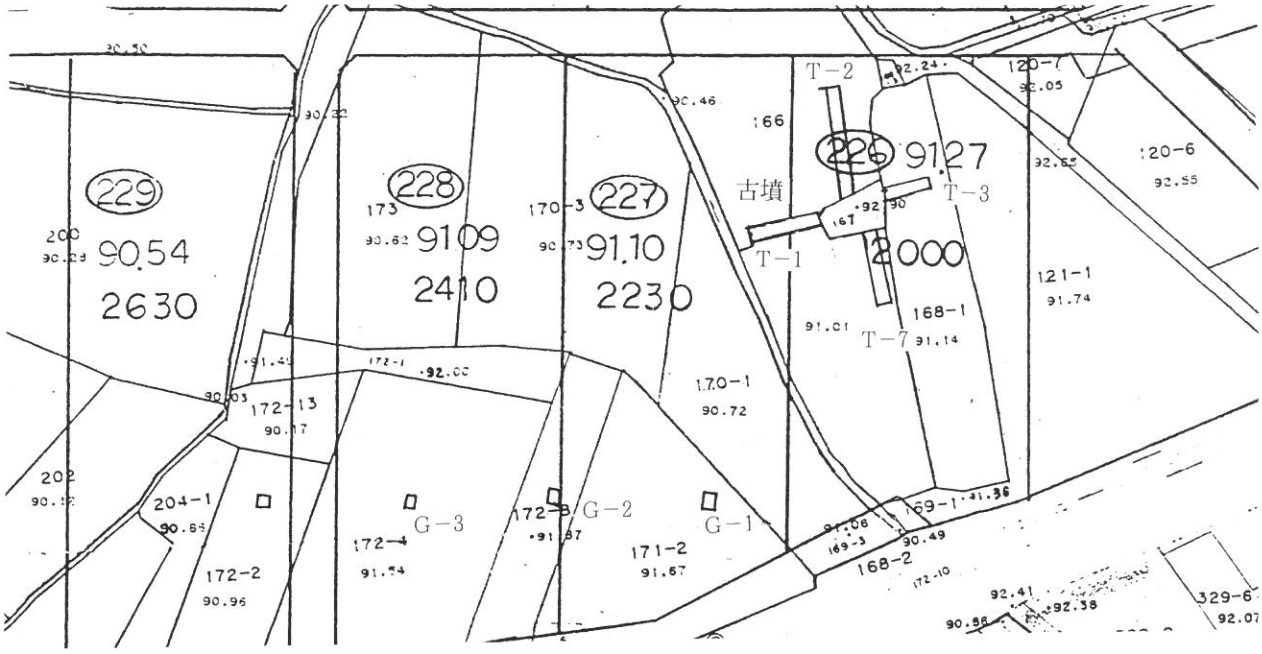
今年度の別所地区団体営ほ場整備事業は、興治工区が施工されることになった。当該地には古墳が４基存在しているが、施工によって壊される１０号墳について調査を実施した。なお、１０号墳はすでにほぼ全壊状況にある。

７．調査概要

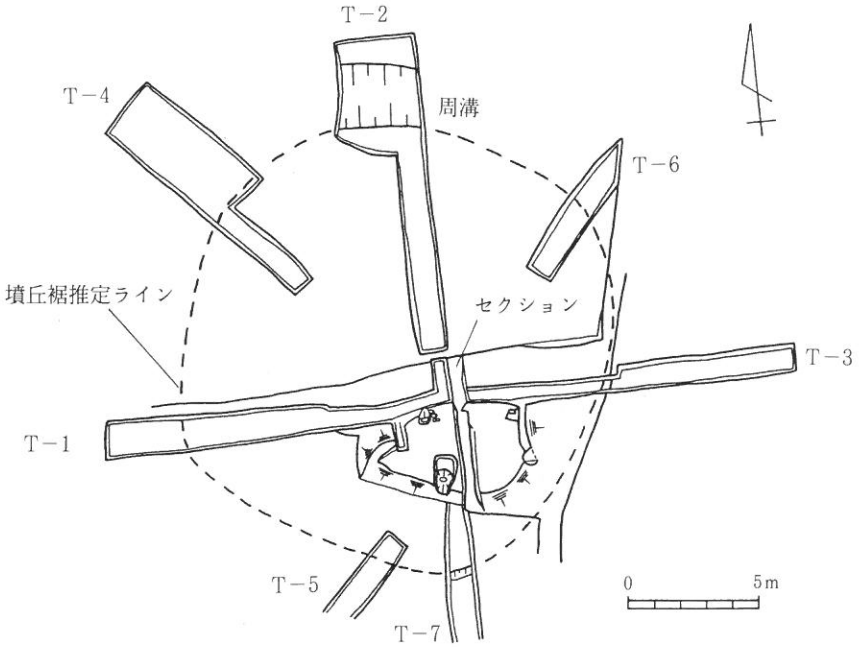
興治１０号墳は、市の西部に位置し、美嚢川の南側丘陵に立地している。調査はまず、トレンチで墳丘の土層の観察と規模の確認を行った。残存する墳丘断面から、礫が混入する約４０㎝四方の粘土塊を確認した。掘り込みをした結果、東側から坏が３セット出土した。粘土塊の表面で朱が一部確認された。この粘土塊は、棺の小口を固定したもので、坏は棺外の遺物と考えられる。墳丘裾に設定したトレンチの１ヶ所から、周溝と思われる溝状遺構を検出し、須恵器甕片が出土した。ほかのトレンチからは、墳丘裾と思われる傾斜を断面で確認した。検出状況から、墳丘の平面形は円形を呈しており、一辺が約１６ｍの方墳であるもの思われる。高さは約２ｍ以上と推定できる。主体部は２つ以上あったものと思われる。

古墳全景

主体部検出状況



調査区図



調査平面図

8．まとめ

興治１０号墳は、一辺約１６ｍの方墳で木棺を直接埋める木棺直葬墳であることが分かった。他の３基の古墳についても同様に木棺直葬墳と考えられる。時期は、出土遺物から古墳時代後期と思われる。なお、当古墳は戦時中軍が飛行場の誘導路建設のために土取りが行われたことでほぼ全壊になったものと思われる。その際、直刀や壺などの遺物が出土していたことを地元の人から聞いたが、出土遺物の所在は不明である。

三木城本丸遺跡

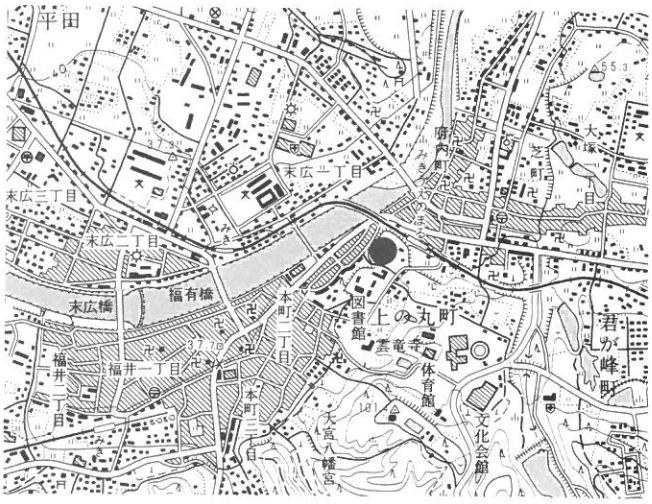
1．所 在 地　　上の丸町(上の丸公園内)

2．事 業 名　　東屋建設事業

3．種　　別　　全面調査

4．調査面積　　約２０㎡

5．調査期間　　平成２年９月２５日
　　～１０月１５日



位置図（1／25,000）

6．調査に至る経過

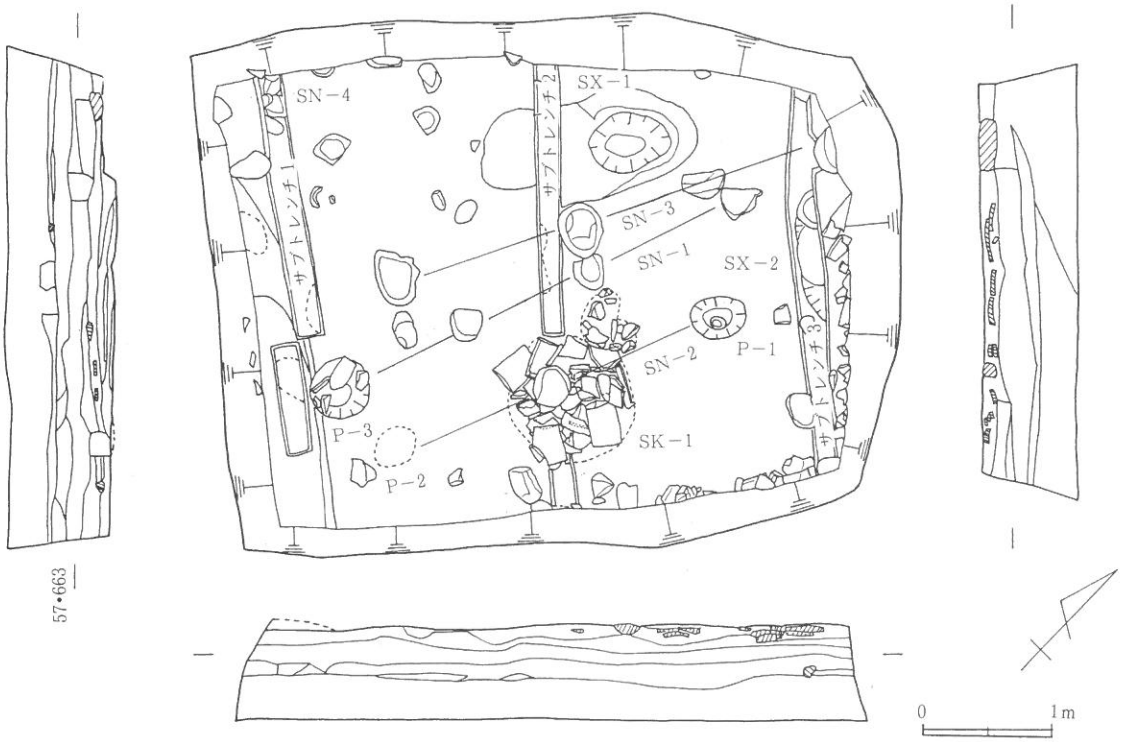
三木東ライオンズクラブが、結成１０周年記念事業として上の丸公園に休憩所（東屋）を建設することになった。当該地は三木城の本丸跡であるため、建設に先立って発掘調査を実施することになった。

7．調査概要

三木城は、市の中央部に位置し、美嚢川の南側丘陵の先端に立地する。調査は、東屋が建設される４×５ｍの約２０㎡について実施された。調査の結果、瓦溜りの土壙（ＳＫ－１）、焼土遺構（ＳＸ－１）、礎石と思われる石列（ＳＮ－１，ＳＮ－２，ＳＮ－３）を検出した。さらに遺構面を３本のトレンチで断ち割ったところ、約１０㎝下でも遺構面が確認された。トレンチで検出した遺構には、落ち込み（ＳＸ－２）・石積み（ＳＮ－４）・礎石と思われる石・ピット・土壙（ＳＫ－２）などがある。

遺構検出状況

ＳＫ－１は、完形の平瓦を含む大量の瓦片が重なるように入っていた瓦溜り土壙である。直径は約１ｍの円形をしており、深さは２０㎝までしか堀り込めなかったので分かっていない。瓦片の上面には、礎石と考えられる３０㎝の石を検出した。ＳＫ－２は、サブトレンチ３で検出した直径約１ｍ、深さ約０．１ｍの楕円形を呈しているものと思われるが、大部分が調査区外に続いている。ＳＮ－１は、調査区のほぼ中央で検出した南北方向の礎石列で、抜け跡のＰ－３を含め３間（約３．４ｍ）を検出した。柱間は１．０～１．２ｍで、方向はＮ－２３°－Ｅで調査区外に続いているものと思われる。ＳＮ－２は、ＳＮ－１の東側に並行して南北方向で２間（２．６ｍ）を検出した。柱間は約１．３ｍで、両端には礎石はなく、抜け跡（Ｐ－１，Ｐ－２）である。検出した礎石は、ＳＫ－１の上面で検出した３０㎝の石である。方向はＮ－２５°－Ｅで、調査区外へ続いているものと思われる。ＳＮ－３は、ＳＮ－１の西側で南北方向の２間（３．４ｍ）を検出した。柱間は約１．４～２．０ｍでほかの石列同様に調査区外に続いているものと思われる。方向はＮ－３０°－Ｅで、検出面はＳＮ－４は、サブトレンチ１で検出した石積みで、立ち上がるように１０～２０㎝の石が不規則に積まれ、高さは約０．３ｍである。サブトレンチでの確認だけで、石積みの追求を行わなかったため、性格は分かっていない。ＳＸ－１は、ＳＮ－３の西側で検出した焼土遺構で、一面に炭が付着していた。南北約１．６ｍ、東西約０．７ｍの楕円形を呈している。土壙内の北側には、一段堀り窪めた南北約０.６ｍ、東西約０．４ｍの楕円形の土壙があり、炊き口と思われる。遺構全体は固く焼け、周縁部及び底は赤褐色に変色した酸化層が認められた。ＳＸ－２は、サブトレンチ３で検出した幅約１．０ｍ、深さ約０．２ｍの落ち込み遺構である。この遺構もＳＮ－４と同様にサブトレンチでの確認だけで、それ以上の追及を行わなかったため、性格は分かっていない。



遺構平面図

これまで検出した遺構のなかで、第１遺構面より検出した遺構は、ＳＮ－１，ＳＮ－２で、第２遺構面より検出した遺構は、ＳＫ－１，ＳＫ－２，ＳＮ－３，ＳＮ－４，ＳＸ－１，ＳＸ－２である。

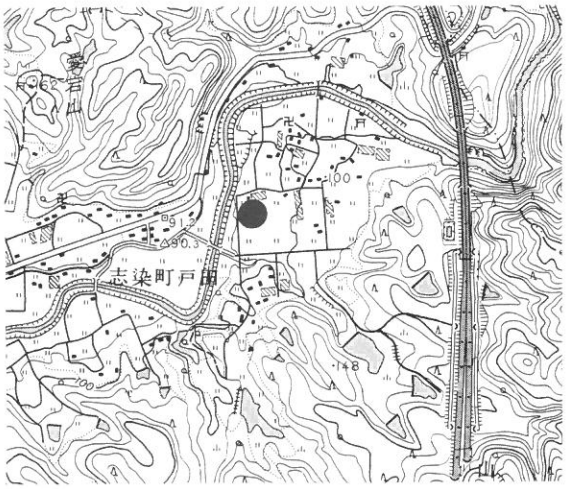
出土遺物には瓦片がほとんどで、備前焼大甕片、かわらけがわずかに出土した。そのほかには、宋銭の「政和通宝」（１０６８年初鋳）と土錘がそれぞれ１点出土した。

８．まとめ

調査面積が２０㎡と極限られた範囲での調査ではあったが、建物が建っていたことを想定できる礎石列や大量の瓦片の出土など三木城跡と考えられる結果となった。建物は、礎石建物で瓦葺きであったものと思われる。遺構面は、２面検出されており、別所時代と羽柴秀吉城代時代の２時期と考えている。第１遺構面が羽柴秀吉城代時代で、第２遺構面が別所時代と考えている。第２遺構面のＳＫ－１から大量の瓦が出土しているところから、別所時代の建物を廃絶した際の瓦と考えられるため、まだ想像の域を脱していないが、織田信長の安土城に先んじて瓦葺き建物であった可能性が考えられる。わずか２０㎡の調査なので、検出遺構の全体像を明確にすることができなかったため、性格や時期などの解明は、今後の調査に委ねたい。

小戸田遺跡（ことだいせき）

1．所 在 地　　志染町戸田
2．事 業 名　　志染地区県営ほ場整備事業
3．種　　別　　確認調査及び全面調査
5．調査面積　　確認調査　　１０８㎡
　　全面調査　１，５００㎡
4．調査期間　　確認調査　平成２年７月２４日
　　～７月２７日
　　全面調査　平成２年１０月２２日
　　～１２月２８日



位置図（1／25,000）

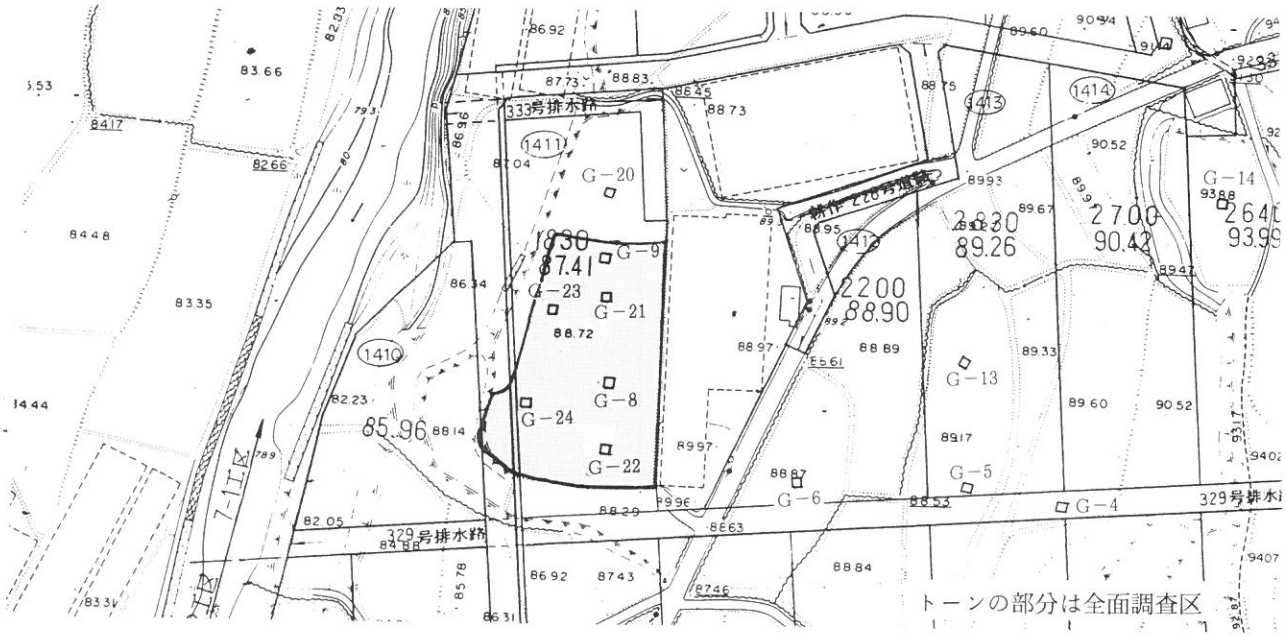
6．調査に至る経過

今年度の志染地区県営ほ場整備事業は、戸田工区が施工されることになった。分布調査で遺物の散布が認められ、また昭和５５年に淡河川を挟んで西側の段丘の戸田遺跡では、溝状遺構から弥生時代終末期の二重口縁の壺が出土していることから確認調査を実施することになった。

7．調査概要

小戸田遺跡は、市の東部に位置し、志染川の支流である淡河川が緩やかに蛇行している東側段丘に立地する。調査は、２×２ｍのグリッドを設定し行った。

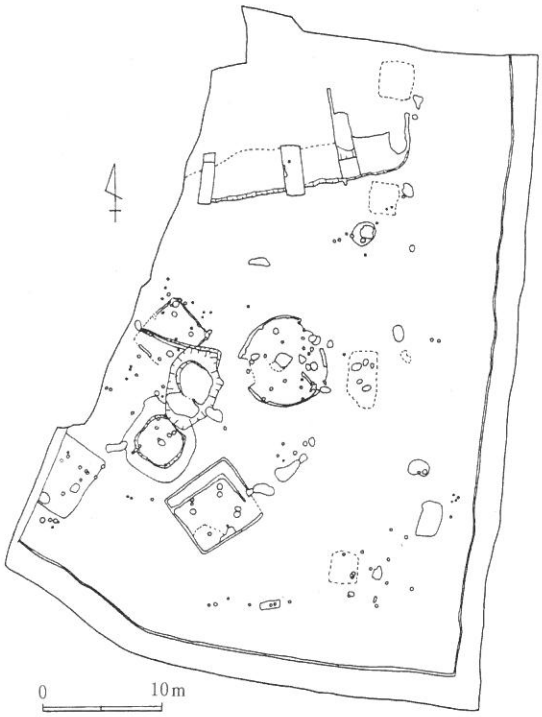
確認調査の結果、川に接する段丘端部の水田に設定したグリッドでピットを５ヶ所と溝状遺構、土壙状遺構を検出した。この部分の水田の設計変更が不可能なため、約１５００㎡について小戸田遺跡と称し、全面調査を実施することになった。



グリッド配置図及び調査区図

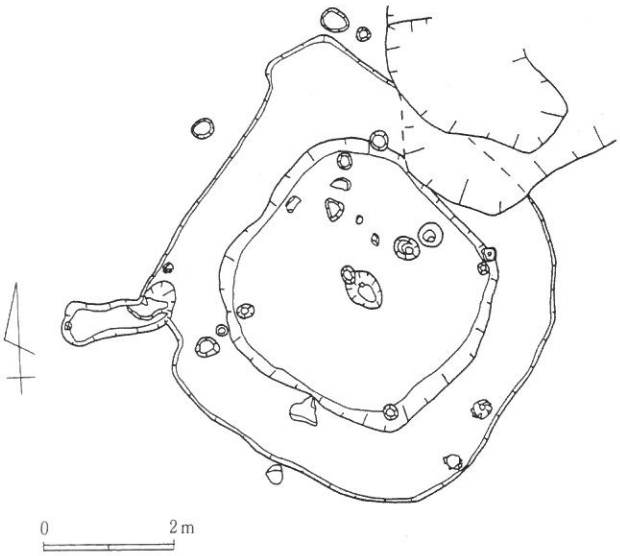
全面調査では、調査区の南西部で竪穴住居５棟と集石遺構２ヶ所を検出した。また東側で土壙を１１ヶ所と北側で石列、落ち込みを検出した。

調査区全景



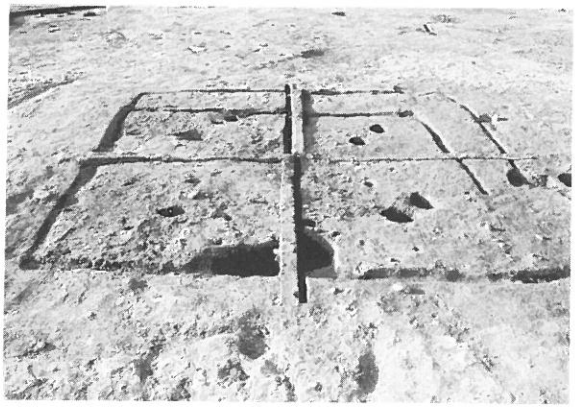
調査区平面図

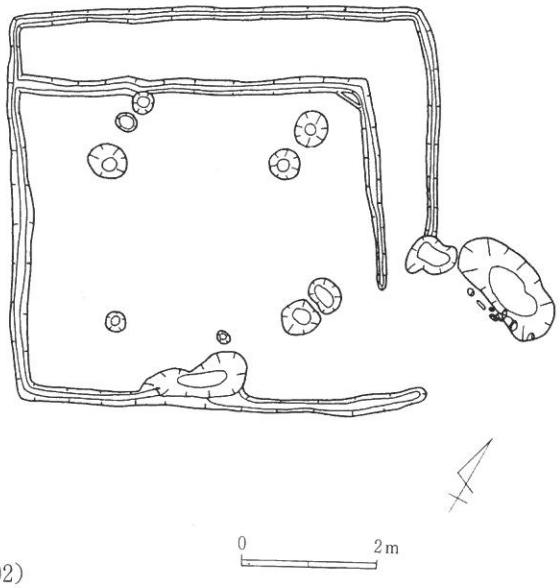
住居址のＳＨ－０１は、一辺約４．６ｍの隅丸方形で北隅に出入口と考えられる張り出しが検出した。中央部に土壙を持ち、外周壁に沿って幅約０．８～１．０ｍのベッド状遺構を備えている。柱穴は各隅から検出している。



住居址（SH－01）

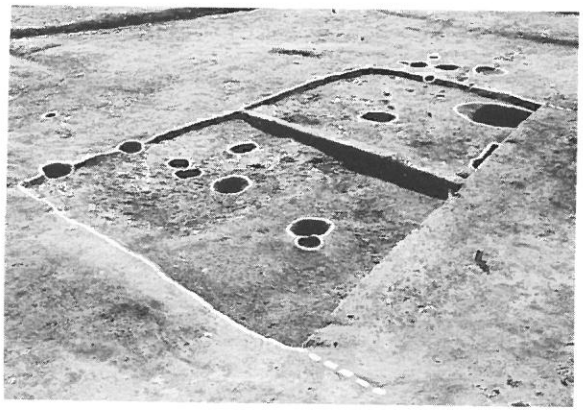
ＳＨ－０２は、５．８×６．４ｍの方形を呈している。周壁溝は、東隅で途切れているが、ほぼ全周して検出した。また、北西と北東の周壁溝の内側に並行して、もう１条周壁溝を検出した。土壙は、南東壁際中央で検出した。柱穴は、南隅で１個、東、西、北の各隅では２個ずつ検出した。おそらく増築されたものと思われる。増築前は４．９×５．５ｍの方形で、出入口はともに周壁溝の途切れた東隅と考えられる。

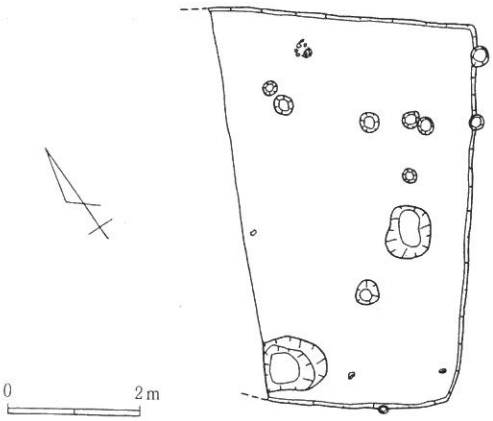




住居址（SH－02）

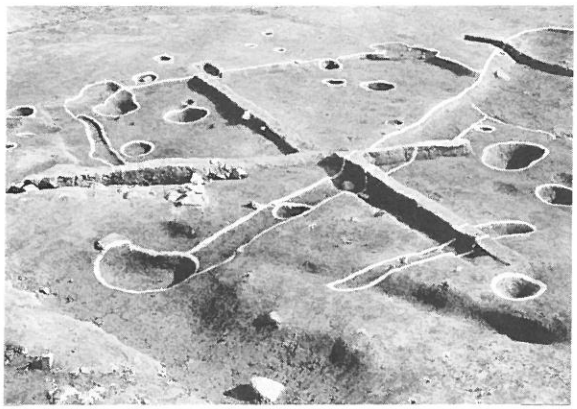
ＳＨ－０３は６×４ｍ以上と思われるが、半分は後世の水田形成時に消滅したものと思われる。南西の壁際で土壙を検出した。周壁溝の検出はなかった。柱穴は、２個検出した。

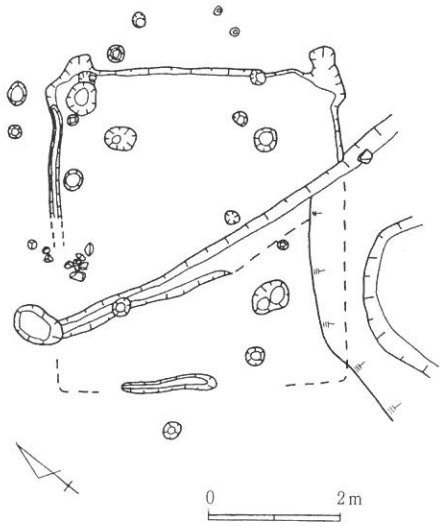




住居址（SH－03）

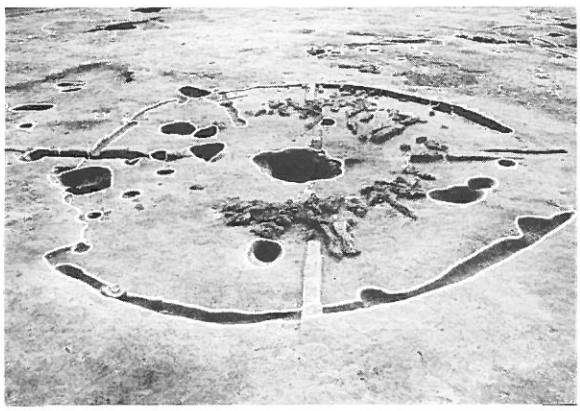
ＳＨ－０４は、後世の削平で大半が消滅し、残存状況は非常に悪いが、４．４×４．９ｍの方形を呈しているものと推定している。周壁溝は全周せず、北西及び南西側の２辺で検出した。柱穴は、４個検出した。





住居址（SH－04）

ＳＨ－０５は、東側周縁で不明瞭な部分があるが、最大径約７．７ｍの不整形な住居址である。周壁溝は西部で途切れるが、ほぼ全周している。中央部で土壙が検出した。直径約１．２ｍの不整形で、深さは約０．６ｍである。多くのピットを検出しているが、主柱穴は六角形の配列をつくる６個のピットと思われる。床面のほぼ全面から、放射線状に炭化した部材が検出していることから、焼失家屋と考えている。



住居址（SH－05）

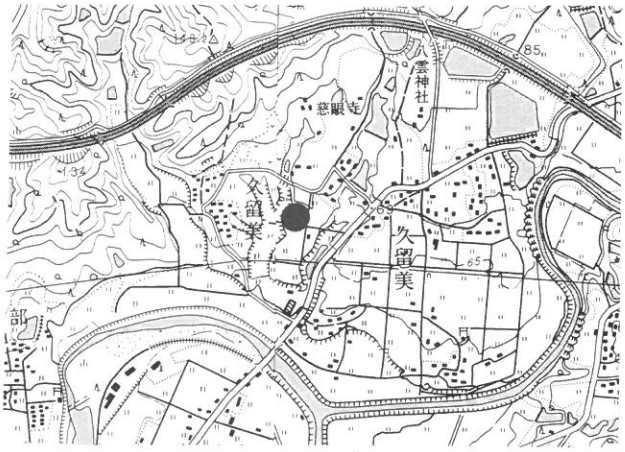
集石土壙のＳＸ－０１，０２は、ＳＨ－０１，０４と切り合って検出した。ＳＸ－０１は、こぶし大の石がほとんどで人頭大の石が若干混じる。遺物は、羽釜片が出土した。ＳＸ－０２は、人頭大の石が多くこぶし大の石が少ない。遺物の出土はなかった。ＳＸ－０１とＳＸ－０２は、当初一つのものと考えていたが、完掘状況から底部が二つに分けることができるため、切り合っているものと思われる。

土壙は、ほぼ全域で検出している。遺物の出土は各土壙とも少ないが、ＳＫ－０２でほぼ完形の土師器壺、ＳＫ－１０で完形の土師器小皿、鉢片などが出土した。

８．まとめ

淡河川を挟んで西側の戸田遺跡で弥生時代終末期の遺構が検出しているところから、小戸田遺跡の住居址群は、それに対応する遺跡と思われる。時期は、出土遺物から弥生時代後期～古墳時代初期と考えている。住居址以外の遺構は室町時代と考えている。

久留美門前遺跡（くるみもんぜんいせき）



位置図（1／25,000）

1．所 在 地　三木市久留美字辻ヶ内
2．事 業 名　久留美地区
　　団体営ほ場整備事業
3．種　　別　確認調査及び全面調査
4．調査面積　確認調査　６０㎡
　　全面調査　８００㎡
5．調査期間　確認調査　平成３年２月１日
　　～２月８日
　　全面調査　平成３年２月１２日
　　～３月２５日

6．調査に至る経過

今年度の久留美地区団体営ほ場整備事業は、門前工区が施工されることになった。分布調査で遺物の散布が認められたため、確認調査を実施することになった。

7．調査概要

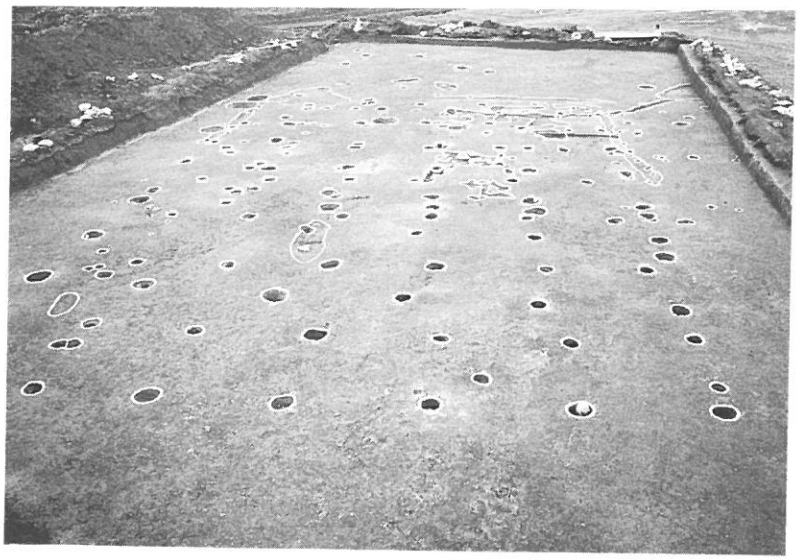
久留美門前遺跡は、市の中央部に位置し、美嚢川が緩やかに蛇行しているところの北西の舌状台地に立地している。調査は、２×２ｍのグリッドを設定し行った。

確認調査では、調査地の中央で設定したグリッドで、軒平瓦が入ったピットを検出した。同一水田に設定したグリッドからピットなどの遺構を検出した。この部分の計画水田の設計変更が不可能であるため、約８００㎡について久留美門前遺跡と称して全面調査を実施することになった。

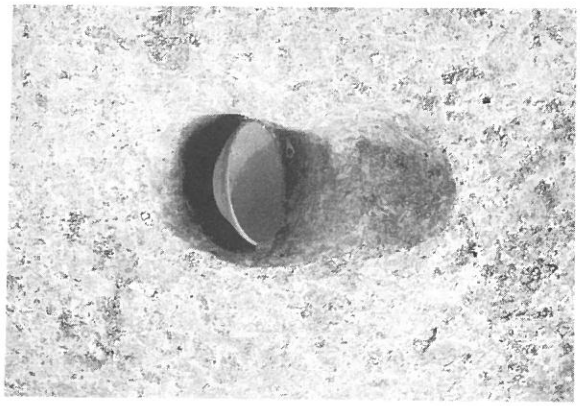
グリッド配置図

全面調査では、掘立柱建物を３棟検出した。建物跡のＳＢ－０１は、２×５間（４．７×１３ｍ）である。柱間は、南北約２．６ｍ、東西約２．４ｍである。ＳＢ－０２は、４×５間（９×１３ｍ）の総柱建物である。柱間は、南北約２．６ｍ、東西約２．２ｍである。この２つの建物はいずれの方向も、南北方向でＮ－１５°－Ｅに主軸を持つ。ＳＢ－０３は、５×７間（１０．６×１８．６ｍ）の総柱建物である。柱間は、南北方向の南端と北端で約２．０ｍ、それ以外は２．２ｍである。東西方向の東端で約２．０ｍで、それ以外は２．６～３．０ｍである。おそらく東・南・北の３方面に庇を持つ総柱建物であると思われる。建物の方向はほぼ東西に主軸を持つ。

また、各建物の柱穴で根石と思われる石を検出しており、完形の須恵器小皿、碗、瓦などが出土した。さらに２ヶ所の柱部分で礎石を検出した。土壙は、１３ヶ所検出した。ＳＫ－０１はＳＢ－０１の南東隅で、ＳＫ－０９，１０はＳＢ－０２，０３の南西隅でそれぞれ検出しており、建物との関連が考えられ、地鎮などの祭祀土壙と推定している。土壙からは、軒丸瓦や須恵器小皿などが出土している。また、ＳＫ－０１では、遺物のほかに焼土を検出している。ＳＫ－１３では、深さ約３㎝であるが、炭で充填されていた。

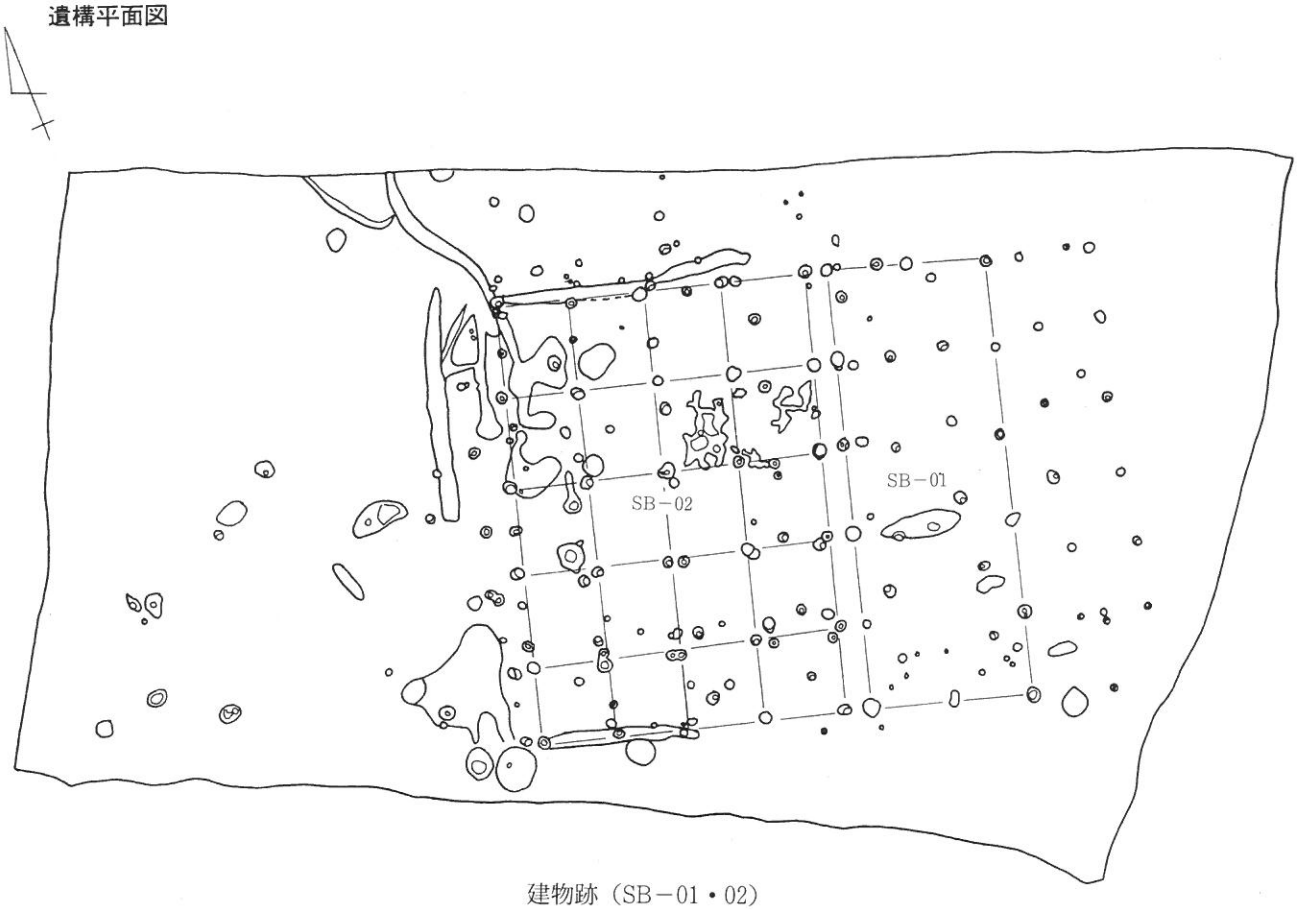


遺構検出状況全景



ピット内遺物出土状況

遺構平面図

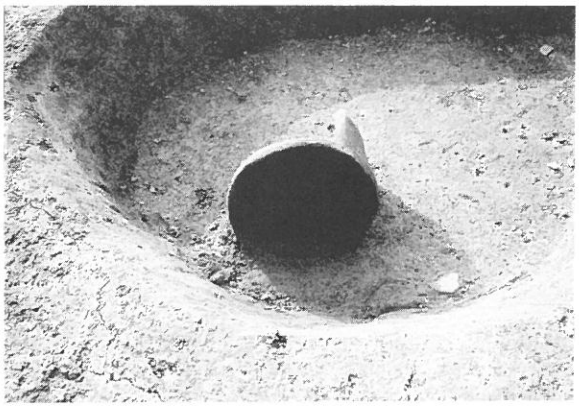


建物跡（SB－01・02）

建物跡（SB－03）

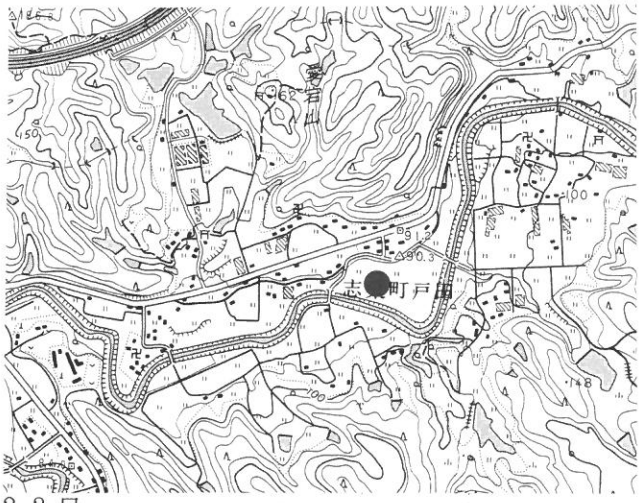
8．まとめ

久留美門前遺跡では、大型の建物跡がほぼ同一方向で検出している。時期は、出土遺物から平安時代末期～鎌倉時代前期と考えている。瓦片が多く出土していることから、瓦葺き建物が考えられ、寺院跡を想定している。また一方では、この時期久留美では窯が操業され、多くの瓦や日用雑器がつくられ、なかでも瓦は当時平安京で寺院が建設されるのに使用されている事実から、窯を統括している役人の屋敷跡を想定している。



軒丸瓦出土状況

戸田井ノ姿々遺跡（とだいのすずいせき）



位置図（1／25,000）

1．所在地　　志染町戸田字井ノ姿々

2．事業名　　志染地区
　　県営ほ場整備事業

3．種　　別　　確認調査及び全面調査

4．調査面積　　確認調査　２４０㎡
　　全面調査　２８０㎡

5．調査期間　　確認調査　平成３年８月２３日
　　～９月１７日
　　全面調査　平成３年９月１９日
　　～１１月２日

6．調査に至る経過

今年度の志染地区県営ほ場整備事業は、戸田工区が施工されることになった。分布調査で遺物の散布が認められ、昭和５５年度の調査で弥生時代～中世の遺構を確認した戸田遺跡に隣接しているため、確認調査を実施することになった。

7．調査概要

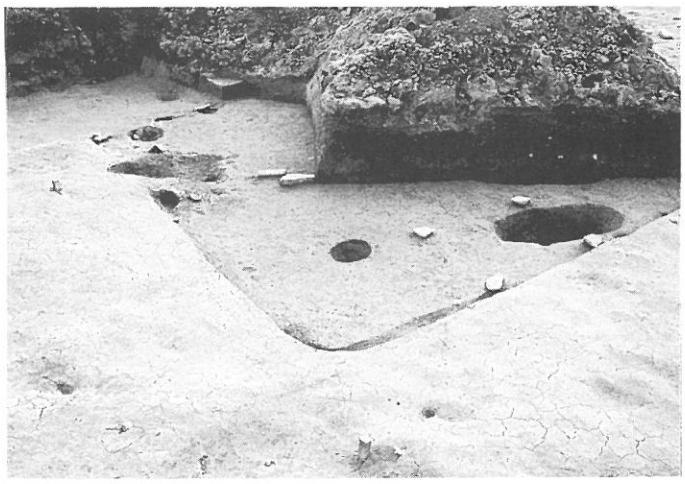
戸田遺跡は、市の東部に位置し、志染川の支流である淡河川を挟んで北西と南側段丘に立地している。調査は、２×２ｍのグリッドを設定し行った。

確認調査の結果、北西の段丘では県道沿いで設定したグリッドでピットを、下段の水田中央で設定したグリッドでピットと土壙状遺構を検出した。南側段丘では南東から北東方向の溝を検出した。北西段丘で遺構を検出した排水路計画部分での設計変更が不可能であるため、約２８０㎡について全面調査を実施した。

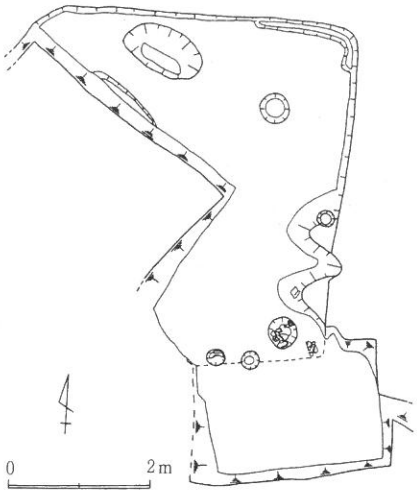
グリッド配置図及び調査区図

全面調査では、中央部で竪穴住居とピットを４個、土壙を１ヶ所検出した。住居址は、一辺約４．６ｍの方形を呈しているが、一部は調査区外になっている。東壁の中央南寄りでカマドを備えている。

他に北壁で土壙２ヶ所と北西隅でピット１個、南東隅でピット３個を検出した。遺物は、土師器壺口縁部が出土した。

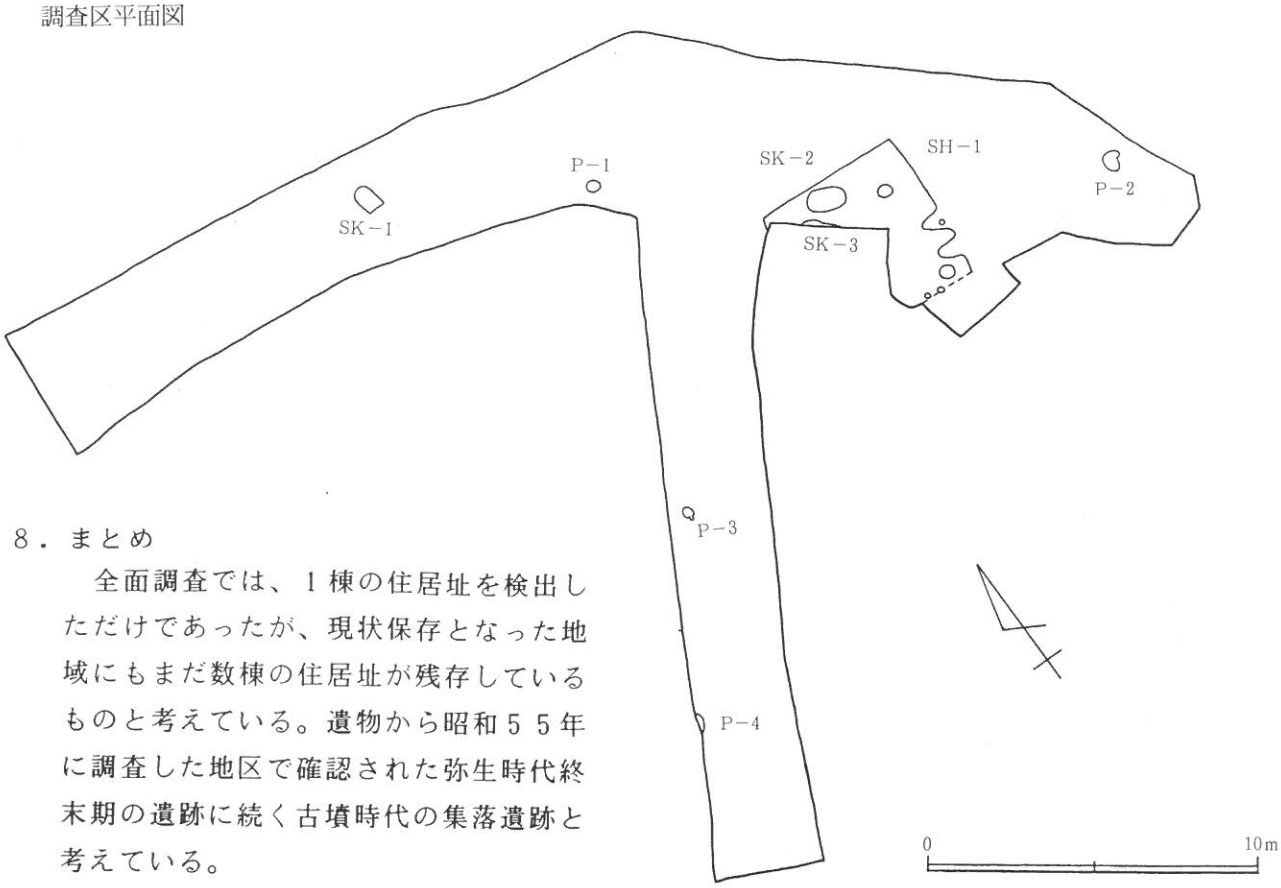


住居址検出状況



住居址平面図

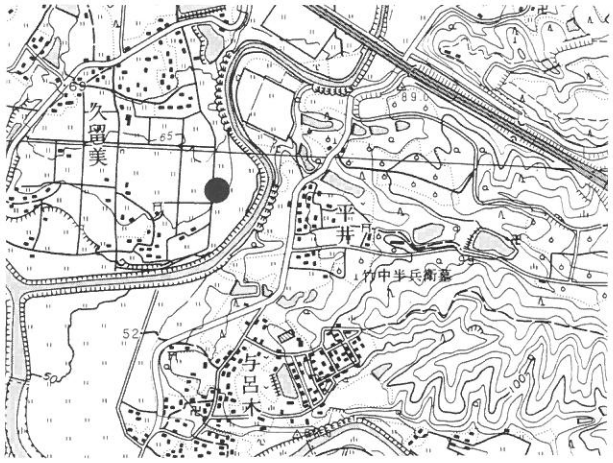
調査区平面図



８．まとめ

全面調査では、１棟の住居址を検出しただけであったが、現状保存となった地域にもまだ数棟の住居址が残存しているものと考えている。遺物から昭和５５年に調査した地区で確認された弥生時代終末期の遺跡に続く古墳時代の集落遺跡と考えている。

久留美上野ノ下遺跡（くるみうえのノしたいせき）



位置図（1／25,000）

1．所 在 地　　三木市久留美字上野ノ下、井ノ尻

2．事 業 名　　久留美地区
　　団体営ほ場整備事業

3．種　　別　　確認調査及び全面調査

4．調査面積　　確認調査　　１７２㎡
　　全面調査　２，４５０㎡

5．調査期間　　確認調査　平成３年９月１２日
　　～１１月６日
　　全面調査　平成３年１１月７日
　　～平成４年２月１日

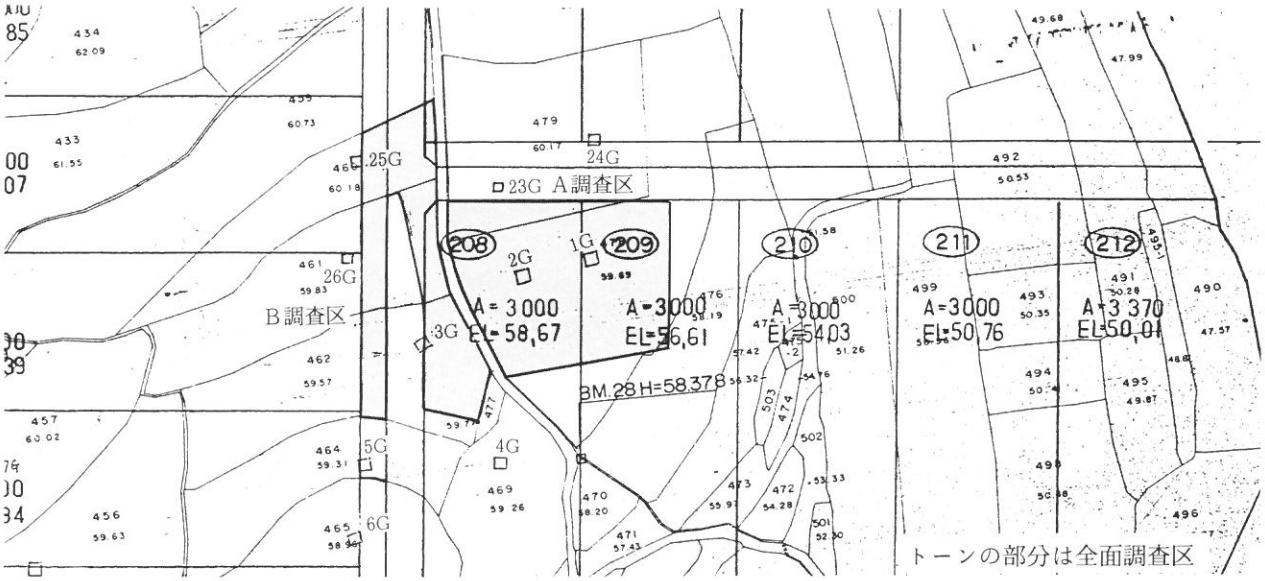
6．調査に至る経過

今年度の久留美地区団体営ほ場整備事業は、上野ノ下工区が施工されることになった。分布調査で遺物の散布が認められたため、確認調査を実施することになった。

7．調査概要

久留美上野ノ下遺跡は、市の中央部に位置し、美嚢川が蛇行する西側の舌状台地に立地している。調査は、２×２ｍのグリッドを設定し行った。

確認調査の結果、東側の微高地に設定した１～４Ｇ・２５Ｇと中央微高地に設定した１３，１４，２７Ｇで、ピット・溝・土壙を検出した。東側微高地の部分の設計変更が不可能であるため、約２４５０㎡について全面調査を実施することになった。全面調査の部分は中央に畦畔があるため、東側をＡ調査区（約１９００㎡）、西側をＢ調査区（約５５０㎡）として行った。

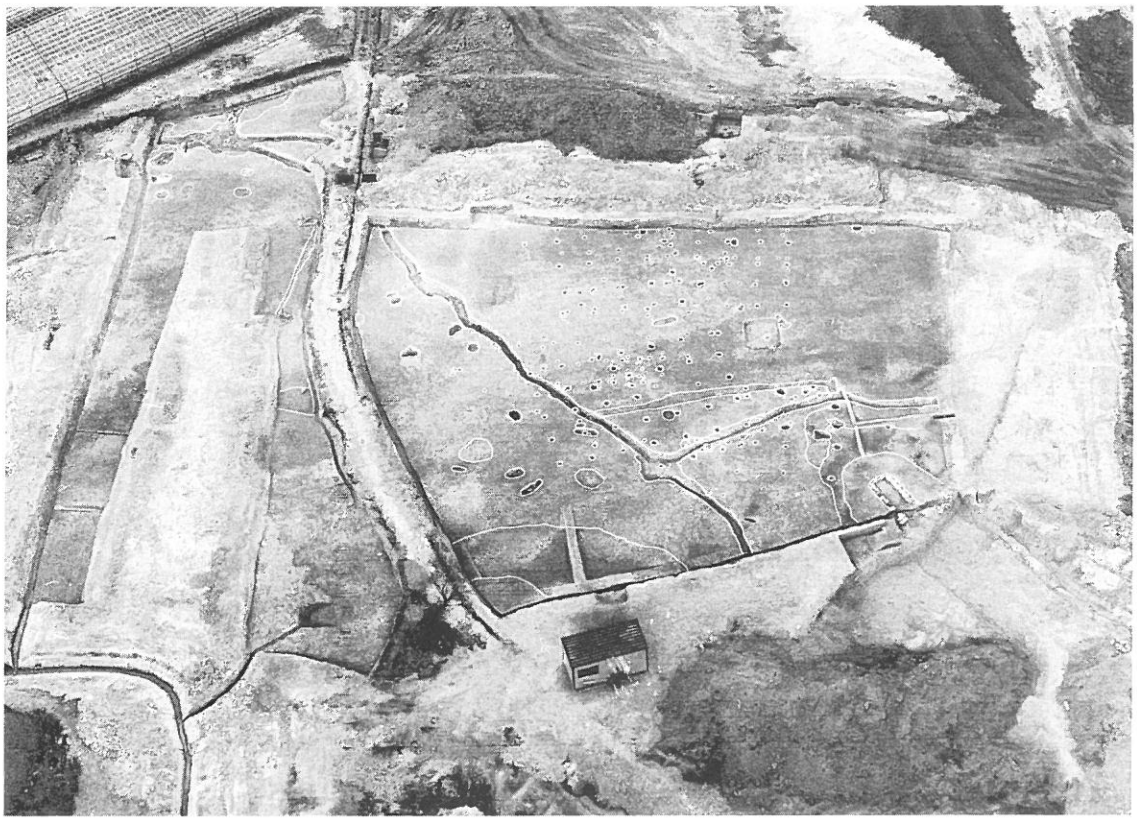


グリッド及び調査区配置図

全面調査の結果、Ａ調査区では総柱の掘立柱建物を３棟、溝を２条、地鎮遺構、横穴式石室墳の基底部を、Ｂ調査区では分岐する溝を３条、集石土壙を２ヶ所、土壙を１ヶ所検出した。

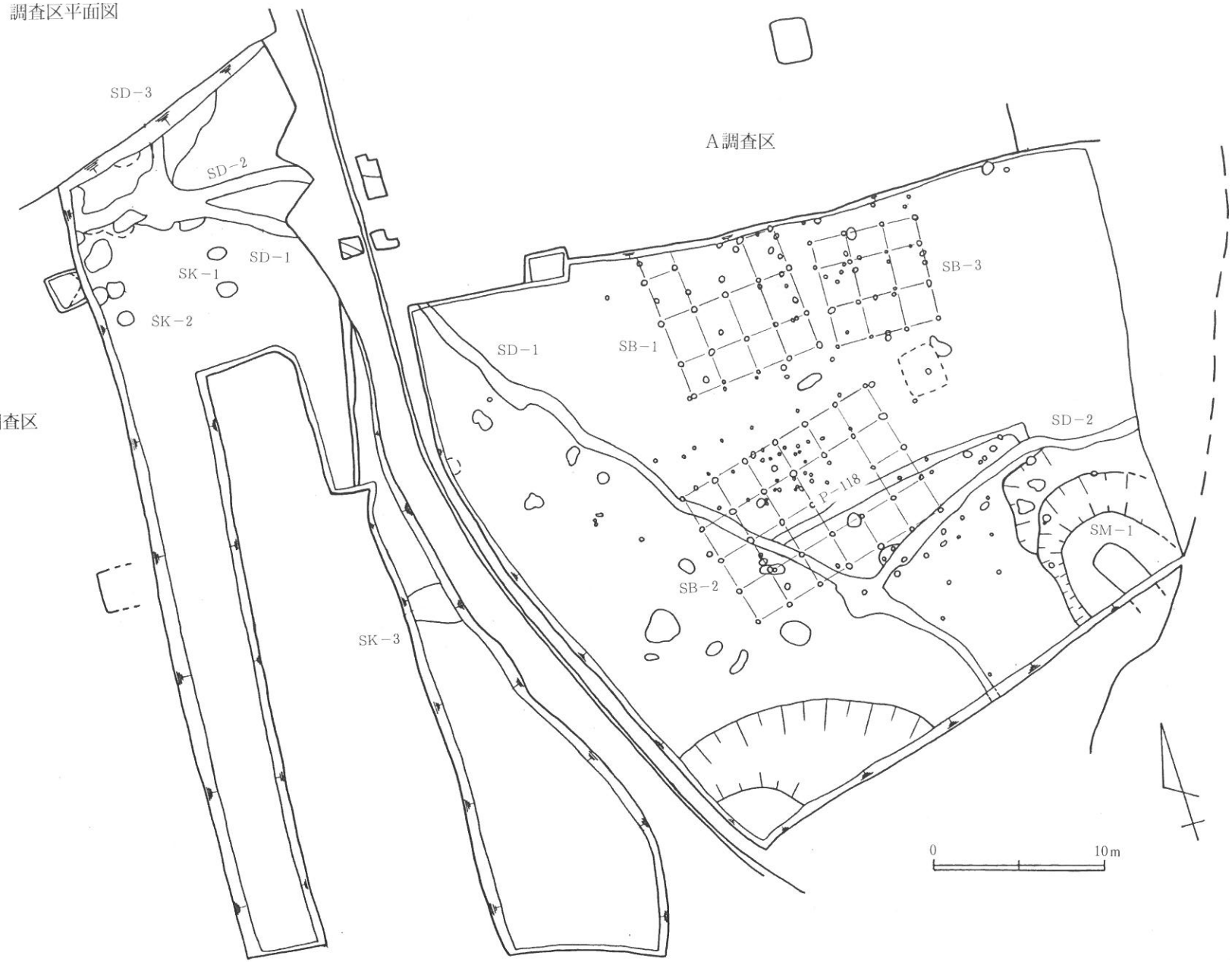
〈Ａ調査区〉

ＳＤ－１は、調査区の西側で検出した溝で、北西から南西にやや蛇行して流れている。幅は約０．５～０．８ｍで、深さは約０．３～０．４ｍである。遺物は、中央部から軒丸瓦片や完形品を含んだ須恵器・土師器片が集中して出土した。ＳＤ－２は、ＳＤ－１の途中で東方向へ分かれている溝である。幅は約０．５～０．８ｍで、深さは約０．３～０．４ｍである。遺物は、須恵器鉢片などが数点出土した。ＳＢ－１は、調査区中央北側で検出した掘立柱建物で、４×３間（８×７．２ｍ）以上で調査区外へ延びている総柱建物である。柱間は東西約２．０ｍ、南北約２．０～２．６ｍである。ＳＢ－２は、調査区中央で検出した掘立柱建物で、ＳＢ－１の南に位置する。４×６間（８．４×１２．８ｍ）の総柱建物である。柱間は、約２．１ｍである。なお、南側の柱列に並行して３間の柱列を検出し、張り出しを備えているものと思われる。ＳＢ－１，２とも中央部で１ヶ所ピットが検出されていない。ＳＢ－３は、ＳＢ－２の東側に隣接して検出した。柱間は、３×３間（６×６ｍ）で調査区内で完結しているものと思われるが、北側の調査区外に続いてる可能性も考えられる。各建物のピットからは、須恵器小皿・碗などが出土した。



Ａ調査区・Ｂ調査区全景

調査区平面図

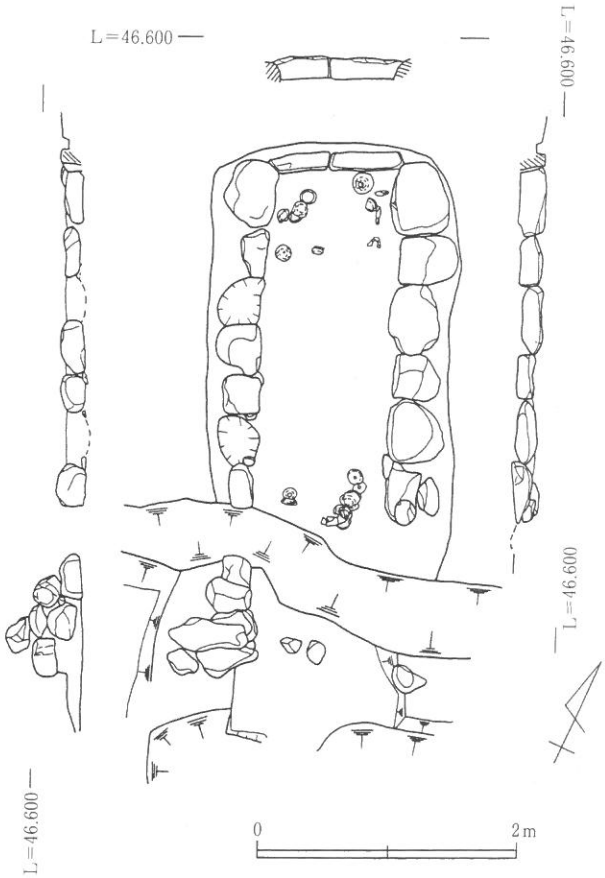

SD－3
SD－2
SD－1
SK－1
SK－2
B調査区
SK－3
A調査区
SD－1
SB－1
SB－3
SD－2
P－118
SM－1
SB－2
0
10m

Ｐ－１１８は、ＳＢ－２のほぼ中央で検出したピットで、なかから須恵器碗を２枚蓋にした須恵器壺が埋納されていた。壺は口縁部を打ち欠いており、なかには５～１０㎝の河原石が８個入っていた。出土状況から地鎮遺構と考えている。

Ｐ－118　地鎮遺構検出状況

ＳＭ－１は、調査区南東隅で検出した石室を埋葬施設に持つ古墳である。検出した石室は基底部の一段のみで、砂岩をおもに使用している。幅は約１．８ｍで検出した長さは約３．０ｍである。南側は、下段水田のため削平されているため約３．０ｍだけの検出となった。出土遺物は、坏身・摘み付き蓋坏・長頸壺・高坏などがある。また、墳丘の規模は、検出状況から南北約１０ｍ、東西約７ｍの楕円形を呈していると思われる。古墳の周りを最大幅約３．３ｍの溝が巡るように検出した。おそらく周溝と思われる。周溝からは、中世の遺物とともに坏身片が出土した。

石室検出状況



石室平面図

〈Ｂ調査区〉

ＳＤ－１は、調査区の北端で遺物が集中して出土した溝である。ＳＤ－１は、南東方向に流れる溝で、Ａ調査区のＳＤ－１に続いている。幅約１ｍ、深さ約０．４ｍである。溝からは、完形の碗を含む須恵器片が多く出土した。ＳＤ－２は、分岐して東方向に流れる溝である。幅約１ｍ、深さ約０．４ｍである。ＳＤ－３は北から流れ込む溝で、幅約２ｍ、深さ約０．２ｍである。ＳＫ－１は、直径約０．８ｍの不整形な円形を呈している。約２０㎝の石が集積している土壙である。深さは約０．２ｍである。ＳＫ－２は、ＳＫ－１と同様に２０㎝の石が集積する直径約１ｍの不整形な円形を呈する土壙である。深さは約２０㎝である。

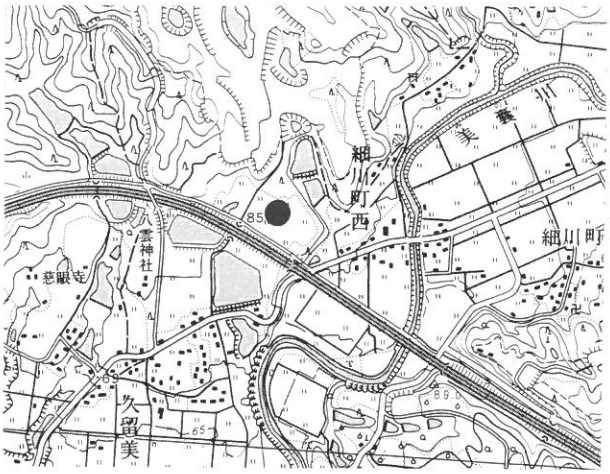
８．まとめ

久留美上野ノ下遺跡では、３棟の掘立柱建物を検出したが、そのうち２棟(ＳＢ－１，ＳＢ－２)の大型建物は中央に柱穴を持たず、特殊な建物と思われる。昨年度調査した久留美門前遺跡でも同様に大型の建物を検出しており、寺院跡もしくは領主の屋敷を想定していることから、当遺跡でも同様なことが想定できる。久留美地区にはこのような一般の集落とは違う当時の上層階級の集落が広がっているものと思われる。また、南東隅で検出した古墳は、出土遺物から２時期にわたるもので追葬が考えられる。おそらく古墳時代後期～終末期の横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳と推定される。

くるみたいの

久留美田井野遺跡

1　所在地　　三木市久留美字田井野
2　事業名　　団体営ほ場整備
3　種　別　　全面調査
4　期　間　　一次　平成４年３月５日～
　　５月２９日
　　二次　平成４年８月３日～
　　１２月１８日
5　面　積　　６，２００㎡



位置図(1/25,000)

6　調査に至る経過

田井野地区を横断する山陽自動車道建設にともない、平成２年及び３年に兵庫県教育委員会が実施した発掘調査で、存在が明らかになった遺跡である。

山陽自動車道建設と前後して、当該地でほ場整備事業が計画されたため、遺跡の広がりを確認する調査を実施し、山陽道の北側の事業地内に広がることが認められた。遺跡の範囲は約１０，０００㎡に及ぶものと推定された。事業担当課と協議を行なったが、当事業地内から山陽自動車道建設に必要な土砂を供給するため、設計変更は困難であると判断され、遺跡推定範囲の北端区域を除く大部分が全面調査となった。

7　調査概要

田井野遺跡は、段丘に展開する遺跡で、その中央部を南西方向に開析する谷によって東西に二分される。

調査は、山陽道の建設と絡んで２次に分け実施することとなり、西地区を水田の段差と調査時期によって３地区に分割して、山陽道に接する南からＡ，Ｂ，Ｃ調査区と呼称し、東地区は東調査区と呼称して行なった。

Ａ調査区

調査区の西側はやや稀薄であるが、中央から東で掘立柱建物７棟のほか、無数のピット群や土壙などが検出されている。また、中央南端の壁際で、竪穴住居の周壁溝と思われるＬ字の溝を検出している。

掘立柱建物の主軸はいずれも北東、もしくはそれに直交する方向を指向している。建物の規模は、５棟が概ね４×６ｍを測り、２棟は概ね３×３ｍを測る。この小規模な建物は、束柱をもつ総柱建物である。

Ｂ調査区

調査区のほぼ中央部に片寄って、掘立柱建物６棟のほか、無数のピット群や土壙を検出した。西半分の遺構状況は稀薄で、調査面積に比べ検出遺構は少ない。

掘立柱建物の主軸はＡ調査区と同様に北東、もしくはそれに直交する方向である。建物

規模は、概ね４．３×６ｍ、３．５×４．３ｍ、３×３ｍを測り、それぞれ２棟づつ検出している。中には束柱と看取できる総柱建物がある。

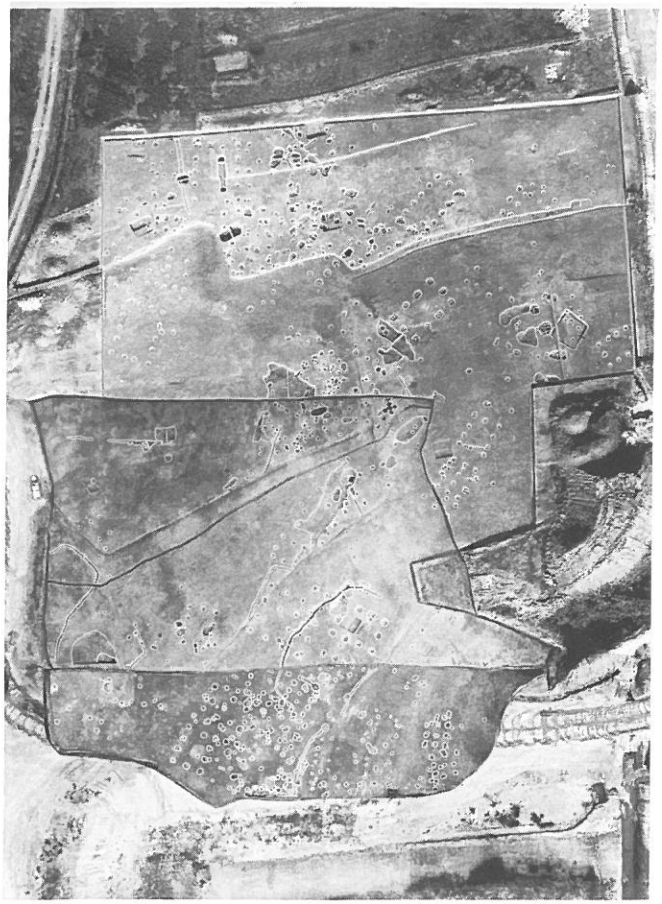
Ｃ調査区

調査区のほぼ全面から遺構の検出があり、掘立柱建物１６棟と竪穴住居１棟のほか、柵列やピット群、土壙を検出している。

掘立柱建物の主軸は、やはり北東もしくはそれに直交する方向である。建物の規模は、概ね３×３．９ｍ～５×９ｍを測り、ＳＢ２（５×９ｍ）は検出した全ての建物の中で最大である。また、ＳＢ７は２×２間の建物であるが、中央から束柱と思われる柱穴を２個検出している。

柵列ＳＡ１とＳＡ２は約５．４ｍ隔てて並行し、またＳＡ３とＳＡ４も約３．２ｍ隔てて並行していることから、建物跡と考えられるかもしれない。

住居跡は、調査区の南東部で検出し、規模は一辺約３．５ｍで方形を呈している。周壁溝は、平面での検出は不明瞭であったため、サブトレンチによって追求し検出したものである。柱穴についても３ケ所で検出しているが、非常に浅く柱穴として捉えるよりも、柱を据えたためによる窪みと考えられる。



Ａ～Ｃ調査区全景

東調査区

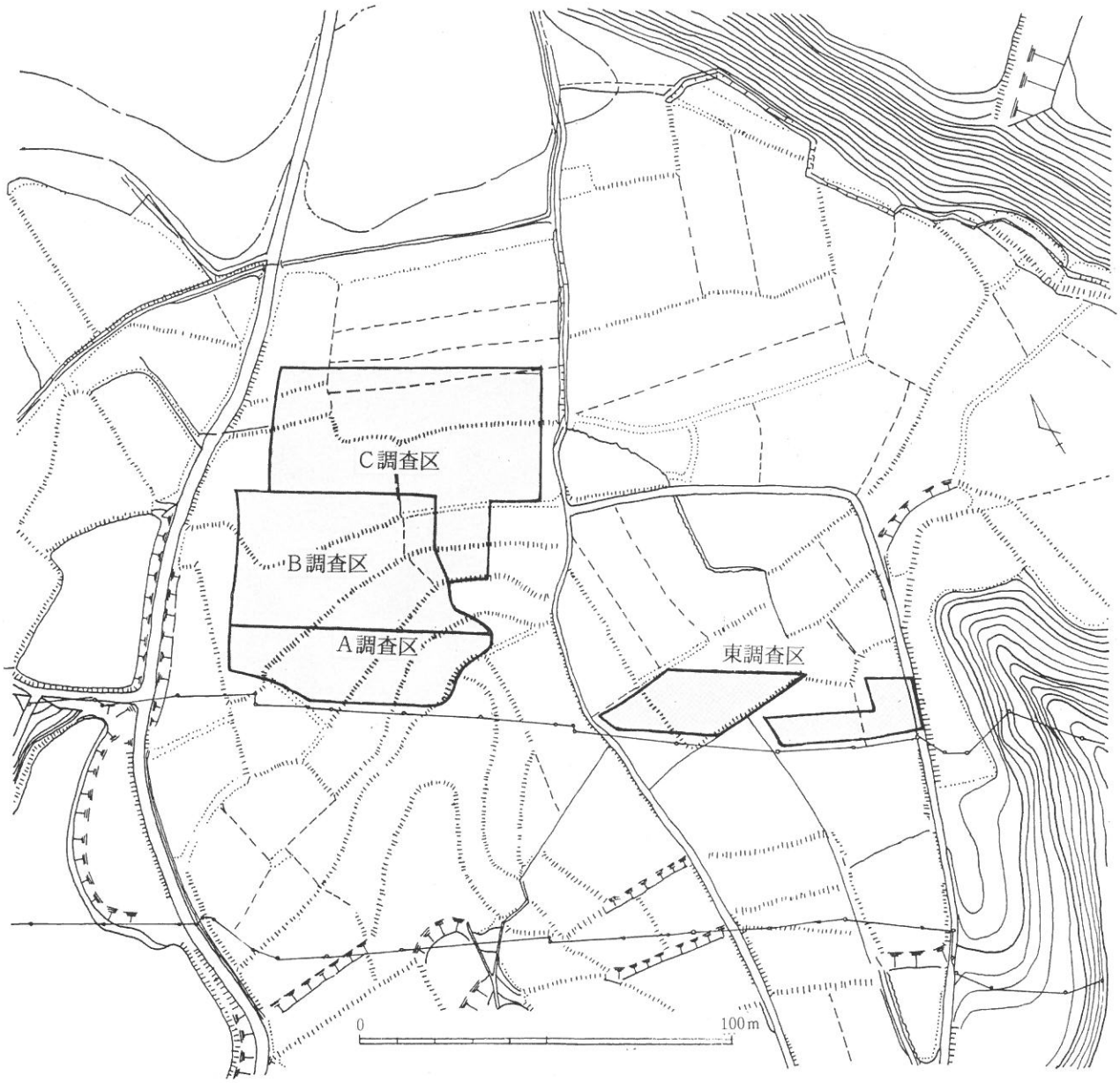
山陽道の北辺に接する調査区で、掘建建物２棟、ピット群、土壙を検出ている。建物の主軸は、北東及び北方向である。主軸を北東にするＳＢ２の規模は、約３．４×５．５ｍを測り、西側に片庇をもつ。北にするＳＢ１の規模は、約３．４×３．５ｍ以上である。

８　まとめ

遺構の中心を占める掘立柱建物は、４調査区をあわせると３１棟に及ぶ。これらを主軸方向によって３～４のグループに分類でき、３時期以上の形成過程を経たものと推測している。

調査区の旧地形の復元によって、掘立柱建物の主軸や配列が南東方向を指向するのは、遺跡が開析谷に挟まれた段丘上に位置し、地形の制約を受け段丘部の中央部など比較的平坦な場所を選定してためと考えられる。また、遺物の出土量は比較的少なく、水田形成などによる削平の影響によるものと思われる。時期については、奈良時代後期を中心とした時期と考えている。

田井野遺跡調査区図



SB11
SB8
SB9
SB10
SB1
SB7
SB15
SB4
SB5
SB6
SH1
SB3
SB16
C調査区
SB4
SB12
SB13
SB14
SB3
SB6
B調査区
SB5
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
A調査区
SB2
SB6
0
20m

遺構平面図

小林八幡神社遺跡

位置図（1／25,000）

1．所 在 地　　三木市福井

2．事 業 名　　市道三木山幹線
　　道線新設事業

3．種　　別　　全面調査

4．調査面積　　約６００㎡×２

5．調査期間　　一次調査　平成５年１月２２日～４月１０日
　　二次調査　平成６年１月２５日～３月３０日

6．調査に至る経過

当該地は現在、享保１３年（１７２９）に建立されたと伝えられている八幡神社である。また、三木合戦時〔天正６～８年（１５７８～８０）〕に織田方が築いた付城に比定されている。平成３年度に市道三木山幹線道路の延長計画が決定し、計画では路線が当遺跡を通過するため、約６００㎡について全面調査を実施することになった。

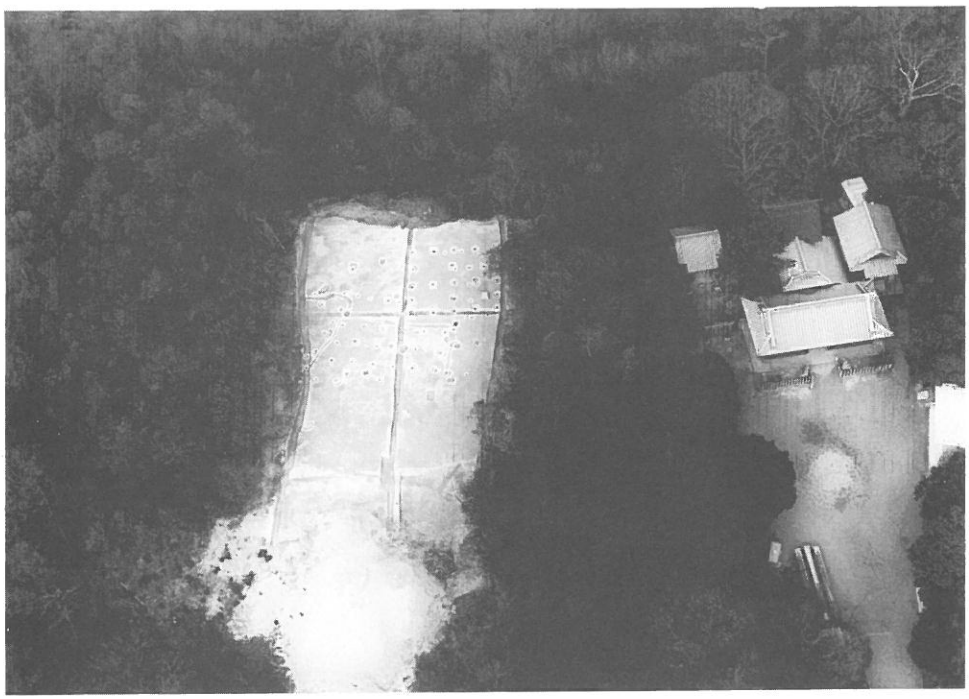
7．調査概要

小林八幡神社遺跡は、市の南部に位置し、高木方面より南東に延びるシクノ谷で分断された南側丘陵の先端部分に立地している。付城は、三木城から南東へ約２．２㎞のところにあり、城内から三木城を確認することはできない。また、法界寺より南東に延びる多重土塁の一角に築かれている。規模は、境内を中心に東西約１３０ｍ、南北約４０～６０ｍの約７５００㎡である。表面観察では、境内より西へ広がり北西隅に櫓台を持つ主郭と、さらに西側に岸が崩れて不明瞭ではあるが、郭と考えられる平坦部と主郭の東側の馬出し状の郭から構成されている。付城の周囲は、北側にはシクノ谷、南側にはシクノ谷より付城の西端で分岐した支谷があり、北・南・西の三方が谷で囲まれ、天然の堀のようになっている。神社建立の際、主郭の東半分は本殿によって削平され、南側土塁は参道によって一部消滅しているが、それ以外の部分は比較的良好に残存している。調査地は、主郭の西側約６００㎡である。調査は、幅１ｍのトレンチを調査区東端及び西端と十字に交差するように４本設定して、土塁の断ち割り状況と断面土層を観察しながら遺構面の検出に努めた。

〈一次調査〉

調査の結果、主郭は平均約３０㎝の整地を行っている。中央部から北側の土塁にかけてさらに２０㎝の盛土を行って、約１０×１２ｍ以上の方形を呈した範囲に基壇状

トーンの部分は全面調査区



遺跡全景

の高まりをつくって南西方向に緩やかに傾斜をつけて成形している。基壇状部分の法面には、こぶし大の河原石が敷きつめられている。おそらく土留めのための地固めと考えられる。

郭内の遺構としては、一辺７０㎝の方形土壙を３ヶ所と直径約５０㎝の円形の集石遺構を１ヶ所検出した。方形土壙はいずれも深さ約１０㎝程度で、炭・焼土が混じっているが、焼けた痕跡は認められなかった。集石遺構についても深さ約４０㎝で遺物の出土がないため、性格が不明である。なお、付城に伴う建物跡の検出はなかった。

土塁は、調査区で北・南・西の三方向に巡っている。西側の土塁は調査区外であるが、南端部で虎口が認められ、そこから竪堀状の遺構が南斜面で認められる。北側の土塁はシクノ谷に面した切崖になっており、部分的に崩壊が認められる。基底部を凹状に整地し、さらにその上をきめ細かい土で版築している。基底部の幅は約２．８ｍ、内法高は約０．５～１．０ｍである。南側の土塁は、整地層より小礫混じりの砂質の強い土を版築している。基底部の幅は約４．４ｍ、内法高約０．７ｍ、外法高は約２ｍである。土塁は、東側の調査区外のところまで延びて不明瞭になっている。

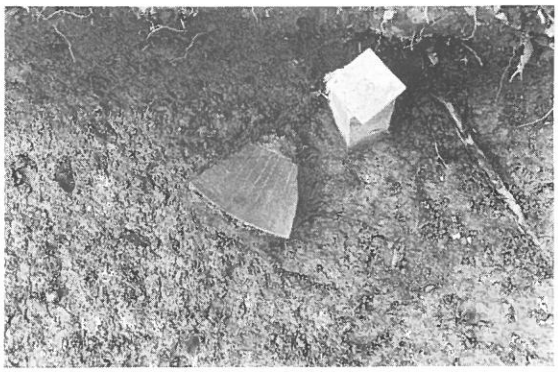
北側及び南側のいずれの土塁の内法の基底部は、こぶし大の河原石で土留めのための地固めをしている。また、調査区東端部より郭が南へ張り出す形になっており、その縁辺を新たに土塁が延びている。おそらく、横矢掛かりを意識したものであると思われる。

北西隅の櫓台と考えている平坦部は、北側の土塁が西側に折れ曲がった角を利用して、さらに台状に土を積んで約１０㎡の空間をつくっている。ここも礎石やピットの検出がなく、建物の存在を明らかにできなかった。

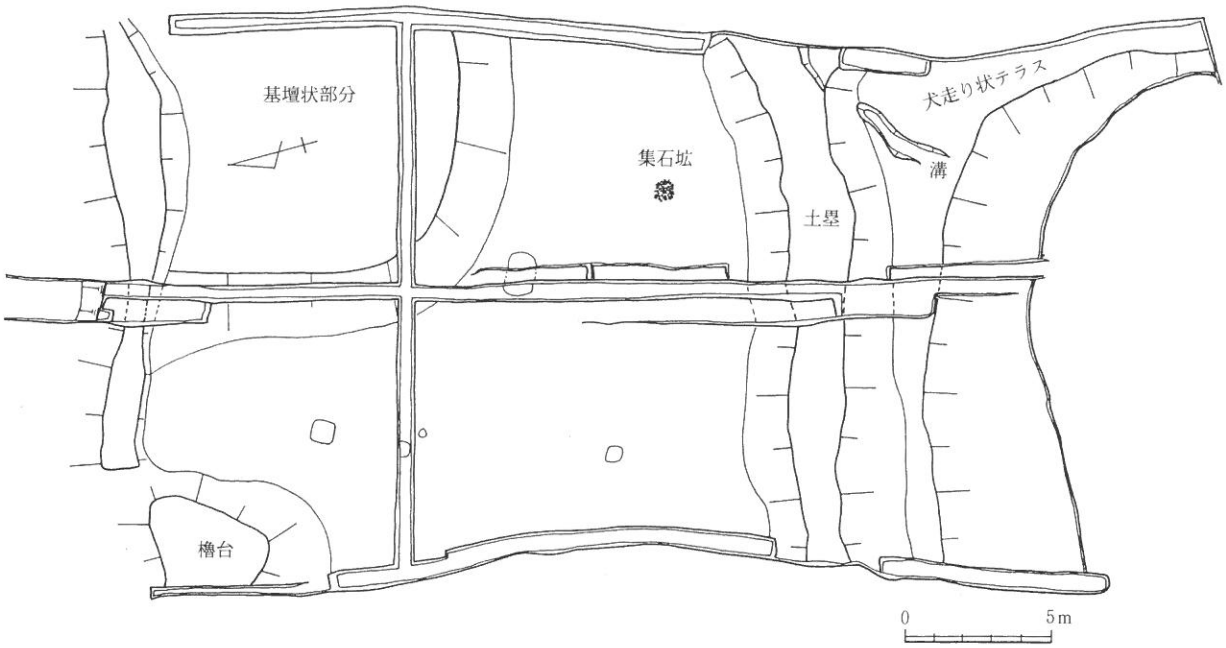
南側の土塁の外法裾で幅約１～２ｍの平坦部を土塁に沿って東西方向で検出した。この平坦部は、通路などに利用された犬走りと考えている。この犬走りは、西へは不明瞭になっているものの郭と考えている西側平坦部に続いており、虎口より主郭へ進入できるようになっている。東へは、南に張り出している土塁に沿って続いているものと思われる。

また、基壇状部分に設定したトレンチで整地層を切り込んでいるピットを４個検出している。付城の下層に遺構が存在しているものと思われる。この遺構については、次年度に調査する予定である。

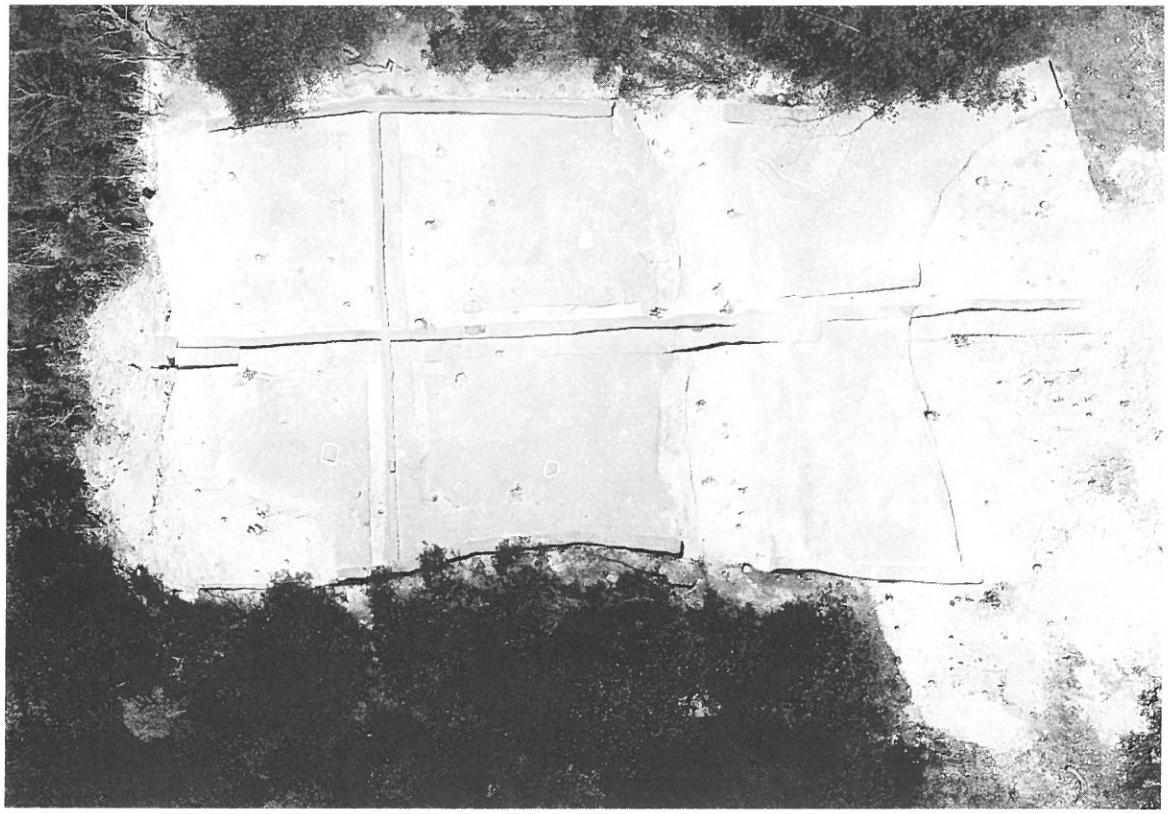
出土遺物には、郭内から丹波焼すり鉢片２点、鉄砲玉１点が出土している。さらに鉄釘５点、古銭３点が郭の内外から出土している。古銭については２枚が『皇宋通宝』（１０３９年初鋳）で、もう１枚が『元□通宝』と１字欠けているが、おそらく『元豊通宝』（１０７８年初鋳）か、『元祐通宝』（１０８６年初鋳）と考えている。



すり鉢片出土状況



一次調査遺構平面図



一次調査全景

〈２次調査〉

１次調査の基壇状部分に設定したトレンチの断面で、整地層を切り込んでいる４個のピットを確認した。このことを踏まえて２次調査は、付城の下層の遺構について調査を実施した。

調査の結果、調査区の中央部から北側にかけて、遺構を集中して検出した。検出した遺構は、掘立柱建物を４棟（ＳＫ－１～４）、溝を２条（ＳＤ－１，２）、焼土壙（ＳＫ－１）、集石土壙（ＳＫ－２）が各１ヶ所である。

ＳＢ－１は調査区の北西で検出し、１次調査で確認した付城の基壇状遺構の区画の下にあたる。東西４間、南北３間半（８×７．４ｍ）で、南側に庇を持つ建物である。柱の掘方は円形と隅丸方形があり、大きさは０．８～１．０ｍで、柱穴は、０．４ｍである。建物の主軸方向は、Ｎ－２０°－Ｅである。なお、検出状況では完結しているものと思われるが、東側の調査区外へさらに続いている可能性も考えられる。

ＳＢ－２は、ＳＢ－１と重複して検出した。東西１間、南北３間（５．５×１．４ｍ）で、調査区東端のトレンチでピットを検出していることから、ＳＢ－１同様に東側の調査区外に続いているものと思われる。柱の掘方は円形をしており、直径０．４～０．７ｍで、柱穴は直径０．４ｍである。建物の主軸方向は、Ｎ－２０°－Ｅである。

ＳＢ－３は、調査区のほぼ中央部が検出した。ＳＢ－１の南西に位置し、東西５間、南北２間（４×１０ｍ）の総柱建物である。柱の掘方ほとんどが円形をしており、直径０．４～０．７ｍで、柱穴は０．２～０．３ｍである。建物の主軸方向は、Ｎ－２３°－Ｅである。

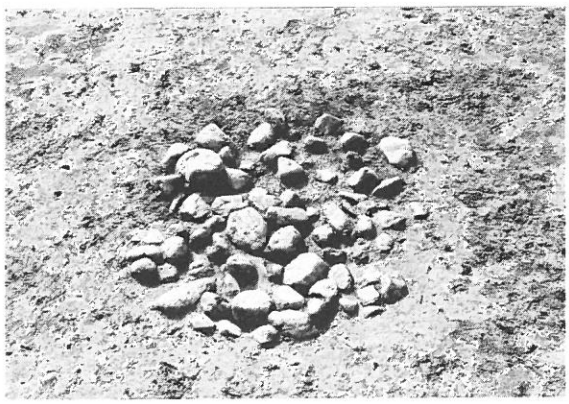
ＳＢ－４は、溝（ＳＤ－２）を挟みＳＢ－３の西側に隣接して検出した。東西１間、南北４間（２×７ｍ）で西側の調査区外へ続いているものと思われる。柱の掘方は円形をしており、直径０．３～０．６ｍで、柱穴は０．２ｍである。

ＳＤ－１は、ＳＢ－４の北側及び東側に沿って検出したＬ字の溝で、幅約０．５ｍ深さ約０．１ｍである。ＳＢ－３の雨落ち溝と考えている。

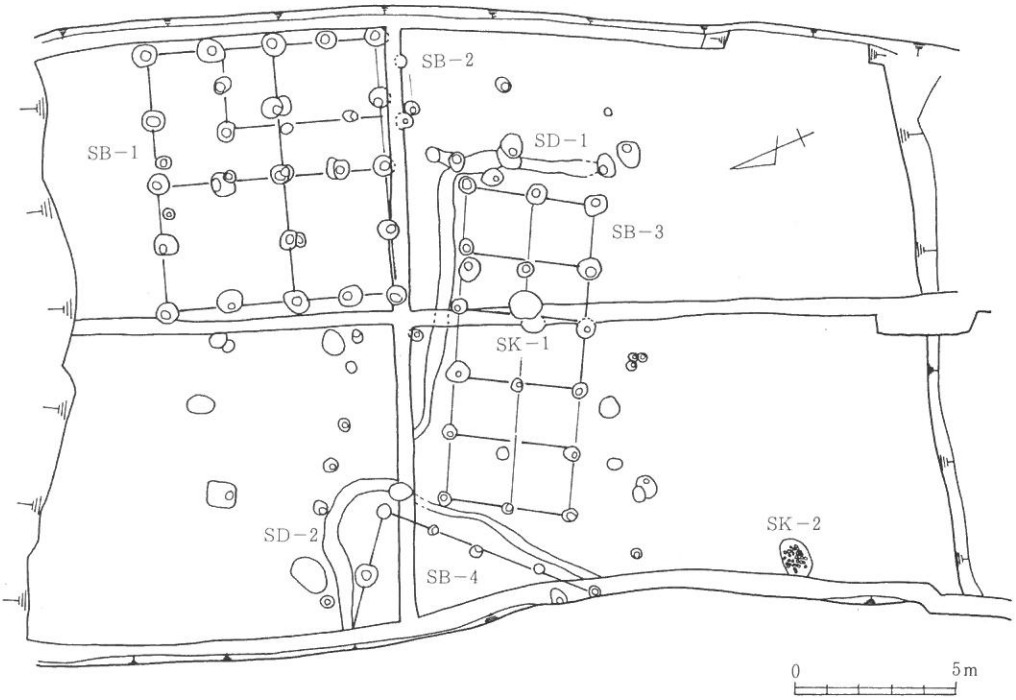
ＳＤ－２は、ＳＢ－４の北側及び東側に沿って検出したＬ字状の溝で、幅約０．３～０．４ｍ、深さ約０．１ｍである。この溝もＳＤ－１同様にＳＢ－４の雨落ち溝と考えている。

ＳＫ－１は、ＳＢ－３のほぼ中央から検出した土壙で直径約１．０ｍ深さ約０．４ｍである。底一面に焼土や炭を検出した。

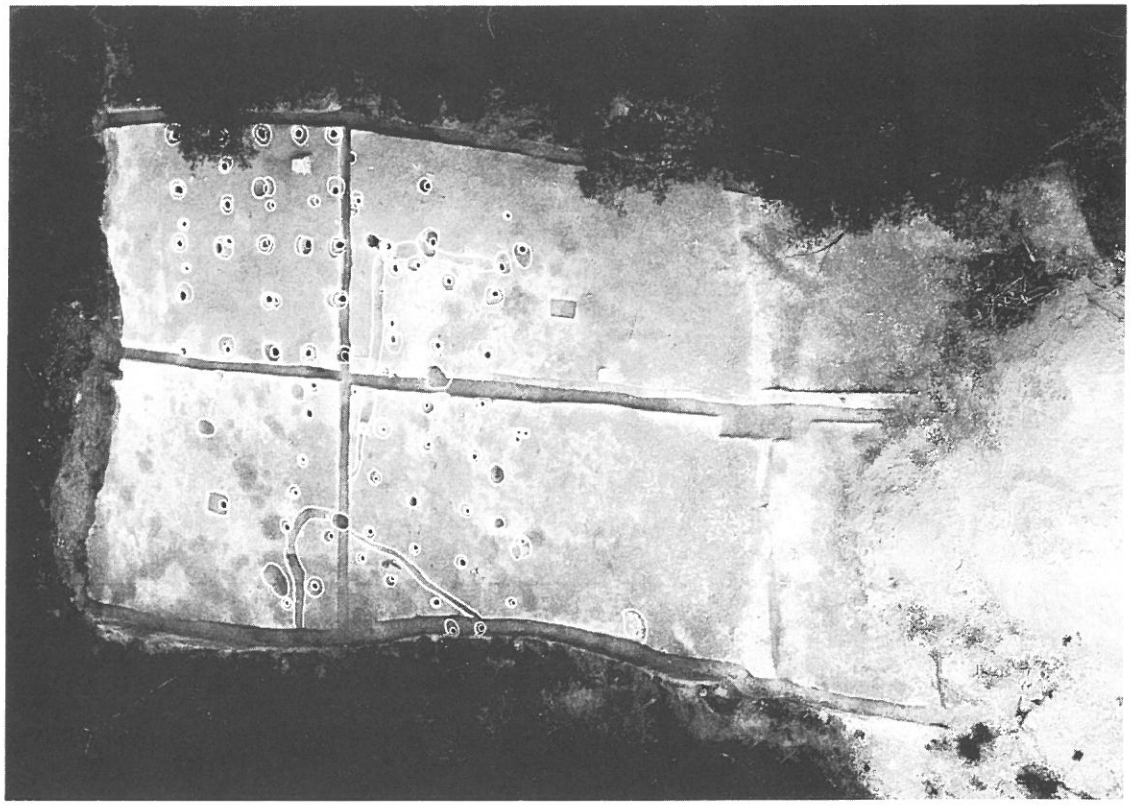
ＳＫ－２は、調査区の南西隅で検出した直径約０．８ｍの集石土壙である。１次調査においても同様の集石土壙を調査区の南西隅で確認しており、付城に伴う遺構の可能性が考えられる。



集石土坑



二次調査遺構平面図

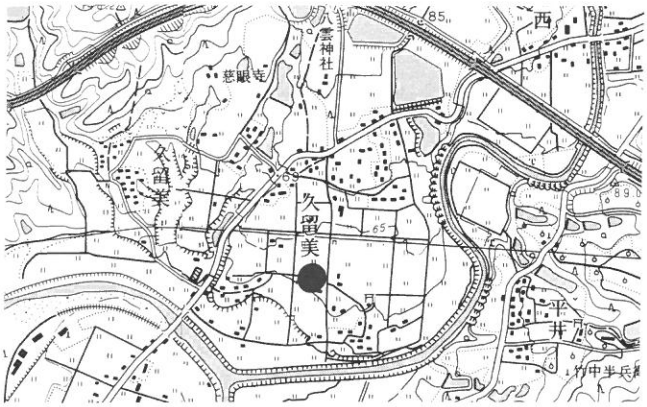


二次調査全景

8．まとめ

小林八幡神社遺跡は、三木合戦時の付城の遺構とそれ以前の遺構の２時期の遺構が確認された。第１検出面である付城の遺構では、礎石やピットなどの検出がなく建物が認められないが、土塁や基壇上の高まり、櫓台と考える平坦部の検出から付城と断定できる。土塁は版築構造が確認できるが、北側と南側で構築に若干の違いがみられる。櫓台と考える平坦部は北側と西側の土塁の角を利用して築いている。付城の構造に横矢掛かりなどの防御手法がみられる。城内から三木城が見えないことから、三木城攻撃が目的ではなく、明石からの兵糧搬入を阻止するために築かれた付城と考えている。付城の下層の第２検出面では比較的大きな建物群が確認され、神社境内を含む東側及び西側の調査以外にも建物などの遺構が広がっているものと思われる。しかし、検出した各遺構から遺物が出土していないため、遺構の時期及び性格については保留しておく。このことから、付城を築く以前の何らかの掘立柱建物群が存在し、その整地層を利用して付城が築かれたものと思われる。

久留美丈ノ越遺跡（くるみじょうのこしいせき）



位置図（1／25,000）

1．所 在 地　　三木市久留美字丈ノ越

2．事 業 名　　久留美地区
　　団体営ほ場整備事業

3．種　　別　　確認調査及び全面調査

4．調査面積　　確認調査　　３００㎡
　　全面調査　２，６４０㎡

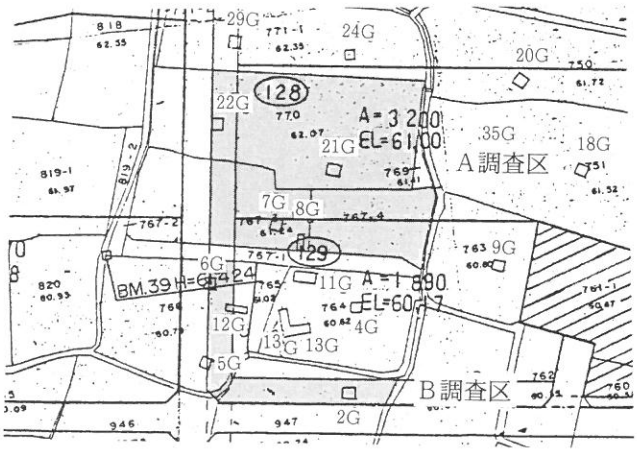
5．調査期間　　確認調査　平成５年５月１２日
　　～５月２７日
　　全面調査　平成５年８月９日
　　～１１月１７日

6．調査に至る経過

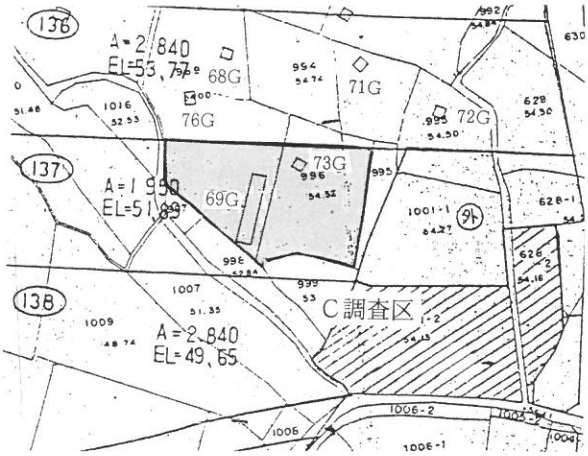
今年度の久留美地区団体営ほ場整備事業は、丈ノ越工区が施工されることになった。事業地の周辺では、東側で平成３・４年度に調査された久留美上野ノ下遺跡があり、遺跡の存在が考えられるため、確認調査を実施することになった。

7．調査概要

久留美丈ノ越遺跡は、市の中央部に位置し、美嚢川と志染川が合流する地点を南に臨む舌状台地に立地する。調査は、２×２ｍのグリッドを設定し行った。設定した７６ヶ所のうち３０ヶ所のグリッドで、ピット・土壙・溝などの遺構を検出し、約１７，０００㎡の範囲に遺跡が広がっているのが確認された。このうち、計画水田１２８・１２９番の一部の約１，５００㎡をＡ調査区、Ａ調査区南のＬ字の排水路計画部約４４０㎡をＢ調査区、計画水田１３７番の一部約７００㎡をＣ調査として、合計約２，６４０㎡の全面調査を実施することになった。



グリッド配置図



トーンの部分は全面調査区

Ａ調査区では、掘立柱建物が５棟、竪穴住居１棟、溝３条、土壙墓を含めた土壙を多数検出した。Ｂ調査区では、ピットは多数検出しているが、建物を想定する並列は確認できなかった。このほかに落ち込み状の土壙３ヶ所、溝３条などを検出した。Ｃ調査区では、遺構は調査区の東半分に集中して検出した。ピットは、Ｂ調査区同様多く検出しているが、建物を想定できる並列は確認できなかった。ほかに土壙、横穴式石室の基底部及び周溝の約４分の１を検出した。

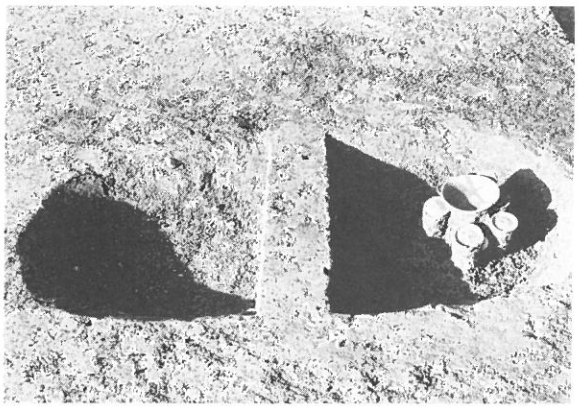
〈Ａ調査区〉

ＳＢ－１は、調査区のほぼ中央で検出した２×２間（約３．５×３．５ｍ）の総柱建物である。主軸方向はＮ－３３°－Ｅである。ＳＢ－２は、調査区の北西隅で検出した２×３間（約３．８×７．８ｍ）の建物である。主軸方向は、Ｎ－８０°－Ｗである。ＳＢ－３は、ＳＢ－２の南側で平行して検出した２×３間（約３．６×６．６ｍ）の総柱建物である。主軸方向は、ＳＢ－２と同様Ｎ－１８°－Ｅである。ＳＢ－４は、ＳＢ－３の東側で検出した２×３間（約３．６×６．３ｍ）の建物で、北西隅の一部がＳＢ－２に重なっている。主軸方向は、Ｎ－１８°－Ｅである。ＳＢ－５は、調査区の南東隅で検出した２×２間（約４×４ｍ）の総柱建物である。北東隅と南西隅の柱穴は検出されなかった。主軸方向は、Ｎ－３０°－Ｗである。

ＳＨ－１は、調査区の北端で検出したカマドを持つ方形の竪穴住居で、規模は推定で約５×５ｍと思われる。深さは約１０㎝で、かなり削平を受け残存状況は悪い。カマドは北側で２ヶ所、西側で１ヶ所検出しているが、検出状況から住居の建て替えではなく、カマドの造り替えと考えている。

ＳＡ－１は、調査区の西側でほぼ南北方向で検出した３間（約５．５ｍ）の柵列である。ＳＡ－２は、ＳＢ－１の北側でほぼ東西方向で検出した３間（約８．６ｍ）の柵列である。ＳＡ－３は、ＳＢ－２の北側で平行して東西方向に検出した４間（約１１ｍ）の柵列である。ＳＡ－４は、ＳＢ－３の南側で平行して東西方向に検出した４間（約１０ｍ）の柵列である。ＳＡ－５は、ＳＢ－４の西側で平行してほぼ南北方向に検出した３間（約７．２ｍ）の柵列である。ＳＡ－６は、ＳＢ－２の東側で平行してほぼ南北方向に検出した３間（６．２ｍ）の柵列である。

ＳＫ－１は、調査区東端で検出した土壙で、長径約１．６５ｍ、短径約０．８５ｍの楕円形を呈している。内部は、東側で中央に須恵器碗をそのまわりに土師器小皿を５枚配して検出した。須恵器碗の下から頸部を欠いた白磁小壺が出土した。出土状況から炭や焼土の検出はないが、土壙墓と考えている。



ＳＫ－１遺物出土状況

ＳＤ－１は、調査区の南側で東から西へ向い中央で南へ曲折してＬ字状に検出した。途中に土壙が２ヶ所あり、南へ曲折している溝を１条検出した。

A調査区全景

A調査区遺構平面図

〈Ｂ調査区〉

ＳＫ－１は北側で検出した南北の長径約９ｍ、東西の短径推定で約４ｍの楕円形を呈している土壙と思われる。深さは約０．２ｍである。人頭大の河原石が少し検出した。

ＳＫ－２は、調査区の南側で検出した東西の長径約７ｍ、南北の短径約３ｍの楕円形を呈して土壙と思われる。深さは約０．３ｍである。人頭大の河原石が大量に検出した。その西側は落ち込みになっている。深さは約０．２ｍである。

ＳＫ－３は、調査区の東側で検出した一辺約２ｍの方形を呈している。深さは約０．２ｍである。

ＳＤ－１は、調査区の北端で東西方向に検出した幅約３ｍ、深さ約０．３ｍの溝である。

ＳＤ－２は、調査区の南側で南北方向に検出した幅約０．６ｍ、深さ約０．１ｍの溝である。

ＳＤ－３は、調査区の南側で東西方向に検出した幅は推定できないが、検出した長さは約１３ｍである。ＳＤ－１・ＳＤ－２ともＳＫ－２に伴った溝である。

Ｂ調査区全景

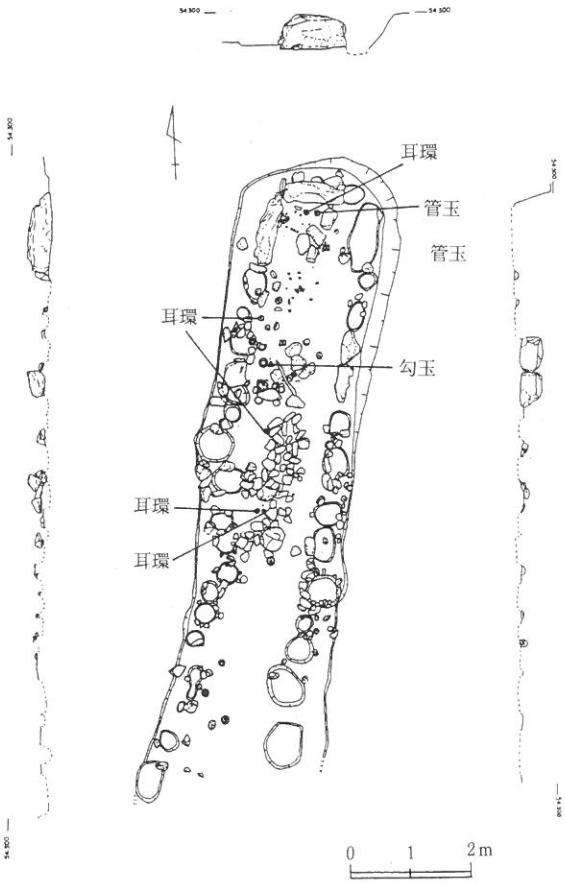
〈Ｃ調査区〉

ＳＭ－１は、調査区の中央で検出した横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳である。後世の開墾などにより、石の抜取りや削平を受け残存状況は極めて悪く、石室の基底部だけの検出であった。石室は、ほぼ南北を主軸に南に開口している。確認できる規模は全長約１０ｍ、玄室の幅約１．５ｍ、羨道の幅約１．２ｍの右片袖の石室である。基底部の石の抜け穴には、こぶし大の石が数個確認できる。おそらく基底部の石を安定して据えるためのものと考えられる。石室内からの遺物は、須恵器の高坏・坏蓋・坏身・台付き長頸壺、耳環５個、勾玉１個、管玉３個、ガラス玉３０個、直刀などが出土している。須恵器については、２時期認められる。耳環についてもなかが詰まっているものと空洞のものと２種類あるがいずれも金メッキが施されている。また、石室内の埋土から大量のサヌカイト片が出土した。埋葬状況は、玄室２体、羨道に１体埋葬されていたものと考えている。羨道部には、径約１０～２０㎝の扁平な砂岩質の石が棺の形に敷き詰められて検出した。頭位は、耳環、玉類、直刀のなどの装飾品の出土位置から、玄室右側は南で、左側は北であると思われる。羨道部については、南側に直径約４０㎝の円形の砂岩質の石を検出しており、検出状況からおそらく石枕と思われ、頭位は南であると考えている。

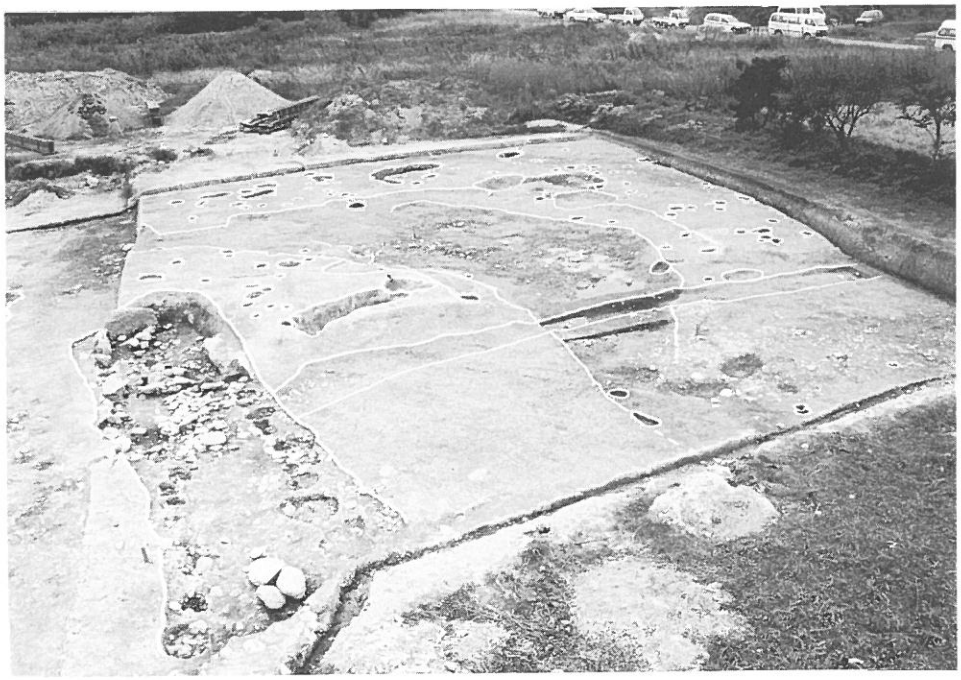
墳丘はすでに失われているが、石室の東側約４分の１を廻るように最大幅約７．６ｍの周溝と思われる溝を検出しており、その周溝から推測して直径約１２ｍの円墳と考えている。周溝からは、須恵器片や土師器片とともに石包丁やサヌカイトの石鏃・剥片が出土した。

主体部全景

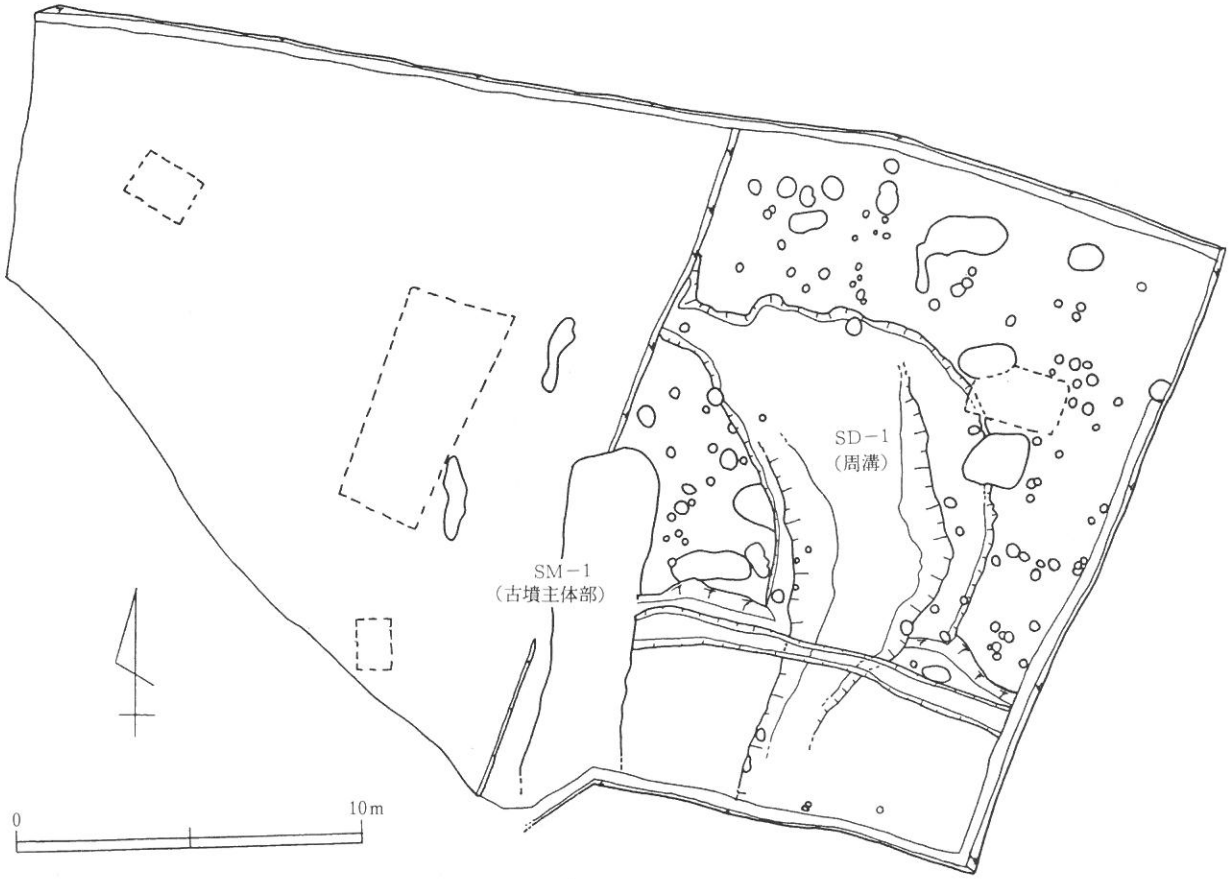
遺物出土状況



主体部平面図



C調査区全景

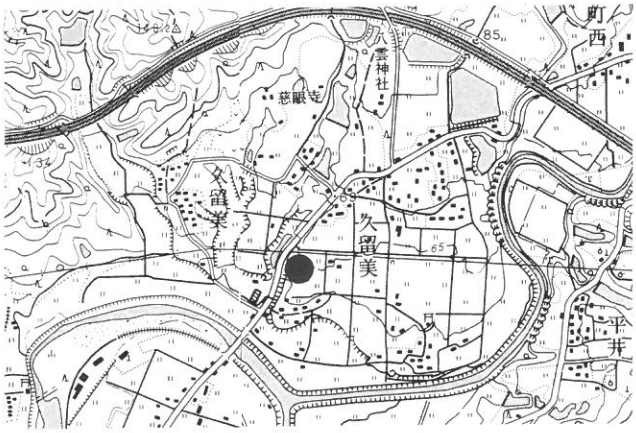


C調査遺構平面図

8．まとめ

Ａ調査区の住居址からは、奈良時代の須恵器が出土していることから奈良時代と考えている。それ以外の建物、溝、土壙墓などの遺構は平安時代後期～鎌倉時代と考えている。Ｂ調査区も出土遺物から、平安時代後期～鎌倉時代と考えている。また、Ｃ調査区のピット群・土壙などの遺構は、平安時代後期～鎌倉時代と考えている。古墳は、古墳時代後期～終末期と考えている。出土遺物から２時期と考えられ、追葬されたものと思われる。このように当遺跡は、古墳時代～鎌倉時代の複合遺跡と思われるが、Ｃ調査区の周溝から、石包丁及び大量のサヌカイト剥片の出土から、周辺に弥生時代の遺構が存在するものと思われる。また、平成３・４年度に調査された上野ノ下遺跡でも古墳や平安時代後期～鎌倉時代の遺構を検出しており、当遺跡とほぼ時代的に合っていることから、ひとまとまりの遺跡と考えられる。

久留美松ノ下遺跡（くるみまつのしたいせき）



位置図（1／25,000）

1．所 在 地　　三木市久留美字松ノ下

2．事 業 名　　久留美地区
　　団体営ほ場整備事業

3．種　　別　　確認調査及び全面調査

4．調査面積　　確認調査　　２１０㎡
　　全面調査　２，５３０㎡

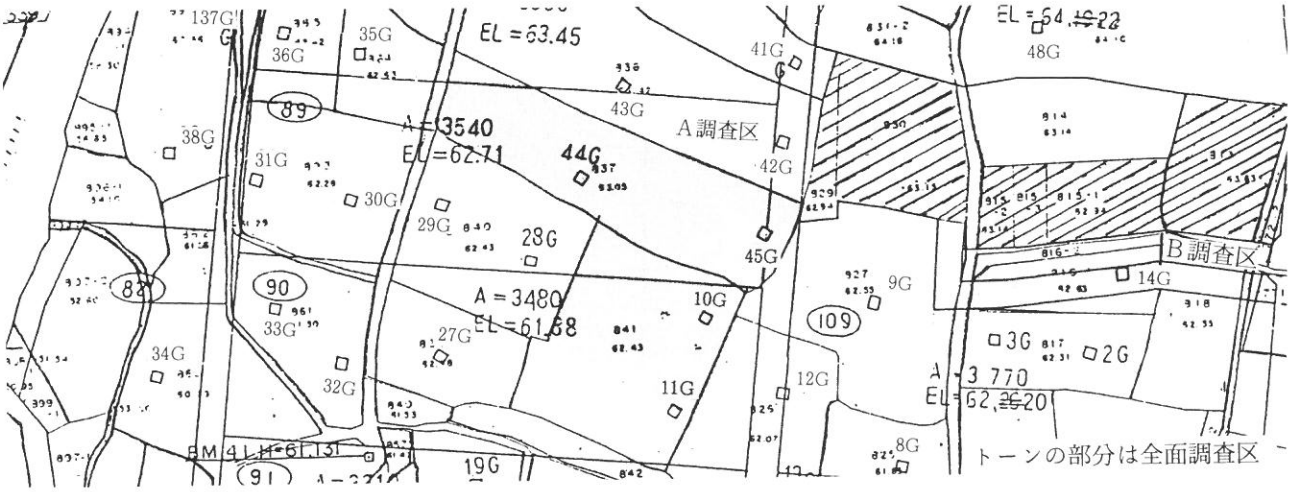
5．調査期間　　確認調査　平成５年８月３日
　　～８月１９日
　　全面調査　平成５年１１月４日
　　～平成６年１月２１日

6．調査に至る経過

今年度の久留美地区団体営ほ場整備事業は、松ノ下工区が施工されることになった。事業地の周辺には、平成３・４年度に調査された久留美上野ノ下遺跡、今年度調査されている久留美丈ノ越遺跡があり、遺跡の存在が考えられるため確認調査を実施することになった。

7．調査概要

久留美松ノ下遺跡は、市の中央部に位置し、美嚢川と志染川が合流する地点を南に臨む舌状台地の先端部に立地する。調査は、２×２ｍのグリッドを設定し行った。設定した５２ヶ所のうち１５ヶ所のグリッドで、ピット・土壙・溝などの遺構を検出し、約１７，０００㎡の範囲で遺跡が広がっていることを確認した。このうち、計画水田８０・８９番の一部約２，４００㎡のＡ調査区、計画排水路の一部約１３０㎡のＢ調査区の合計約２，５３０㎡について、設計変更が不可能であるため、全面調査を実施することになった。



グリッド及び調査区配置図

が２棟、溝２条、土壙７ヶ所を検出した。

〈Ａ調査区〉

ＳＢ－１は、調査区の西側で検出した２×２間（約３．３×３．３ｍ）建物で、柱間は約１．６ｍである。主軸方向はＮ－２０°－Ｅである。

ＳＢ－２は、ＳＢ－１の南側に位置する２×４間（約４．１×１０ｍ）以上で、西側の調査区外に続いていると思われる建物と考えられる。柱間は、東西方向が約２．３ｍ、南北方向が約２ｍである。主軸方向は、ほぼ東西方向である。

ＳＢ－３は、調査区の東側上段水田で検出した２×２間（約３×２．６ｍ）の総柱建物である。柱間は、東西方向が約１．１ｍ、南北方向が１～１．３ｍである。主軸方向は、Ｎ－２０°－Ｗである。

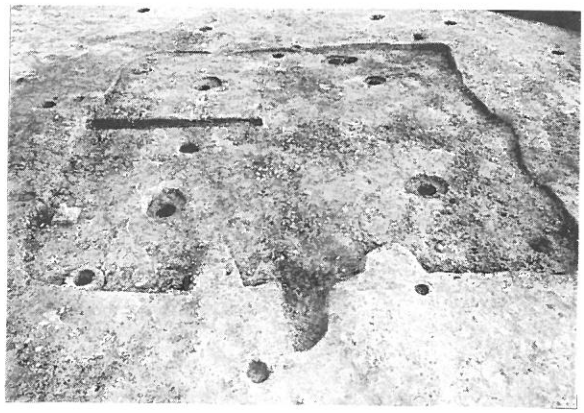
ＳＢ－４は、調査区下段水田西側で検出した２×２間（約５．０×４．１ｍ）の建物である。柱間は、東西方向が約２．０ｍ、南北方向が約２．１ｍである。主軸方向は、Ｎ－３５°－Ｅである。

ＳＢ－５は、下段水田のほぼ中央で検出した２×３間（約３．３×５ｍ）の総柱建物である。柱間は、東西方向が約１．３～１．８ｍ、南北方向が約１．０ｍである。主軸方向は、Ｎ－５５°－Ｗである。

ＳＢ－６は、下段水田の南端で検出した３×２間（約５×４．３ｍ）以上で南側の調査区外に続いていると考えられる総柱建物である。柱間は、東西方向が約２．５～３ｍ、南北方向が約１．６～２．６ｍである。主軸方向は、ＳＢ－５とほぼ同じＮ－５５°－Ｗである。

ＳＢ－７は、下段水田の南東隅で検出した３×２間（約６．６×５．８ｍ）以上で南側の調査区外に続いていると考えられる総柱建物である。柱間は、東西方向が約２～２．３ｍ、南北方向が約２．６～２．８ｍである。主軸方向は、Ｎ－２５°－Ｅである。

ＳＨ－１は、下段水田のほぼ中央で検出した７×６ｍの方形の竪穴住居で、主軸方向はＮ－２０°－Ｗである。残存状況は深いところで約１０㎝と浅く、かなり削平を受けているが、北側中央でカマドを、四隅で直径約４０㎝の柱穴を検出した。また、西側でやや張り出した部分を検出しており、おそらく出入口と思われる。遺物は、南側から須恵器片や土師器片が多く出土した。



ＳＨ－Ｉ全景

〈Ｂ調査区〉

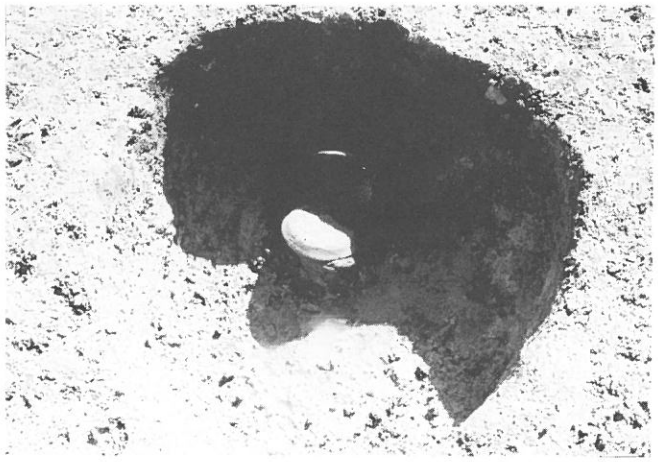
ＳＢ－１は、調査区のほぼ中央で検出した１×２間（約４．５×２．２ｍ）の建物

A調査区全景

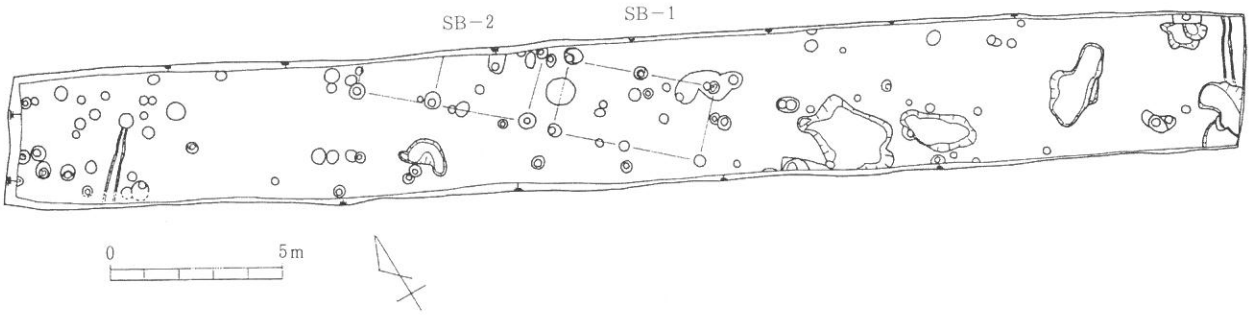
A調査区遺構平面図

である。柱間は、東西方向、南北方向ともに約２．２ｍである。主軸方向は、Ｎ－５５°－Ｗである。ＳＢ－２は、ＳＢ－１の西隣で検出した２×１間（約５．０×２．０ｍ）以上で北側の調査区外に続いているものと考えている建物である。柱間は、東西方向が約２．０～２．７ｍ、南北方向が約２．０ｍである。主軸方向は、ＳＢ－１と同じＮ－５５°－Ｗである。

Ｂ調査区全景



ピット内遺物出土状況



Ｂ調査区遺構平面図

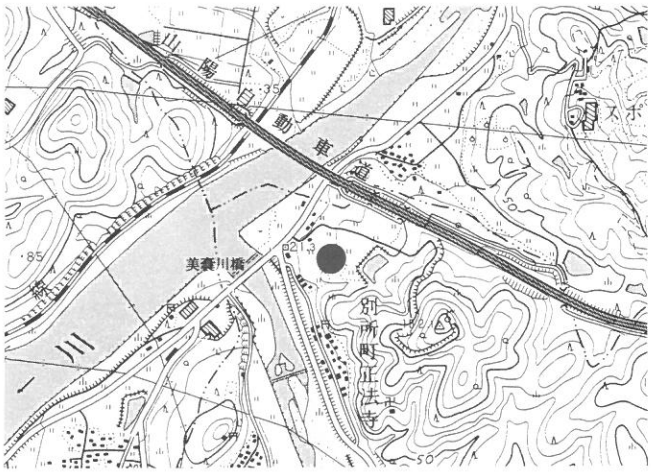
８．まとめ

遺構の時期は、建物の主軸方向から３時期に分けられるが、出土した遺物から掘立柱建物が平安時代後期～鎌倉時代、住居址が古墳時代後期と考えられる。隣接する平成３．４年度に調査された上野ノ下遺跡、今年度調査した丈ノ越遺跡と同時期のほぼ複合遺跡であり、同一台地上のひとまとまりの遺跡として考えていく必要があるものと思われる。

しょうぼうじこ　ふんぐん

正法寺古墳群

1　所在地　　三木市別所町正法寺字高塚
2　事業名　　正法寺地区団体営ほ場整備
3　種　別　　全面調査
4　期　間　　平成６年６月１５日～
　　平成７年２月２３日
5　面　積　　９基
　　（１～４、１０～１２、
　　１－ａ、１－ｂ号墳）



位置図(1/25,000)

6　調査に至る経過

正法寺古墳群は９基からなる横穴式石室の古墳群で、事業地内には石室がほぼ完全に残り周知された１号墳のほか、２～４号墳も所在することが古墳分布図「三木の古墳」から分かった。しかし、２～４号墳の所在位置が明らかでないため、他の遺跡の存在有無とあわせて確認調査を実施した。

その結果、全半壊した２～４号墳の位置を確認したほか、３号墳に近接して新たに全壊した１基（１０号墳）を発見した。事業との調整協議を行ったが、１号墳以外は事業計画上変更不可能なため、全面調査が必要となり実施した。

全面調査は、１号墳の周溝調査と２～４・１０号墳の主体部調査を主に行った。また、３・４・１０号墳が所在する山林部で、トレンチによる補足調査を行なった。この調査でまた新たに、１号墳の東及び西側から２基（１－ａ，１－ｂ号墳）、１０号墳の南から２基（１１，１２号墳）、３号墳の西裾から住居跡の遺構を検出し、全面調査の対象として追加することになった。

7　調査概要

１号墳は、昭和４０年頃に石室内の調査が行われて以来、周知され現状保存されている古墳で、段丘上の南向きの突端にあり、加古川と美嚢川の合流地を望む位置に立地している。石室は南に開口し、全長８．７ｍ、高さ２．９ｍの規模を有する両袖の石室で、天井石も残り良好である。墳丘は水田形成時に改変を受けているが、周溝が検出された。周溝は、検出幅４～６．５ｍ、深さ０．１～０．５ｍを計るが、西側は浅く不明瞭で西下段の水田によって削り取られている。また東側は、南に回り込む付近が南下段の水田で削り取られている。

１号墳の西側で検出した１－ａ号墳は、墳丘と石室の上部を失い１～３段が残る。石室は南に開口し、長さ約５．４ｍ，幅約１．５ｍを測り袖は見られない。石室内からは、杯、甕片、耳環等のほか、平安時代後期の碗が出土した。

東裾の周溝内で検出した１－ｂ号墳は、墳丘上部を失っているが径約９ｍの円墳と推定

できる。主体部は南西に開口した左袖を持つ横穴式石室で、比較的良好な状態で残存している。規模は、石室長約５．４ｍ、羨道幅約１．１ｍ、玄室幅約１．４ｍ、袖幅約０．３ｍを測る。石室内からは閉塞石や仕切、また棺台と思われる石を検出するとともに、須恵器杯や堤瓶等が出土している。

１号墳の北約１３０ｍに位置する２号墳は、水田形成時の墳丘改変や流失などで石室の一部が露頭していた。主体部は、南西に開口した右袖を持つ横穴式石室で、玄室東側壁を失っているが比較的良好な状態で残存していた。石室規模は、長さ約６．４ｍ、羨道幅約１．１ｍ、玄室幅約２．０ｍ、袖幅約０．９ｍを測る。石室内からは、閉塞石や棺台と思われる石の検出と、直刀、高杯、壷などの遺物が多く出土している。

２号墳石室全景

２号墳奥壁遺物検出状況

３号墳は、１、２号墳が立地する段丘面より一段高い東側の段丘上に立地し、比高差は１０ｍ以上を測る。墳丘は、開墾や大正池の築堤などによって改変を受け、石が露頭していた。主体部は、南西に開口した無袖の横穴式石室で、比較的良好な状況で残存している。石室規模は、長さ約４．８ｍ、幅約１．３ｍを測る。開口部から中央付近はハの字状に内傾している。石室内の奥壁東隅や羨道部付近から、須恵器や土師器の高杯、壷などが出土した。

また、墳丘北西側において一辺３．６ｍの方形の竪穴住居跡を検出している。床面までの深さは７～１３㎝と浅く、また全体の３分の１は土取りで失われ遺存状況は悪い。床面からは、Ⅳ様式の弥生土器（壷）片が出土している。中軸線上で１個の柱穴と中央土壙を検出している。

４号墳は、３号墳から南西方向に約７０ｍ離れた段丘端部に位置し、１号墳や美嚢川と加古川の合流地点を望むことができる。墳丘は、大きく損壊し奥壁が露頭する全壊の状態である。 床面は岩盤で、穿った掘方や据え

４号墳石室全景

石を検出し、南西に開口した右袖を持つ横穴式石室で、規模は長さ約８．１ｍ、羨道幅約１．５ｍ、玄室幅約１．８ｍ、袖幅約０．３ｍを測ると推測することができた。玄室幅は奥壁で狭くなり約１．５ｍを測る。奥壁の両隅は、奥壁面より０．２～０．４ｍ奥まっている。床面からは金環、耳環、小玉類、堤瓶、壷などの遺物のほか、石室の再利用時の遺物と見られる古銭も出土している。

石棺、遺物検出状況（１０号墳）

１０号墳は、３号墳の南に隣接して立地し、墳丘はもちろん、主体部も開墾や大正池の築堤などの土取りによって大きく損壊し、羨道の前部と玄室の後部及び東側壁を失い、西側壁の一部が残った状況である。床面と東側壁の痕跡を検出することができ、主体部は南西に開口した横穴式石室で、両袖を有していることがわかった。石室の残存長は約６．５ｍ、床面の検出長は約４．３ｍを測り、羨道部幅及び玄室幅は、それぞれ約１．５ｍと約２．１ｍを測ると推定される。羨道部の床面からは、０．８×１．３ｍの石棺と須恵器壷などの遺物がまとまって出土している。これらを除去すると、幅約０．２～０．３５ｍ、長さ約３．９ｍの溝を検出している。特筆すべき出土遺物に、白く風化した鉛ガラス玉や、摘みの付いた釣鐘型の蓋がある。

釣鐘型蓋

１１号墳は、３、１０号墳の南向いに立地する。墳丘は流失と削平で低く開墾によって大きく切り取られているが、径約７～８ｍの円墳と推定される。主体部は南西に開口した無袖の横穴式石室で、奥壁付近は消失している。石室の残存長は約４．１ｍ、幅約１．０～１．３ｍを測り、奥壁側に向い徐々に広くなっている。玄室の床面はこ礫を敷き詰めた礫床を検出した。礫床の残存長は約２ｍを測る。遺物は礫床に密着して須恵器片が数点出土したにすぎない。

１２号墳は、１１号墳の南に近接して立地する。１１号墳と同様に墳丘は流出していたが、裾部をかろうじて検出でき、径約７ｍの円墳と推定している。主体部は南に開口する無袖の横穴式石室で、検出規模は長さ約４．２ｍ、幅約１．１～１．２ｍを計る。出土遺物は羨道部の入口付近から、平瓶１点と須恵器片及び土師器片が数点出土したのみである。

８　まとめ

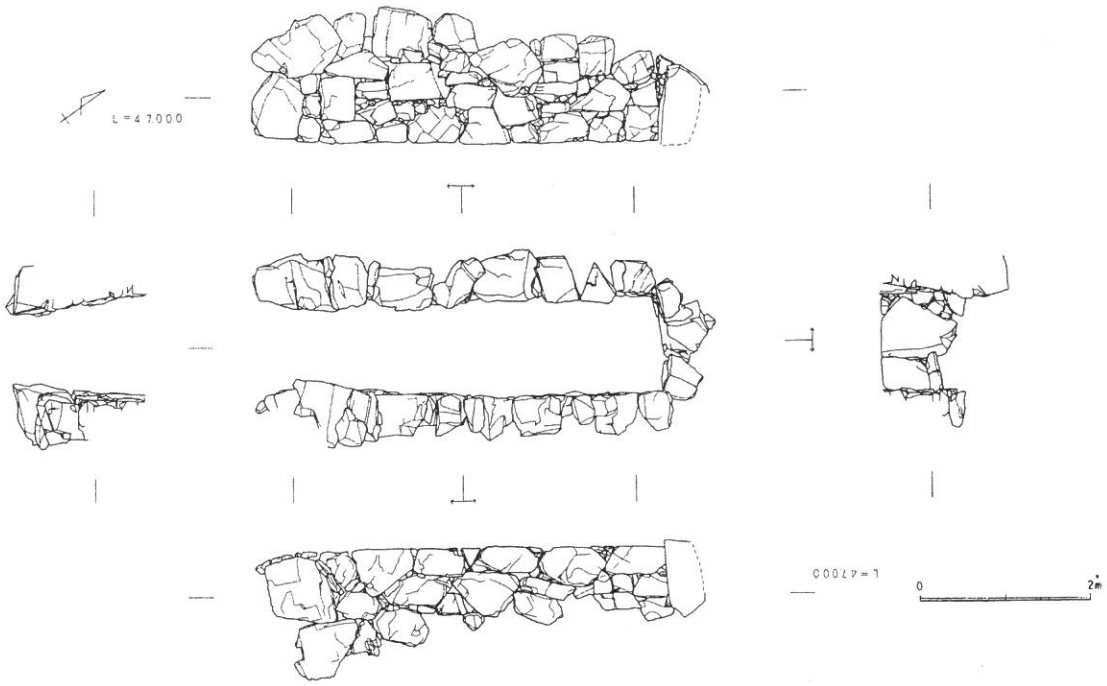
今回一度に６基もの調査を行なうこととなったが、ほ場整備事業との関係で時間的制約の中で行なわざるを得なかったため、十分な調査とは言えないかもしれないが、後期古墳の横穴式石室の変遷を知る一資料を得たと考えている。

遺物においては、比較的出土例の少ない釣鐘型の蓋が出土し、古墳群を築造した集団の性格や交流関係、背景などを考える資料となるが、この検討については今後の課題とし、

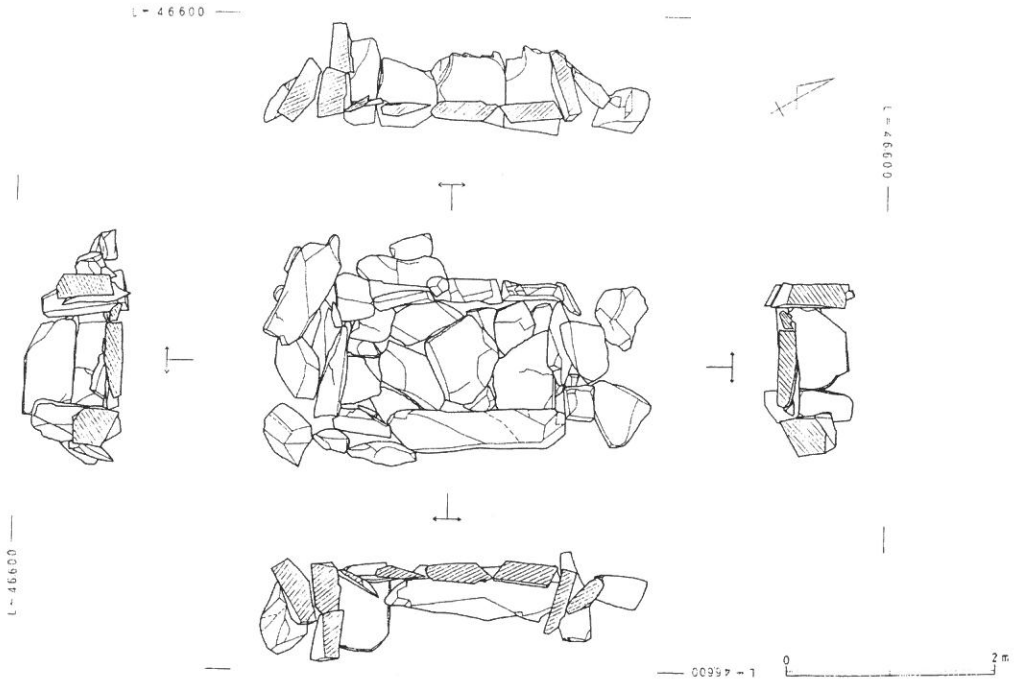
広くご教示いただきたい。

なお、発掘調査後、地元の理解を得て、１号墳及び１－ｂ号墳の周辺を古墳の保存区域として残すこととなり、片袖の２号墳石室と無袖の３号墳石室を移築し古墳公園として整備を行なっている。

また、事業区域外墓地内からは、六地蔵の台座として利用した露出する側壁や墳丘状のものを認め、１４、１３号墳としている。

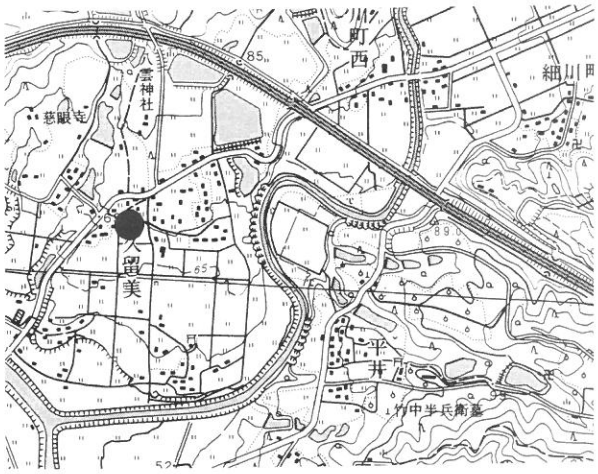


３号墳石室実測図



石棺実測図（１０号墳出土）

久留美中筋遺跡



位置図（1／25,000）

1．所 在 地　三木市久留美字中筋

2．事 業 名　久留美地区
　　団体営ほ場整備事業

3．種　　別　確認調査及び全面調査

4．調査面積　確認調査　　２１０㎡
　　全面調査　３，３００㎡

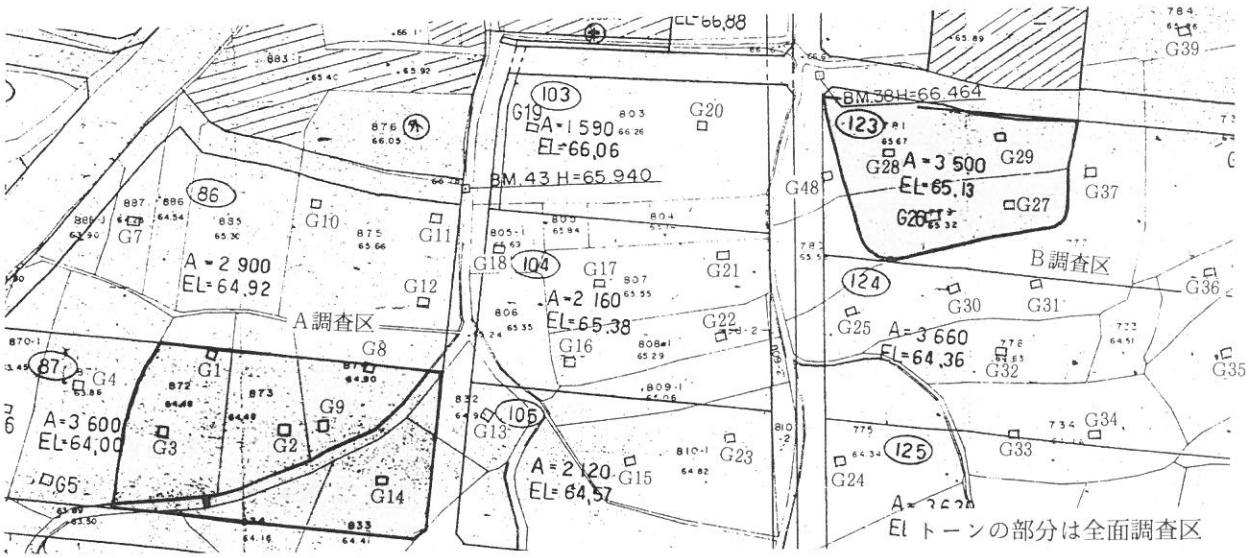
5．調査期間　確認調査　平成５年１１月９日
　　～１２月１３日
　　全面調査　平成６年１０月１２日
　　～平成７年３月３１日

6．調査に至る経過

平成５年度の久留美地区団体営ほ場整備事業は、中筋工区が実施されることになった。平成３・４年度調査の上野ノ下遺跡、平成５年度調査の丈ノ越遺跡・松ノ下遺跡と同一台地上にあるため、遺跡の存在考えられることから、確認調査を実施した。

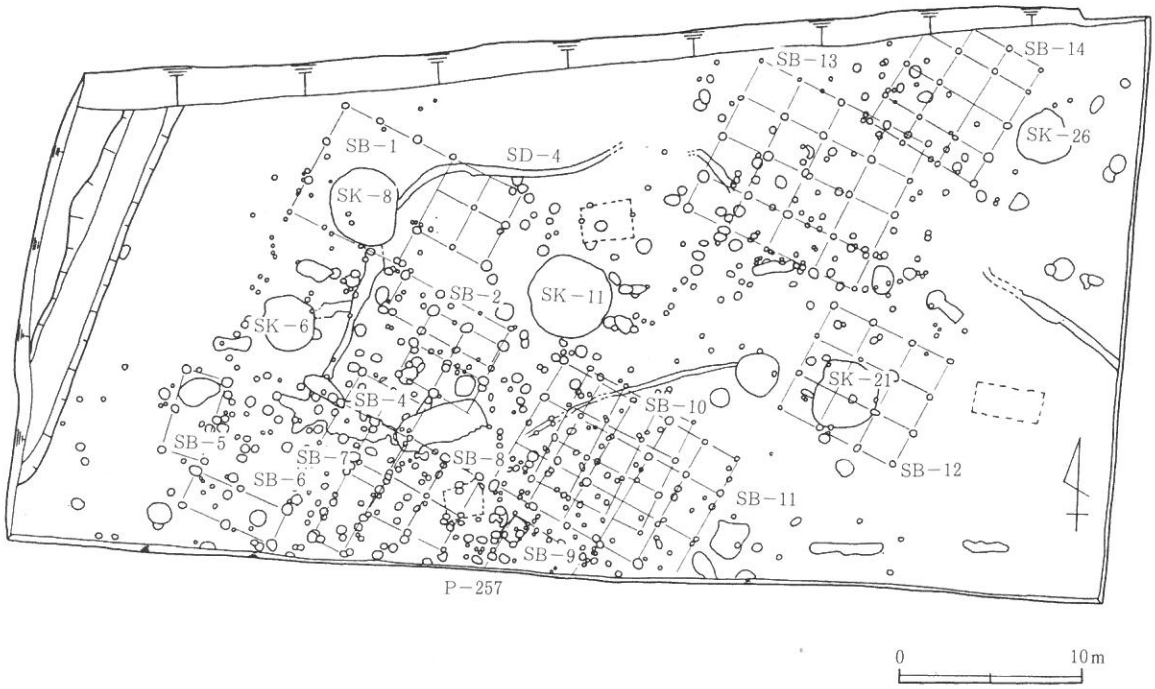
確認調査では、設定した５２ヶ所のグリッドのうちほぼ半数のグリッドから、ピットや土壙などの遺構を検出し、約１９，０００㎡の範囲で遺構が広がっていることを確認した。また、遺物は軒平瓦片や須恵器碗片・小皿片などが大量に出土した。特筆すべきは、Ｇ－２６から全体に土壙を検出し、それに伴って小皿を中心にした大量の須恵器片が出土し、コンテナ３箱分に及んでいる。

約１９，０００㎡のうち、計画水田９７・１２４番の各一部の合計約３，３００㎡について全面調査を平成６年度に実施することになった。計画水田９７番の東半分の約２，０００㎡をＡ調査区、計画水田１２４番の西半分の約１，３００㎡をＢ調査区として実施した。



グリッド及び調査区配置図

A 調査区全景



A 調査区遺構平面図

7．調査概要

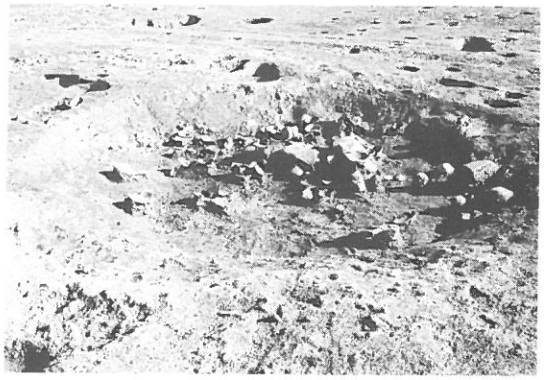
久留美中筋遺跡は、市の中央部に位置し、美嚢川と志染川が合流する地点を南に臨む舌状台地に立地している。調査では、A調査区・B調査区とも非常に多くの遺構を検出し、バラエティーに富んだ遺物が大量に出土した。主なものは、A調査区で大型のものも含め掘立柱建物を14棟、遺物が大量に出土した直径約2m以上の土壙を5ヶ所、井戸を2ヶ所、溝を4条、地鎮と思われるピットを2ヶ所検出した。B調査区では、掘立柱建物を10棟、土壙を9ヶ所、調査区の西側で南北方向の溝を2条、そのうちの一つと交わる東西方向に2条検出した。遺物も各調査区で大量に出土しており、総計でコンテナ50箱分以上を数える。なかでも須恵器小皿・土師器小皿は正確な数は分からないが、200枚は超えているものと思われ、群を抜いて出土した。このほかに、須恵器碗片・壺片・甕片、土師器壺片・器台片がある。珍しいところでは、瓦類で軒丸・軒平・平瓦がそれぞれ出土しているが、文様が多様で、軒平瓦のなかには裏面に“第四十四番”，“第五十四番”というヘラ書き文字が入ったものがあった。それ以外に鬼瓦片、特筆すべきは東大寺軒平文字瓦片が出土していることである。さらに中国製の青磁碗・小皿、白磁碗・皿、褐釉陶器の四耳壺が出土した。硯も出土しており、二面硯とよばれる陶硯と方形の石硯がある。また、獣足など仏具と思われるものも出土しており、なかに“舟生寺”とヘラ書きの文字が入ったものがある。“舟生寺”とは、丹生山の丹生寺のことで、平安時代の終わりに平清盛によって福原京に都が移されたときに建立され、当時“舟生寺”とよばれていたことが『丹生山縁起』に見られる。

〈A調査区〉

SB－1は、調査区の北西部分で検出した3×3間（約6．5×6．5m）の東側で2×2間（約4．3×4．3m）の総柱が張り出した建物である。柱間は、約2．0～2．2mで、主軸方向はN－23°－Eである。SB－2は、SB－1のすぐ南側で検出した1×3間（約2．5×6．5m）の建物である。柱間は約2．0～2．4mで、主軸方向はN－25°－Eである。SB－3は、SB－2と重なって検出した2×2間（約4．4×4．0m）の総柱建物である。柱間は約2．0～2．2mで、主軸方向はN－26°－Eである。SB－4は、SB－3のすぐ南側で検出した2×2間（約4．0×4．5m）の総柱建物である。柱間は約2．0～2．4mで、主軸方向はN－25°－Eである。SB－5は、調査区の西側で検出した3×1間（約4．6×2．3m）の建物である。柱間は約2．3mで、主軸方向はN－15°－Eである。SB－6は、SB－5のすぐ南側で検出した1×3間（約2．1×5．6m）の建物である。柱間は約2．1～2．8mで、主軸方向はN－26°－Eである。SB－7は、SB－4のすぐ南側、SB－5の東側で検出した3×1間（約3．8×2．0m）の建物である。柱間は約1．9～2．0mで、主軸方向はN－25°－Eである。SB－8は、SB－4とSB－7の東側で重なって検出した2×2間（約4．6×4．5m）の総柱建物である。柱間は約2．2～2．3mで、主軸方向はN－25°－Eである。SB－9は、調査区の南端で検出した3×2間（約4．6×2．6m）以上で南側の調査区外に続いている建物である。柱間は約1．3～1．5mで、主軸

方向はＮ－２５°－Ｅである。ＳＢ－１０は、ＳＢ－９のすぐ北側で検出した３×３間（約６．８×６．４ｍ）の総柱建物である。柱間は約２．１～２．５ｍで、主軸方向はＮ－２７°－Ｅである。ＳＢ－１１は、ＳＢ－１０に重なって検出した３×５間（約８．０×１１．０ｍ）の総柱建物である。柱間は約２．２～２．３ｍで、主軸方向はＮ－２８°－Ｅである。ＳＢ－１２は、調査区の東側で検出した３×３間（約６．４×７．０ｍ）の総柱建物である。柱間は約２．４～２．８ｍで、主軸方向はＮ－２８°－Ｅである。ＳＢ－１３は、ＳＢ－１２のすぐ北側で検出した４×４間（約９．０×１０．３ｍ）の総柱建物である。ＳＢ－１４は、調査区の北東部分で検出した２×２間の南北に両庇付き（約６．５×７．５ｍ）の総柱建物である。柱間は約２．０～２．２ｍで、庇の柱間は約１．４～１．７ｍである。

ＳＫ－６は、調査値の西側で検出した直径約３ｍ、深さ約０．１５ｍの土壙である。南東部分の肩を拳大の亜円礫で固めている。須恵器碗・小皿・土師器小皿が大量に出土し、なかに完形のものがかなりあった。このほかに須恵器甕や平瓦の破片も多く出土した。ＳＫ－８は、調査区北西部分のＳＢ－１の内側で検出した長径約４．０ｍ、短径約３．５ｍ、深さ約０．３５ｍの楕円形を呈した土壙である。半載宝相華文の軒平瓦、平瓦のほかに須恵器碗・小皿、土師器小皿の破片が多く出土した。ＳＫ－１１は、調査区のほぼ中央で検出した直径約４．５ｍ、深さ約０．３５ｍでＡ調査区最大の土壙である。須恵器小皿、碗、甕、壺・土師器小皿、器台、羽釜・軒平瓦、軒丸瓦、平瓦・青磁碗、白磁碗など種類、量とも豊富に出土した。ＳＫ－２１は、調査区東側のＳＢ－１２の内側で検出した直径約３．５ｍで、後世の削平によりほとんど深さがない土壙である。遺物は平瓦が中心で、ほかの土壙より比較的出土量が少ない。ＳＫ－２６は、調査区北東部分のＳＢ－１４のすぐ東側で検出した直径約２．６ｍ、深さ約０．２ｍの土壙で、南側は後世の削平により肩が消滅している。遺物は、須恵器碗・小皿、土師器碗・小皿のほか、ヘラ書きの入ったものを含めた軒平瓦・平瓦、白磁碗とＳＫ－１１同様に種類、量とも豊富に出土した。


SK－11　全景

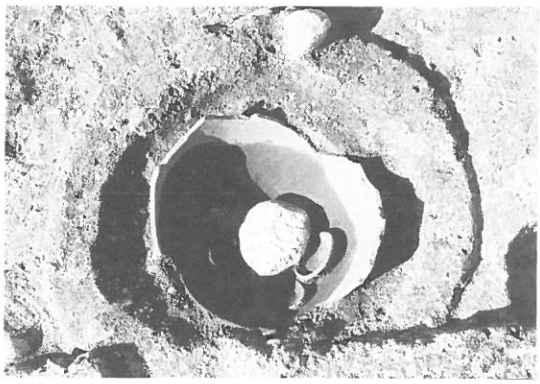
SK－21軒丸瓦出土状況

ＳＤ－１は、調査区の西端で検出した幅約３ｍ、深さ約０．２ｍとＡ調査区最大の溝で検出している掘立柱建物の主軸方向とほぼ同じ方向でである。ＳＤ－３は、ＳＫ－８より南に延びる幅約０．５～０．９ｍ、深さ約５～７㎝の溝である。ＳＫ－８に近いところで須恵器碗・小皿・甕、土師器碗・小皿の比較的小さな破片がかたまって

大量に出土した。ＳＤ－４は、ＳＫ－８より東側に延びる幅約０．５ｍ、深さ約０．１ｍの溝である。遺物は須恵器片、土師器片などわずかに出土しただけである。しかし、ＳＫ－８に近いところで半截宝相華文の軒平瓦が出土した。

Ｐ－２５７は、ＳＢ－８の北西隅部分で検出したピットで体部～底部の須恵器甕が出土し、なかには須恵器小皿が３枚、拳大の河原石が１個入っていた。おそらく、地鎮のためのピットと思われる。

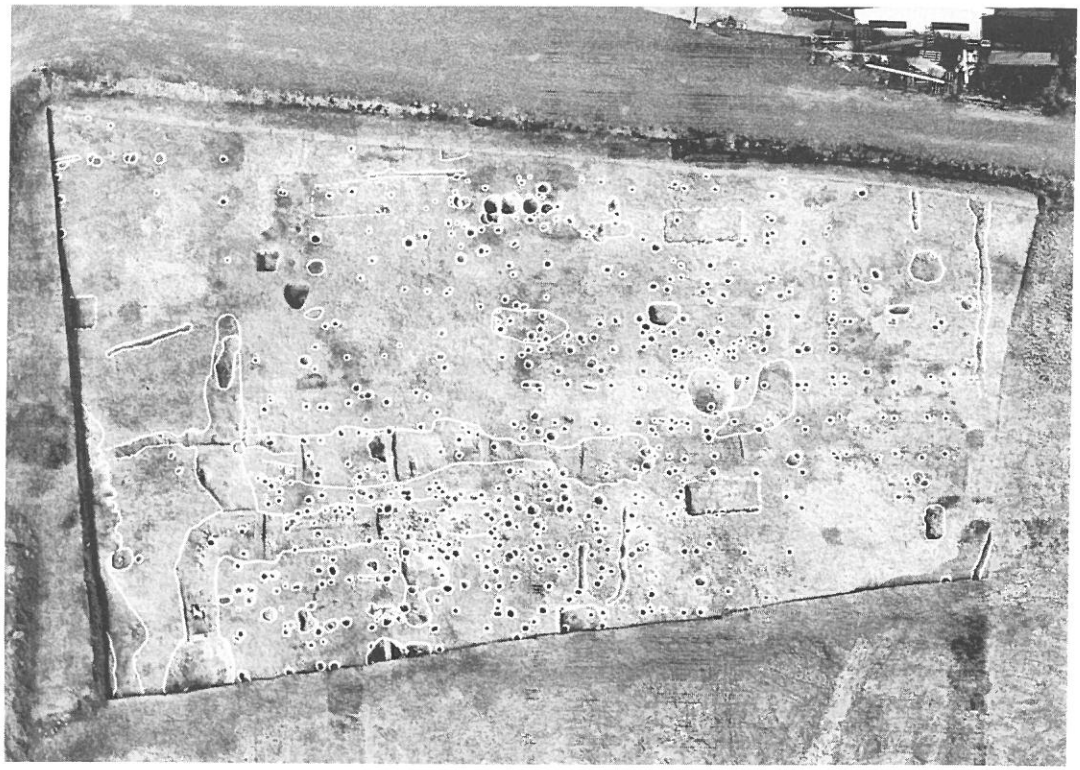
Ｐ－３５７は、ＳＢ－１１の南東隅部分で検出したピットで土師器壺が出土し、なかには須恵器小皿が１枚入っていた。これもＰ－２５７と同様におそらく地鎮のためのピットと思われる。



Ｐ－257　遺物出土状況

〈Ｂ調査区〉

ＳＢ－１は、調査区の西側でＳＤ－３と平行して検出した２×２間（約４．０×４．０ｍ）の総柱建物である。柱間は約２．０ｍ、主軸方向はほぼ南北方向である。ＳＢ－２は、調査区の南端で検出した２×２間（約４×４．５ｍ）以上で、南側の調査区外に続くと考えられる総柱建物である。柱間は東西約２．０～２．３ｍ、南北約２．２～２．３ｍで、主軸方向はＮ－５°－Ｗである。ＳＢ－３は、ＳＢ－１の南側でＳＢ－２と南西隅が重なって検出した２×３間（約４．５×５．７ｍ）の総柱建物である。柱間は東西約２．０～２．５ｍ、南北約１．７～２．２ｍで、主軸はほぼ南北方向である。ＳＢ－４は、ＳＢ－３に平行して東側で検出した２×２間（約４．０×３．５ｍ）の総柱建物である。柱間は東西約１．８～２．５ｍ、南北約１．８～２．０ｍで、主軸方向はＳＢ－３同様ほぼ南北方向である。ＳＢ－５は、調査区の中央で検出した２×４間（約４．３×８．３ｍ）の総柱建物である。建物の北東部分がＳＢ－６と重なって検出している。柱間は東西約２．１～２．２ｍ、南北約１．８～２．３ｍで、主軸方向はほぼ南北である。ＳＢ－６は、調査区の中央でＳＢ－５と南西部分が重なって検出した２×２間（約４．０×５．２ｍ）の総柱建物である。柱間は東西約１．５～２．１ｍ、南北約２．４～２．７ｍで、主軸方向はＮ－１０°－Ｅである。ＳＢ－７は、ＳＢ－６の東側でほぼ平行して検出した４×３間（約７．５×５．５ｍ）の総柱建物である。柱間は東西約１．５～２．３ｍ、南北約１．５～１．９ｍで、主軸方向はほぼ南北方向である。ＳＢ－８は、ＳＢ－７の南側に隣接して検出した２×２間（約４．８×４．２ｍ）の総柱建物である。柱間は東西約２．０～２．５ｍ、南北約１．８～２．３ｍで、主軸方向はほぼ南北方向である。ＳＢ－９は、調査区の南端でＳＢ－８の南側で検出した２×１間（約５．０×３．０ｍ）以上で南側の調査区外に続くと考えられる建物である。柱間は東西約２．０～３．０ｍ、南北約３．０ｍで、主軸はほぼ南北方向である。ＳＢ－１０は、調査区の東端で検出した２×２間（約４．８×４．６ｍ）の総柱建物である。柱間は東西約２．３～２．５ｍ、南北約１．７～１．８ｍで、主軸方向はＳＢ－７・８と同様ほぼ南北方向である。



B調査区全景

B調査区遺構平面図

ＳＤ－１は、調査区の南西隅で検出した長さ 約１５ｍ、 最大幅約２．０ｍ、深さ約０．２ｍの溝である。ＳＤ－２は、ＳＤ－１と平行して東側で検出した長さ約１０ｍ、最大幅約２．５ｍ、深さ約０．１５ｍの溝である。ＳＤ－３はＳＤ－１より派生し、東西方向に検出した長さ約２０ｍ、最大幅約３．０ｍ、深さ約０．１５ｍの溝でである。ＳＤ－４は、調査区南側でＬ字状に検出した長さ約２０ｍ、最大幅約３．０ｍ、深さ約０．２ｍの溝である。溝が南へ曲折している部分で、須恵器甕口縁部・碗・小皿などの破片が大量に出土した。

８．まとめ

これまで同一台地上で調査した久留美地区の上野ノ下・丈ノ越・松ノ下の各遺跡のなかで検出した遺構、出土した遺物の量は群を抜いていた。また、Ａ調査区では１４棟、Ｂ調査区では１０棟の掘立柱建物を検出しており、そのなかには大型の建物も含まれいる。検出した建物は、Ａ調査区、Ｂ調査区とも主軸方向がほぼ同じで、各調査区で検出している主要な溝と方向が一致している。遺構の時期は、出土した須恵器・土師器・瓦などの遺物から、平安時代後期～鎌倉時代の１２世紀後半～１３世紀と考えている。しかし、出土した青磁・白磁を見てみると１２世紀後半～１４世紀とやや幅があり、若干の時期差が生じている。これらのことから、建物群の時期差や存続期間を考えていく必要がある。

このように中筋遺跡では、大型の建物の検出が多いこと、須恵器及び土師器の小皿の出土が大量であること、青磁・白磁などの磁器の出土が多いこと、出土した瓦の種類が豊富で多いこと、仏具などの出土などから寺院もしくは荘園領主の館を考えている。当遺跡の時期に久留美では、京都での寺院造営に際して瓦や日用雑器を供給するするために多くの窯が操業されおり、久留美古窯群と荘園の関係を示す資料は未だ見つかっていないが、当遺跡と古窯群との関連が注目される。さらに特筆すべきことは、出土した瓦のなかに東大寺軒平文字瓦があったことである。中筋遺跡の時期から、東大寺再建時期に相当するものと考えている。東大寺再建において瓦の供給地は、三河国伊良湖崎窯、備前国万富窯が有名である。当遺跡で出土した文字瓦はどちらのものとも同笵でなく、胎土も違うようである。このことから、東大寺の再建にあたり久留美古窯群も、瓦の供給の一翼をになった可能性が非常に高く、久留美古窯群のいずれかに東大寺瓦専用の窯が存在しているものと思われる。

最後に平成３年度～平成６年度に調査を実施した同一台地上の上野ノ下・丈ノ越・松ノ下・中筋の各遺跡は、検出遺構の時期が古墳時代～鎌倉時代とほぼ一致していることから、ひとまとまりの遺跡として検討していくべきであると考えている。

三木市文化研究資料第１４集
発掘調査概要報告第２号

三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ

平成１２年３月

編集・発行　三木市教育委員会
兵庫県三木市上の丸町１０番３０号
TEL　0794-82-2000代

印　　刷　丸山印刷株式会社
兵庫県高砂市神爪１丁目１１－３３
TEL　0794-32-1515